熊取町埋蔵文化財調査報告第27集

大久保Ｅ遺跡発掘調査概要報告書・Ⅰ

OKE89－１区・90－１区・90－２区

平成９年　３月

熊取町教育委員会

熊取町埋蔵文化財調査報告第27集

大久保Ｅ遺跡発掘調査概要報告書・Ⅰ

大久保Ｅ遺跡89－１区・90－１区・90－２区

平成９年　３月

熊取町教育委員会

はしがき

近年の発掘調査の成果には驚くべきものがあります。佐賀県吉野ヶ里遺跡や大阪府和泉市池上曽根遺跡での大規模な弥生集落、出雲の銅鐸群の発見、青森では従来の常識を変えるような画期的な発見もありました。また近年は骨董品やその鑑定がもてはやされていたりするなど古いものへの関心が高まっています。埋蔵文化財の緊急発掘調査は代々伝わる名品を珍重するのではなく、土の中から粉々に砕けた状態で検出される土器や、田畑の跡や地震の痕跡などにいたるまでを丹念に検出して記録保存する地道な作業であり、昭和40年代後半から全国で本格化しました。

発掘調査をすることなく工事を行えば、我々祖先が代々築いてきた過去は永遠に失われてしまいます。我々は発掘調査という一度きりのチャンスを最大限に活かし、慎重な発掘調査をすることが必要なのであり、そのために日々多くの労力を払っています。

本町におきましても昭和50年代半ばより発掘調査が行われ、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は38ヶ所を数えました。発掘調査の継続に伴って埋蔵文化財報告書も昨年度までに第26集を刊行し、今後調査結果も益々蓄積していくことと思います。これらの成果を基に、私達の住む熊取町の祖先の姿を偲んだり、過去の熊取町ひいては泉州地域の歴史を解明する様々な研究に活用していきたいと考えております。大久保Ｅ遺跡は平成元年から２年間駅前区画整理事業に伴って行った発掘調査によって発見された遺跡であり、実に多くの土器が出土するなどの成果を得ました。出土遺物は破片にしておよそ6500点にも及び、これらを７年間かけて徐々に整理・研究を続けてきた一応の成果を御報告致します。

教育委員会教育長　甲田　太三郎

例　言

1．　本書は平成元年から平成２年度までに熊取町教育委員会が公共事業として実施した大久保Ｅ遺跡における発掘調査の概要報告書である。

大久保Ｅ遺跡89-1区	区画整理	熊取町駅前整備課
大久保Ｅ遺跡90-1区	区画整理	熊取町駅前整備課
大久保Ｅ遺跡90-2区	区画整理	熊取町駅前整備課

2．　現地における各調査は井田匡氏（昭和61～平成２年度熊取町教育委員会嘱託職員）が行った。本書の刊行に向けての内業作業は阿部真氏（平成２～５年度熊取町教育委員会考古学技師）と前川淳が指導した。

3．　本書の執筆・編集は前川淳がおこなった。

4．　本書における標高はＴ.Ｐ.（東京湾平均潮位）を用いた。

5．　土色は、小山正忠･竹原秀雄編「新版標準土色帖」第10版（農林水産省農林技術協議事務局監修･財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を援用した。

6．　調査の実施にあたり、本町駅前整備課をはじめ関係者各位から多大なご協力・ご援助を得た。また本書の執筆に際して、阿部真氏（平成２～５年度熊取町教育委員会考古学技師）・池峯竜彦氏（堺市教育委員会）・奥田尚氏（国立橿原考古学研究所）・鈴木陽一氏（泉佐野市教育委員会）・玉谷哲氏・坪之内徹氏（奈良女子大）・西村歩氏（財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター）・米田敏幸氏（八尾市教育委員会）から有益なご教示を賜った。（五十音順）

7．　遺物の写真撮影に関しては平成７年度に立花正治氏に委託し、平成８年度に(株)阪急写真工業に委託した。

8．　調査・整理にあたっては以下の者の参加を得た。

池辺吉也・石松直・尾上賢一郎・上代憲史・川東士朗・久世公一・桑原良治・後藤久枝・阪口雅美・杉本由貴子・関井澄子・大門由香里・高浜留美・宅野京子・武田徹・田中亜紀子・田中小夜・辻本栄子・富村伊都子・前田公子・水葉希・南谷克実・森下恵子・安福佳代・山本恵子・吉田知秋・義本哲司・和田志穂

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境

第１節　熊取町の地理的環境……4

第２節　熊取町の歴史的環境……4

第３節　大久保Ｅ遺跡付近の地理的環境……7

第４節　周辺の遺跡……7

第２章　調査の概要

第１節　調査の概要……8

第２節　基本層序……9

第３節　遺構……9

第４節　遺物……10

第５節　胎土について……35

第３章　まとめ

第１節　大久保Ｅ遺跡の土器と特徴……39

第２節　堺市下田遺跡との比較……39

第３節　その他の遺跡との比較……40

第４節　その他……45

参考文献……46

遺物観察表……47

挿　図　目　次

第１図　熊取町の位置

第２図　熊取町における遺跡分布図

第３図　調査地点周辺地図

第４図　調査区位置図

第５図　調査区遺構平面図・壁面土層図

第６図　甕

第７図　甕

第８図　甕

第９図　甕

第10図　壺

第11図　高杯・器台

第12図　高杯・器台

第13図　製塩土器・たこ壺・鉢

第14図　堺市下田遺跡との比較図

第15図　周辺遺跡

図　版　目　次

図版第１　調査区全景

図版第２　遺構

図版第３　遺構

図版第４　遺構

図版第５　遺物

図版第６　遺物

図版第７　遺物

図版第８　遺物

図版第９　遺物

図版第10　遺物

図版第11　遺物

図版第12　遺物

図版第13　遺物

図版第14　遺物

図版第15　遺物

図版第16　遺物

図版第17　遺物

図版第18　遺物

図版第19　遺物

図版第20　遺物

図版第21　遺物

図版第22　遺物

図版第23　遺物

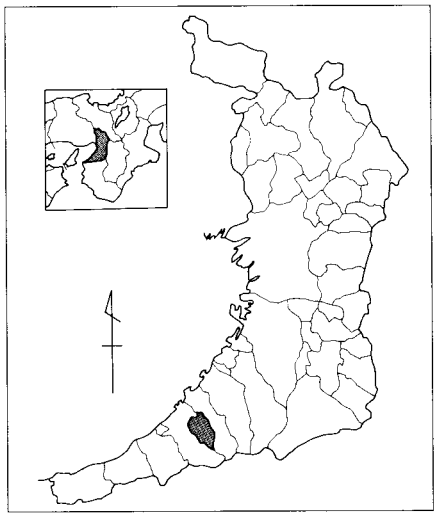
図版第24　遺物

図版第25　遺物

図版第26　遺物

第１章　地理的歴史的環境

第１節　熊取町の地理的環境



第１図　熊取町の位地

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央部に位置し、東を貝塚市、他の三方を泉佐野市に囲まれている。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉形を呈し、約17k㎡の町面積を有している。（第１図）

地形についてみると、町南部は泉州地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占め、北部は和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部よりなる。面積比では山地・丘陵部が町面積の３分の２を占めている。第２図のとおり熊取町は樫井川の下流域にひろがる扇状地（泉佐野市）と近木川下流域の扇状地に挟まれるような状況にあり、それぞれとは比較的急峻な丘陵によって隔たっている。いいかえれば熊取町は、丘陵によって周囲から隔たった状況にあり、町の外周に丘陵が存在している状況である。そしてまた町の中央部分（現在の五門・野田地区）にも大きな丘陵があるため、丘陵に囲まれた中にさらに浮島状の丘陵が存在する独特の景観を呈していたようである。このことが「クマトリ」の語源になったともいわれる。

第２節　熊取町の歴史的環境

縄文時代の遺跡とよべるものは現在のところ存在しない。成合寺遺跡や東円寺跡の調査で有舌尖頭器や石鏃数点を検出しているが、遺構に伴うものではない。

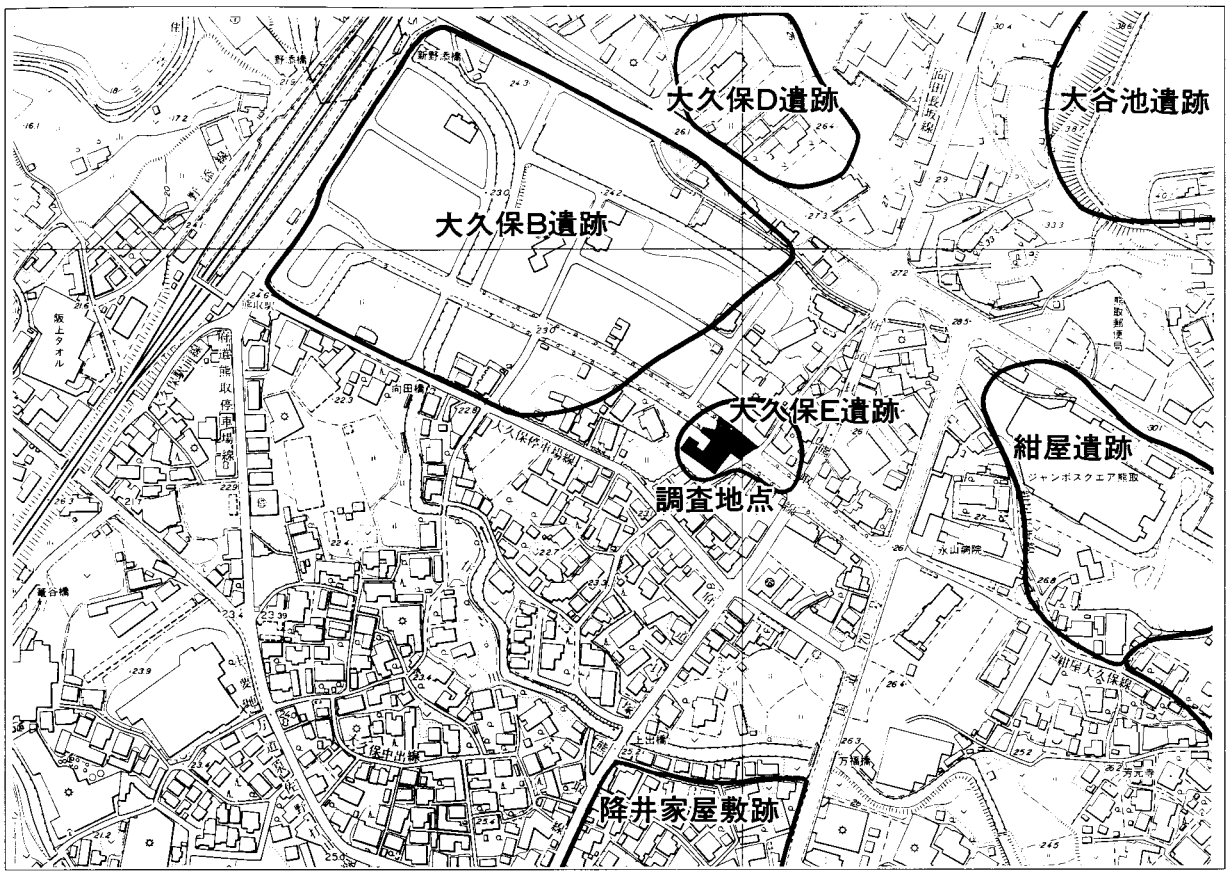
また明確に弥生時代を示す遺構を検出できた遺跡も存在しない。大久保に存在する遺跡群からは稀に弥生式土器片を検出しているが明確な遺構に伴わない。今回の大久保Ｅ遺跡の発掘調査で自然流路や溝状の遺構から大量の弥生時代末期～古墳時代初期頃の土器が検出された。弥生時代と古墳時代との境界の年代については今なお様々な研究の焦点となっており不明確で、大久保Ｅ遺跡がどちらの時代の範疇に含まれるのかは検討を要するところである。

奈良時代の遺構が住吉川をさらに上がった熊取町役場のある野田付近(東円寺跡)から検出されている。

熊取町で発見される埋蔵文化財の大部分は中世期からのものである。このことは僅かに残存する文献・資料とも矛盾しない。平安時代末期頃に野田に建立され、鎌倉時代初期頃から栄えたと考えられる東円寺と大きな関連があると思われる、特に住吉川沿岸部分での開発を中心として拡大していったと思われる。

室町時代では雨山城などの山城が多く築かれたようであるが、目下のところ明確な遺構は検出されていない。大浦中世墓地遺跡からは15世紀代を示す石蔵仏をはじめとする遺物を伴う墓地遺構が発見されている。また久保の来迎寺からは戦国期頃の土師器がまとまって出土している。近世に入ってからはさらに開発が盛んとなり、五門の中家住宅（遺跡名）付近や大久保の降井家屋敷跡から遺構が検出されるとともに、溜池なども多く築かれていったことが発掘調査によって確かめられている。

第２図　熊取町における遺跡分布図



第３図　調査地点周辺地図

第３節　大久保Ｅ遺跡付近の地理的環境

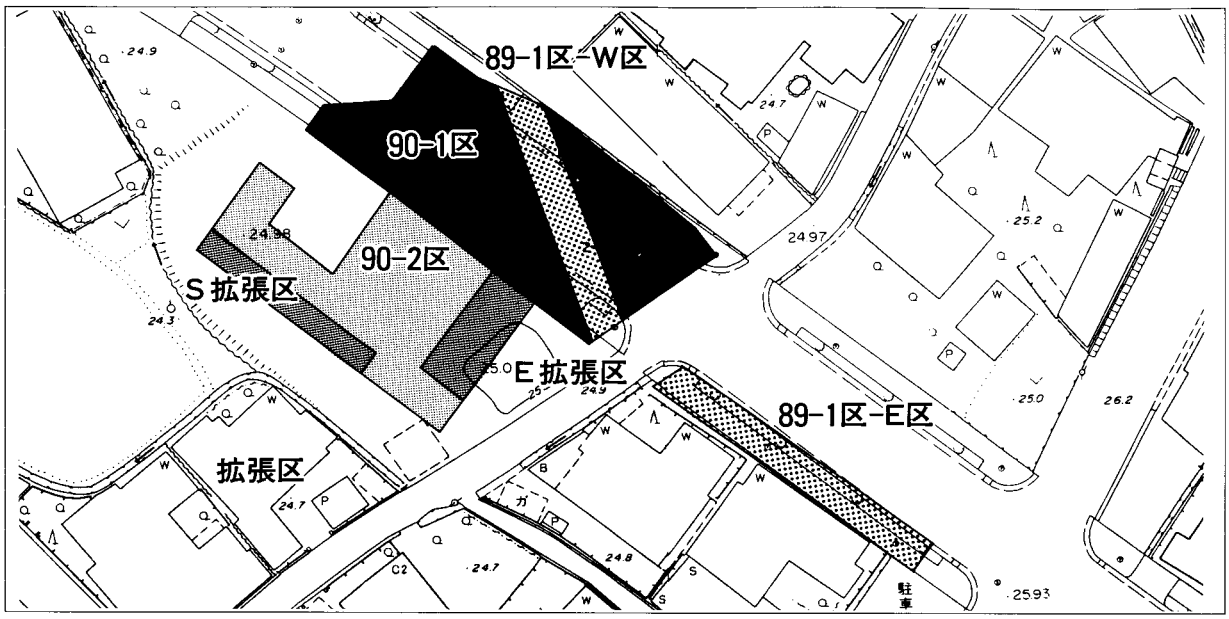
熊取町の西北端では、見出川と和田川が合流した住吉川が泉佐野市に流れ込む際に小さな扇状地状の地形を形成しているが、その扇の要の部分に大久保Ｅ遺跡は位置している。第１節で述べたクマドリ状地形の中で唯一丘陵の途切れている部分に相当する。従ってこの地点は大阪湾岸から現在の熊取に入ろうとする際の唯一の玄関口に相当する地域であるため、熊取町で最も古くから発達したようである。大久保Ｅ遺跡の調査では、多くの製塩土器が出土していることからも、その地理的環境がこの遺跡の性格を形成していると思われる。

第４節　周辺の遺跡

第３図のように大久保Ｅ遺跡の周辺の遺跡としてJR熊取駅前には大久保Ｂ遺跡がある。大久保Ｂ遺跡では昭和63年から平成元年の調査で溝や弥生～古墳時代の土器破片が少量検出されているが目下のところ建物跡等はなく、大久保Ｅ遺跡との直接的な関連は摑めていない。

地形的にこの付近は多くの小河川が存在する氾濫原のような地形を呈していたようである。また大久保Ｅ遺跡を含め熊取町内では中世から近世の開発時にそれまでの起伏のある地形を削るなどして平滑な水田としているため、平安時代以前の地形を確認することは非常に稀であり、調査の大きな障害となっている。従って古代時代の遺構として発見されるのは比較的深さのある溝や自然流路に限られているのが現状である。今後の調査で周辺地から新たな遺構が発見される可能性もあるが、大久保Ｅ遺跡の北西にひろがる泉佐野市の山出遺跡やその周辺の遺跡のありかたにも注目すべきであろう。

第２章　調査の概要



第４図　調査区位置図

第１節　調査の概要

本報告書には大久保Ｅ遺跡で1990年から1991年に行われた３回の公共事業に伴う発掘調査を集録している。調査区の位置関係は第４図のようになる。

熊取町駅前土地区画整備事業における熊取町大久保127-1他４筆の地点では雨水管工事が計画され、その開発面積が500㎡を超えることから、1989年７月１日から９月30日の間に埋蔵文化財試掘調査を行い、遺構と多くの土器が発見され熊取町第37番目の遺跡である大久保Ｅ遺跡となった。(OKE89-1区)

その89-1区の調査は、雨水管が配置される507㎡に対して第４図のように東区（Ｅ区）と西区（W区）の二つの調査区域を設定して機械掘削によって掘り進め、主にその西区の地表下約1.2ｍ付近に古代以前の遺物を含む土層が確認された。また自然流路と思われる遺構の埋土の中からは弥生時代末期～古墳時代初期頃のものと思われる土師質の土器が多数検出された。この調査は本来細長い雨水管工事に伴う調査であったため、その調査区域を拡張することをせず、主に遺物の出土状況の確認とその取り上げ作業が調査の中心となった。

その後1990年８月から1991年３月にかけて駅前土地区画整備事業の宅地造成工事・道路建設工事に伴って、1989年の調査地点を含むより広範な一帯の熊取町大久保474-2、476-1、476-2の約918㎡で発掘調査を行うこととなり、1989年の調査によって検出した遺構と遺物に連続する成果をあげることになった。(OKE90-1区・OKE90-2区)

第２節　基本層序

大久保Ｅ遺跡の基本的な層序は、89-1区・90-1区・90-2区の調査区毎に大きな相違はないので89-1区W区西壁を基本層序として第５図に記載した。

近年の開発に伴う大幅な盛土（層厚30～50cm程度土層図では省略）

①灰色砂質土　旧耕作土（15cm程度）

②灰色砂質土　①の床土（６cm程度）

③明黄褐色砂質土　④と同質の土で金属成分が沈着しているもの。（８cm程度）

④浅黄色砂質土　中世の包含層　この層は大久保Ｅ遺跡の調査区全体に広がっており、以下の層を削平している。（12cm程度）

⑩暗灰黄色色砂質土　④中世の耕作土を形成する際に整地を行った盛土か、もしくは自然流路SR-1があることによって窪んでいる地形に上の④が落ち込んだもの。古代以前の流路SR-1やSR-3のために水分が染み込んで変色・変質しているものと思われる。（５cm程度）

⑤灰黄褐色粘質土　⑩とほぼ同質。（最大14cm程度）

⑥明黄褐色粘質土　自然流路SR-1の埋土最上層。中世の遺物は含まない。（最大10cm程度）

⑦褐灰色砂質土　自然流路SR-1埋土。弥生時代末期～古墳時代初期頃の土器がみられる。Ａ層土器溜Ａ。（最大18cm程度）

⑧明黄褐色粘質土　SR-1埋土。

⑨褐灰色粘質土　SR-1埋土。黒っぽい粘土で多くの土器を含む。Ｂ層土器溜Ｂ。（最大20cm程度）

⑪黄灰色砂礫、地山。Ｃ層土器溜Ｃ

焦点となる大量の土器は、流路の底部分、つまり⑪黄灰色砂礫（地山）の上にその多くが落ち込んでいる状況である。また第５図には図示できなかったが、調査区内にはさらに別に黒褐色粘質土が遺構などの凹状地形の上に厚く堆積している場合があり、⑦⑨のような自然流路SR-1埋土よりさらに上層の所産と思われる。

第３節　遺構

検出面には大小の溝状の遺構が検出された。調査区の北東には最も大きな規模をもつ流路SR-2がある。SR-1は北→東→南→西と調査区の中を時計回りに蛇行する自然流路である。数度にわたって埋没したものと考えられ、埋土には弥生時代末期～古墳時代初期頃の土器が数多くみられる。またSR-1と合流（もしくは分岐）するような状況で自然流路SR-4が検出されている。SR-4は土器からSR-1の下層とほぼ同時期のものとみられ、SR-1の埋土の上層はSR-4の一部右岸を上から埋没させている。

自然流路SR-1

89-1-W区のトレンチ調査で発見された大量の土器を含む溝状遺構は自然流路（小河川）と考えられる。この自然流路は第５図の平面図のように２段に落ち込んでいるようである。これは数度にわたって徐々に堆積したことを示しているものと考えられる。SR-1の西岸部分は深く、多くの土器がここから検出されるが、この部分は基本層序でも簡単に触れたとおり上層の新しい方からＡ層Ｂ層Ｃ層と分層され

ている。但し現段階では層毎に検出された土器を時代毎に識別するには至っていない。

またSR-1は北方向から東→南→西と蛇行しているが、90-2-E拡張区において急激に深さと流路の幅を大きくする部分がある。この部分は黒褐色の粘質土を埋土としており、SR-1の本来の埋土とは大きく相違をみせている。この部分からのみ明かに庄内式新相と判る土器が検出されていることと併せて、SR-1は調査区の南端部分でさらに新しい堆積が生じたものと考えられる。

流路SR-2

調査区の北東端に検出された巨大な溝状の遺構で、幅約6m、深さ約1m程度を測る。また89-1区のE区北側にも連続していることが確認されている。埋土は黒褐色の粘質土を中心とし河川に特有の砂礫はほとんどみられず、遺物が割合少ないことは特徴といえる。断面でみると両肩部は部分的にほぼ垂直状になっているところもあるため人工的なものとも考えられるが、目下のところ確定できない。

また切り合いの上では土器を数多く検出するSR-1を完全に切断していることが観察される。

いつ頃どのような目的で新たに掘削された溝か、あるいはSR-1が廃絶した後唐突に生じた自然流路か不明であるが、切り合いの状況などを考えれば人工的に掘削された溝であると思われる。また他の可能性として中世に至って大久保周辺を荘園等で開発する際に用水路の開削や河川改修を目的として整備された水路であったとも考えられるが目下確定できていない。

自然流路SR-4

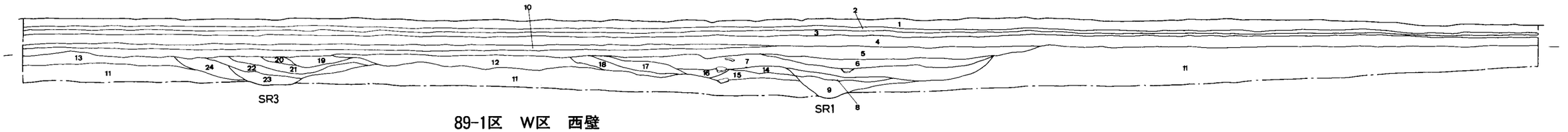
SR-1のすぐ東岸にはSR-1と同方向の流向をもち、SR-1と合流（もしくは分岐）するような状況で流路SR-4が検出された。SR-4はSR-1の旧状であると考えられるが一応SR-4とした。流路の幅は約2.5mで、検出面からの残存する深さは約0.3mである。埋土は黒褐色に見える粘質土であるが、河川に特有の大きな砂礫はなく、川床にシルト・細砂がみられる程度であることから流路内には常時水量がほとんどなかったものと思われる。流路内からはSR-1とほぼ同時期の土器を検出している。

第4節　遺物

大久保E遺跡で出土した遺物の総数は約2×2cm以上の大きさの破片を数えた場合約6687点である。このうち弥生時代末期～古墳時代初期頃の土器の破片数は6468点であり、石膏などを加えてほぼ完形に復元できたものは110個体ある。また図化できたものは402点で本報告書にはそのうち351点を図示した。

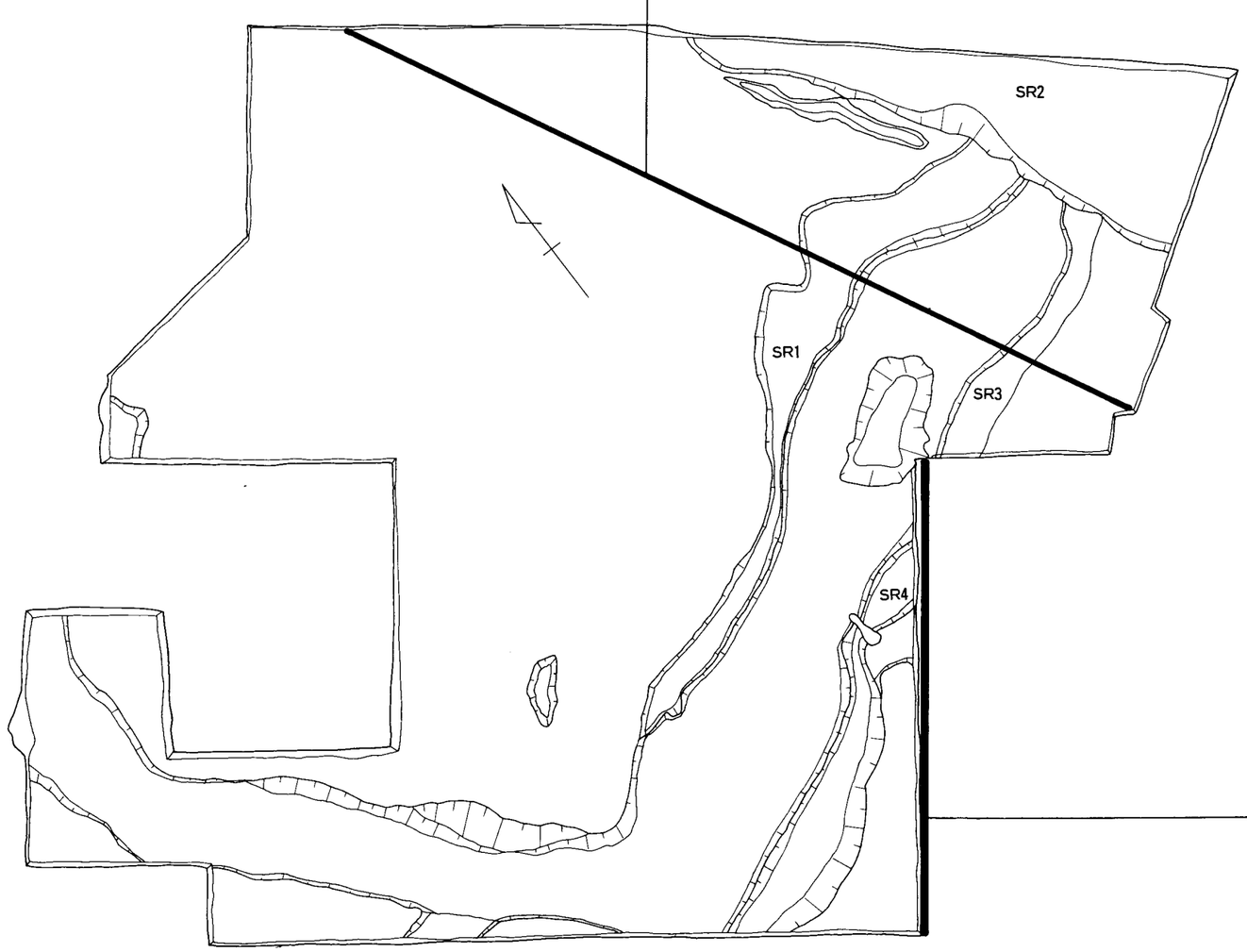
検出された土器群は概して第V様式の特徴を示すが、個々には一定の特徴を有するものがあり、器種ごとに幾種類かにグループ分けができそうである。しかしこのグループ相互における相違が製作年代の時期差を示すものかは目下のところ確認できない。

また発掘調査当時の報告では、土器群は大久保E遺跡89-1区のトレンチ状調査の際に記録した西壁面土層図（第6図）に観察できるとおり、大別して自然流路SR-1の埋土である3つの土層から出土したと報告されている。この3つの層は発掘調査時に89-1-W区（Eトレンチ）土器溜A（A層）・土器溜B（B層）・土器溜C（C層）と呼称された。A層は褐灰色砂質土（第6図土層番号7　10YR6/1褐灰色砂質土）、B層は褐灰色粘質土（第6図土層番号9　10YR5/1褐灰色粘質土）、C層は地山と考えられる黄灰色砂礫層（第6図土層番号11　2.5Y4/1黄灰色砂礫）であり、いずれも自然流路を示すものである。土器の多くはSR-1の川床であるC層の上面に落ち込んだ状態で検出されるが、SR-1の埋土であるA



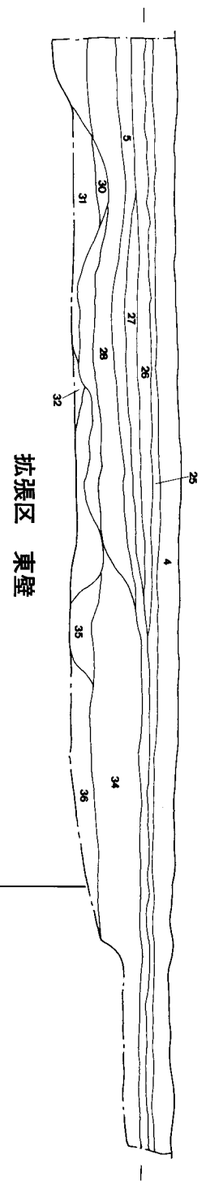
89-1区　W区　西壁

0　4m



0　10m

1	N	5/	灰色	砂質土(耕作土)
2	5Y	6/1	灰色	砂質土(旧耕作土)
3	10YR	6/6	明黄褐色	砂質土(床土)
4	2.5Y	7/4	浅黄色	砂質土
5	10YR	5/2	灰黄褐色	粘質土
6	10YR	6/6	明黄褐色	粘質土
7	10YR	6/1	褐灰色	砂質土
8	10YR	6/6	明黄褐色	粘土
9	10YR	5/1	褐灰色	粘質土
10	10YR	4/2	暗灰黄色	砂質土
11	2.5Y	4/1	黄灰色	砂(地山)
12	2.5Y	5/1	黄灰色	砂礫
13	2.5Y	6/1	黄灰色	砂礫
14	5Y	4/1	灰色	砂
15	5Y	6/1	灰色	砂礫
16	2.5Y	4/1	黄灰色	粘質土
17	2.5Y	5/1	黒褐色	砂礫
18	10YR	4/2	灰黄褐色	砂質土
19	2.5Y	6/4	にぶい黄色	シルト
20	2.5Y	5/2	暗灰黄色	砂
21	10YR	5/6	黄褐色	砂質土
22	N	7/	灰白色	シルト
23	5Y	4/1	灰色	砂礫
24	2.5Y	7/2	灰黄色	シルト
25	7.5Y	6/1	褐灰色	粘質土
26	2.5Y	7/4	浅黄色	砂質土
27	10YR	6/2	灰黄褐色	砂質土
28	10YR	7/2	にぶい黄橙色	粘質土
29	7.5YR	3/1	黒褐色	砂質土
30	10YR	6/4	にぶい黄橙色	砂礫土
31	10YR	7/6	明黄褐色	シルト
32	10YR	6/1	褐灰色	シルト
33	7.5YR	6/8	橙色	砂礫土(地山)
34	10YR	7/6	明黄褐色	シルト
35	10YR	5/1	褐灰色	粘質土
36	10YR	7/1	灰白色	シルト



第５図　調査区平面図・壁面土層図

層・B層からも多くが検出されている。このA・B層は自然流路SR-1の河岸部における河川堆積土的な性格の地層と考えられ、土器はこの三層毎に区別して採取されている。しかしこの三層毎に特徴の異なる土器が出土しているわけではなく、各層相互に特徴の共通する土器が含まれているようであり、A層B層C層を時間的に区分するには至っていない。

甕

甕は破片数5370点で、このうち図示したものは150点である。

甕はその大きさ・容量や外形、調整方法などは様々であるが、ほぼ総てが庄内併行期におけるいわゆる伝統的第V様式の系譜上にあるものと考えられる。ほぼ総ての甕が割合厚めの器壁からなり、体部を上下に分割して成形した痕跡を残し、外面に粗いタタキメがみられ、ハケメやケズリはみられない。

但し90-2区からは非常に薄手の庄内式の甕に類似したものや、外面にハケ調整の残る布留系の甕に類似したものを数点検出しており特筆される。

それぞれの甕の口縁部や体部の形状は一定の特徴をもっているため、6種類に分類した。

I類　長胴甕

Ia類　（実測図44点）

10や23に代表できるが、これは今回の出土した甕の中で最も個体数が多いもので、比較的球胴に近いものを含めやや長めの楕円もしくは逆卵形の体部に比較的短い口縁が接続している。下体部は曲線的で球形化が進んでいるともいえる。口縁は外反するものと直線的に開くものとがあるが、その差異を明確に振りわけるか否か検討を要する。底部は突出した平底であるものが多いが、10や32は突出せず平坦である。

5～6本を1単位とする叩き目は右上がりであり、口縁部の外面には認められないが、底部外面にまで丁寧に及んでいるものがあり装飾的な感がある。

Ib類（実測図5点）

3や8のように中～小型の法量のものに限られるが、Ia類に比べると下体部が底部にかけてカーブを描かず、上体部から下体部・底部にかけて直線的であることが特徴である。但し小型の土器になるほど外形上の規格が曖昧になる傾向があるために、Ib類がIa類に対して明らかな特殊性があるかどうかは検討を要する。

Ic類（実測図4点）

114や136のようにIa類の甕をさらに上下に扁平にしたような形状で、下体部に比べて上体部が短いものということができる。

Id類（実測図1点）

140の1点のみである。大久保E遺跡出土甕中最大で、特に上体部が長胴化している。口縁は端部を欠損しているものの外反していることがわかる。

II類　球胴甕

体部はほぼ球形で、V様式の甕の中でも球形化が最も進んだものと考えられる。球胴の甕は全体的に器壁が薄く、赤い色調をみせる。同じ大久保周辺地の粘土としても、採取地の違いや粘土採取時期、焼

成状況によって色調に特定の変化があることも考えられるので、さらなる観察が必要である。

IIa類（実測図16点）

25や31や121が典型であり出土個体数は決して少なくない。その特徴は球形の体部に小さく突出する底部がある点であり、外反する口縁が付く。叩き目は５～６本１単位の右上がりで底面まで調整されている。

IIb類（実測図15点）

77や86のように球形の体部に直線的に開く口縁が付くものである。後の庄内系や布留系の甕へ繋がるものであるのかは慎重な検討を要する。

IIc類（実測図２点）

52や84のように直線的に開く口縁は非常に長い。体部は球形でIIb類に類似するものである。

III類　仮称：有頸甕（実測図４点）

４や46に代表されるが、その特徴は口縁が他の甕と比べて直立しながら先端が僅かに外折気味になっているところで、上体部（肩部）は上方に長くあたかも頸状を呈している感がある。直立気味の口縁基部の外面には叩き目がなく、板状工具によるナデが見られる。口縁の内面には指抑えを残すものもあるが、ナデによって細部に至るまで調整されるものが大部分である。叩きは５～７本を単位とし、上下分割成形のため体部の半分目を境として叩き目の方向が異なっていることが多い。また器壁は比較的厚目で、底部には分厚い平底を突出させている。この甕は一見古相を帯びているようであるが、下体部は極端に球形化が達成されているという印象もある。

IV類　庄内系甕（実測図３点）

形状および調整方法などの特徴は上田町II式甕・庄内甕に非常によく似ているが、その胎土は生駒西麓のものではなく、他の伝統的第Ｖ様式の甕と同様の大久保Ｅ遺跡周辺の在地のものに類似しているように見える。ただし顕微鏡による胎土の比較研究では129他数点が加賀南部地方の粘土ではないかとの報告がされていることは特筆すべきところであろう。

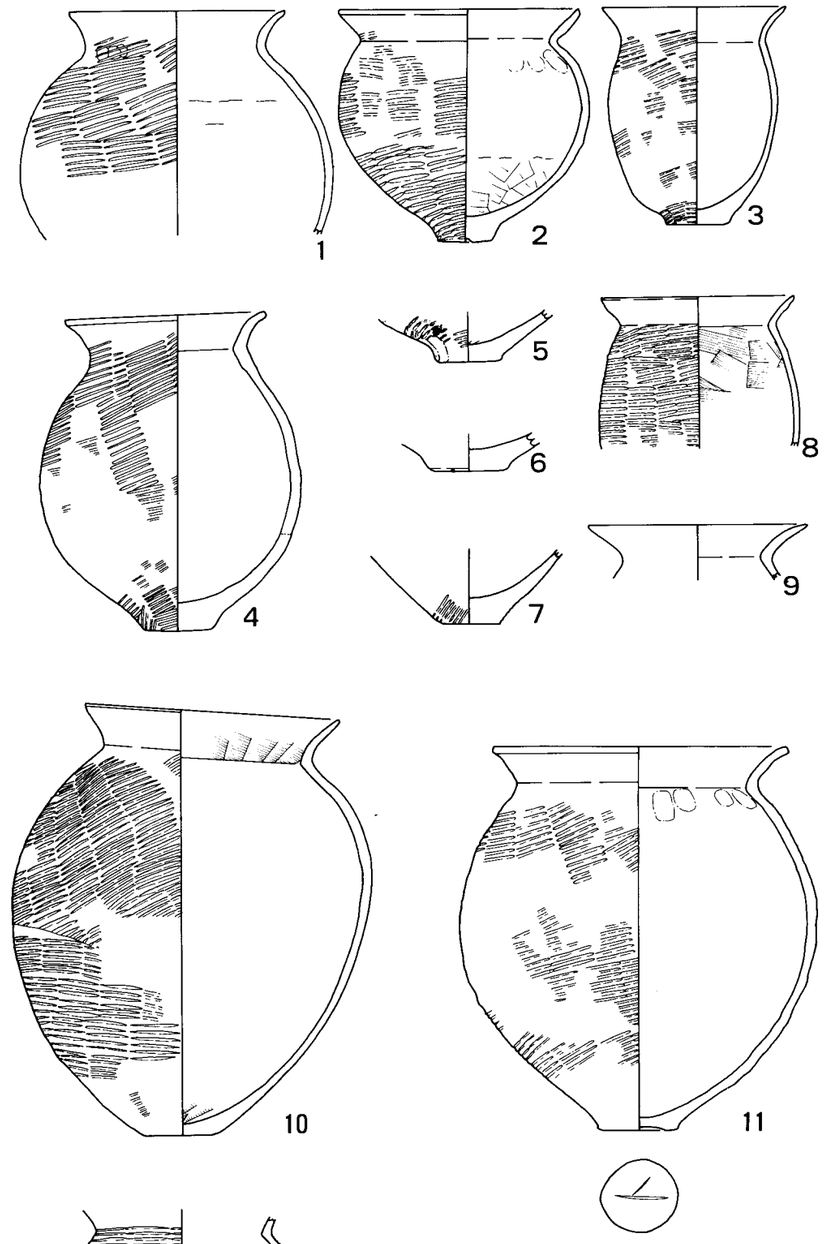
出土点数は復元できたものが129の１点だけでほかに口縁部分のみの破片が数点存在するが、それらの出土地点はいずれも90-2区からであり、複雑に切り合う流路のなかで出土している。

129の表面は摩耗して調整は不明瞭であるが、口縁は僅かに内湾して、やや縦長の球形の体部の器壁は極めて薄くヘラ削りがされていると思われる。器高は17.5cm、容量は2.0ℓを測りいわゆる庄内甕よりもやや小さめであると思われる。

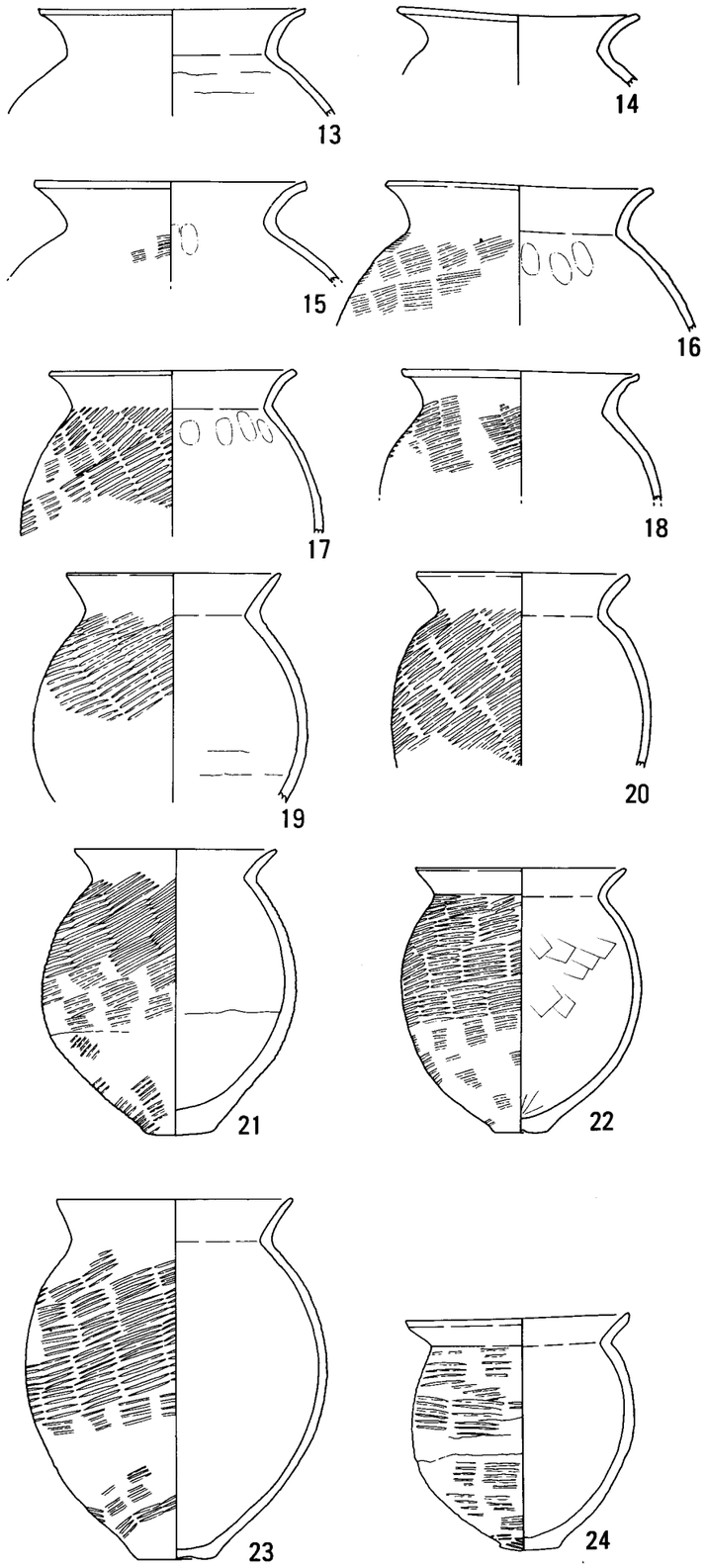
Ｖ類　布留系甕（実測図２点）

出土点数は４点ほどを数えるが口縁部分ばかりの残存で完全に復元できたものはなかった。口縁がやや内湾気味であったり外面にハケメがあるなど布留式の特徴を有していると考えられる。ただし胎土の比較観察ではいずれも大久保Ｅ遺跡周辺の在地という結果が出ている。また出土地点はいずれも90-2区からである。

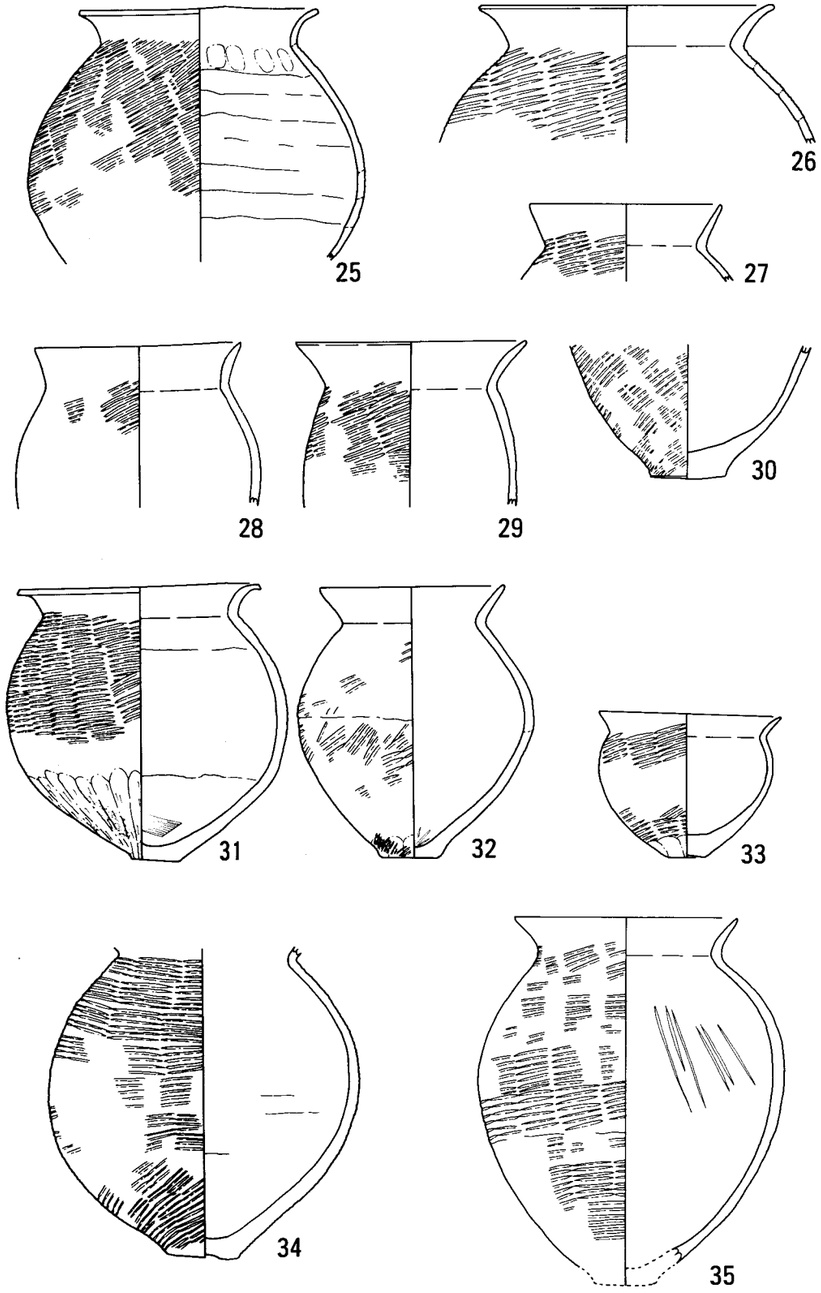
134は相対的に長めの直線状の口縁を有し、ほぼ球形の体部を有する。胎土は在地産と報告され非常に緻密で、器壁は極めて薄い。摩耗で調整は判然としないが、煮沸時の二次焼成痕が残っている。器高は17cmと割合小さく布留甕の標準的なものよりはかなり小さいと思われる。



89-1区　W区SR-1　土器溜A　出土



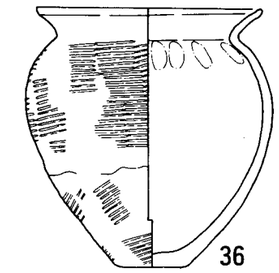
89-1区　W区SR-1　土器溜B　出土

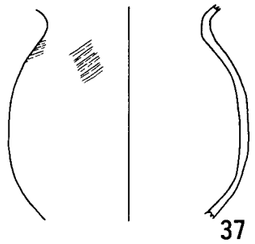


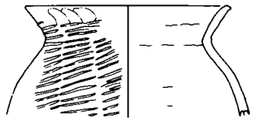
89-1区　W区SR-1　土器溜C　出土

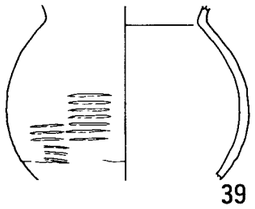
第6図　甕

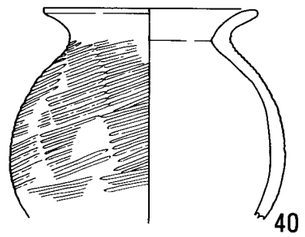
15～16

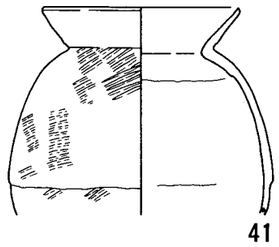

36

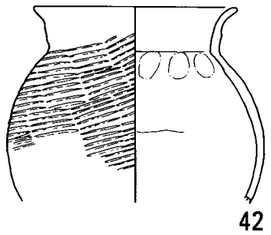

37

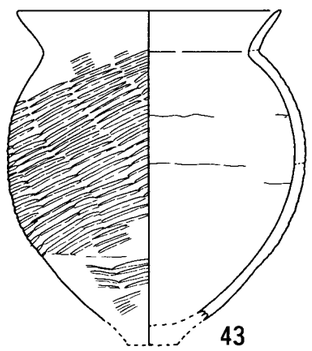

38

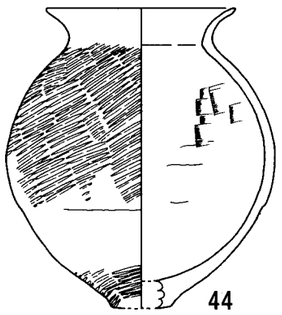

39

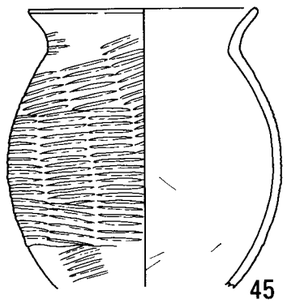

40

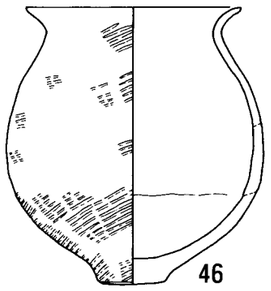

41

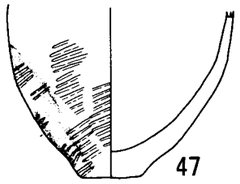

42

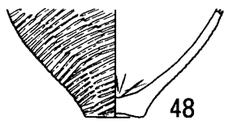

43


44


45

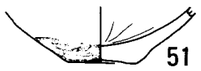

46


47

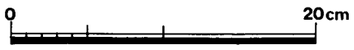

48

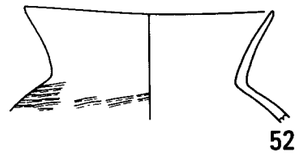
49

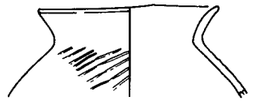
50

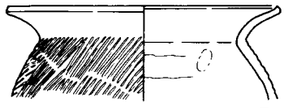

51

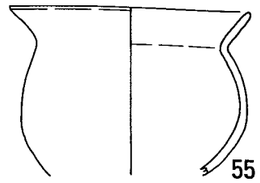
89-1区　W区　出土

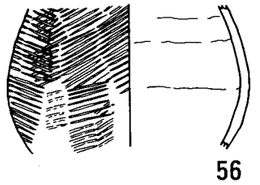


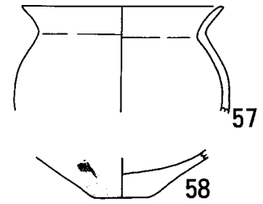

52


53

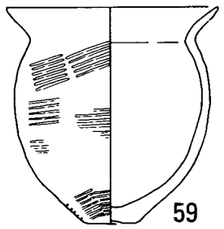

54

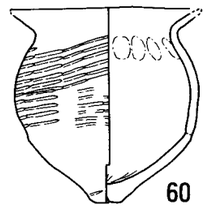

55

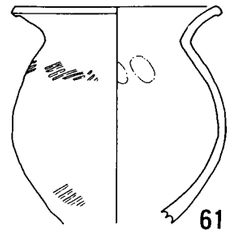

56

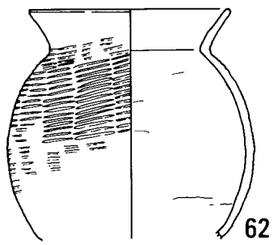

57

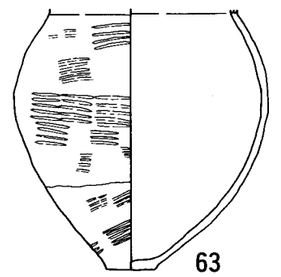
58

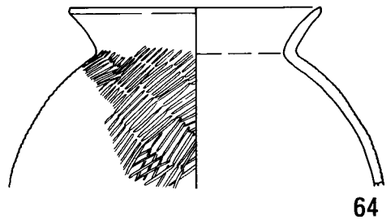

59

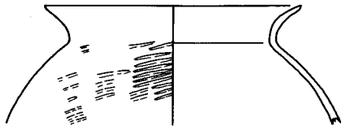

60

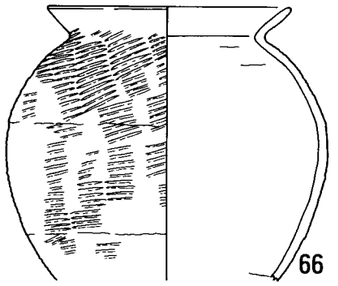

61

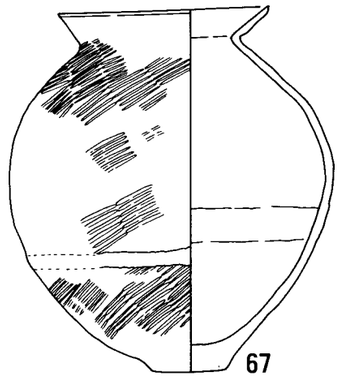

62

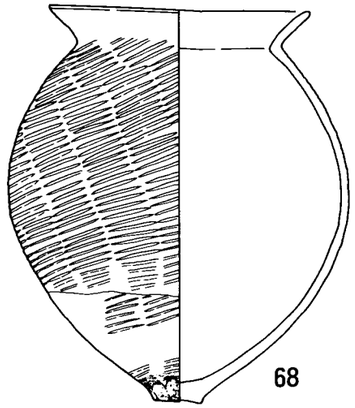

63

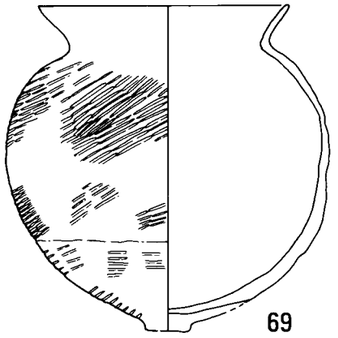

64


65


66

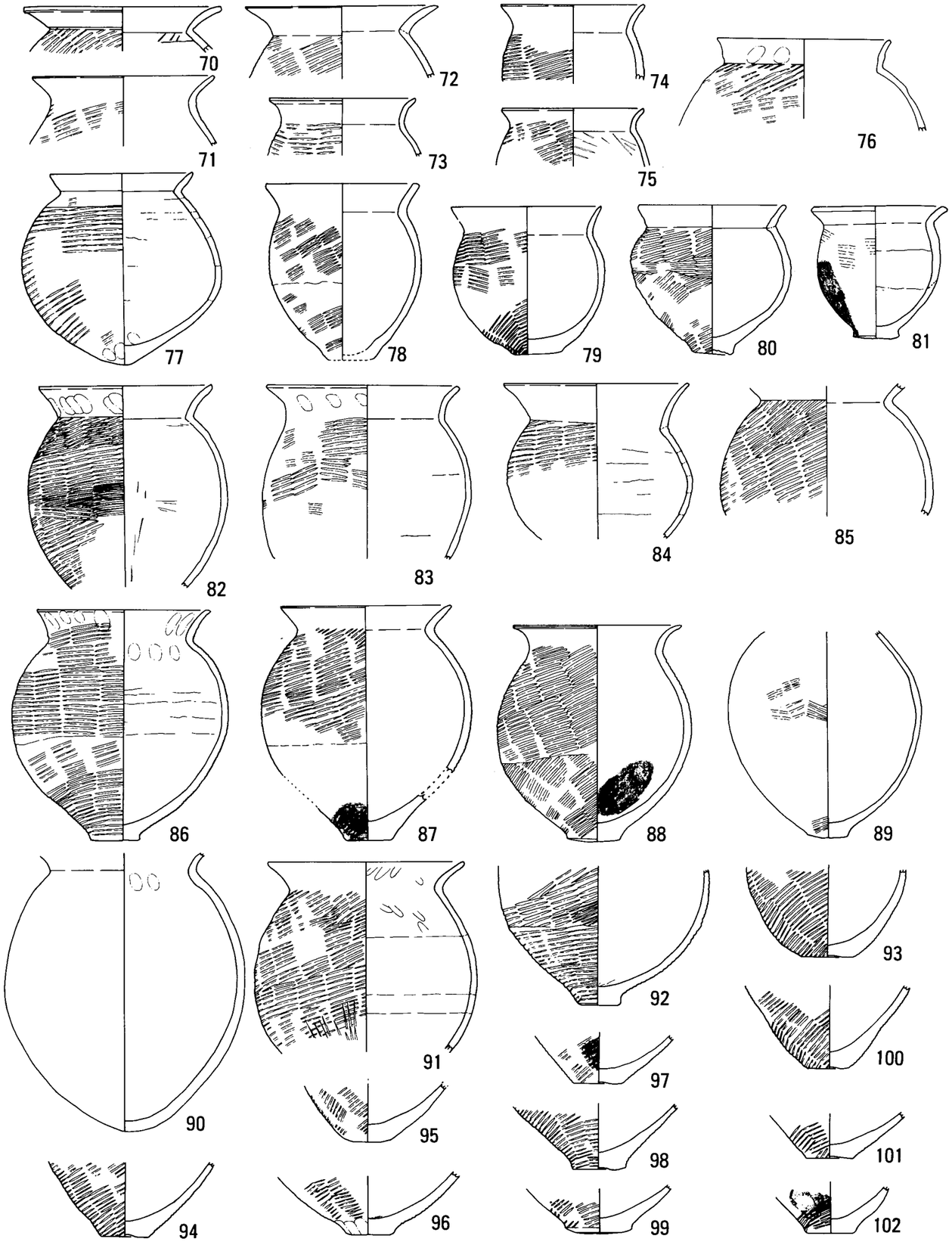

67


68

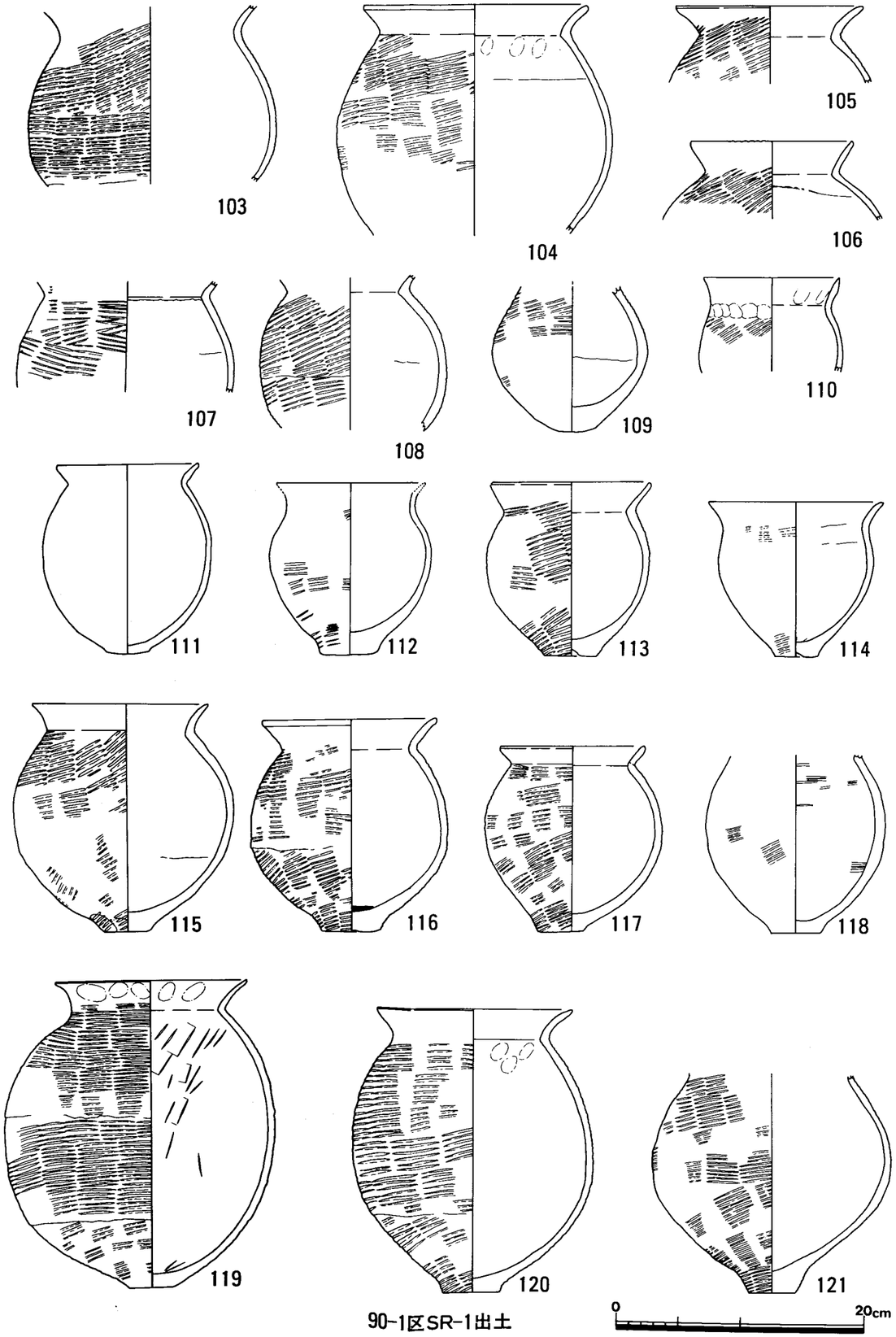

69

第7図　甕

89-1区　E区　出土

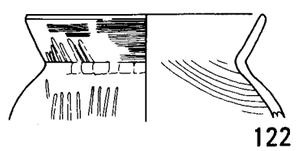


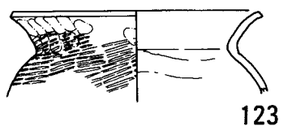
90-1区　出土



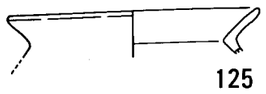
90-1区SR-1出土

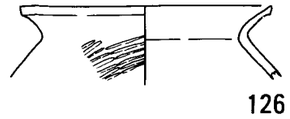
第8図　甕

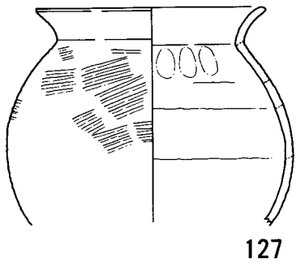

122

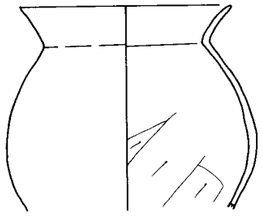

123

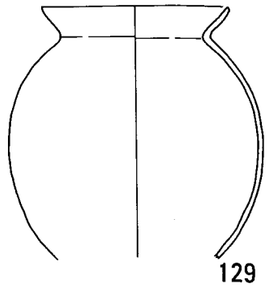
124

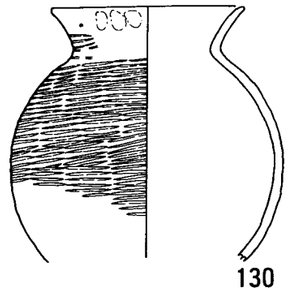

125

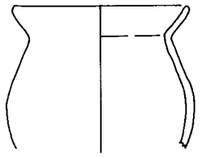

126

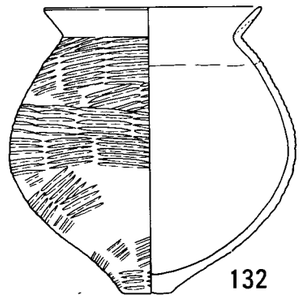

127

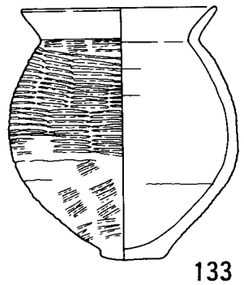

128

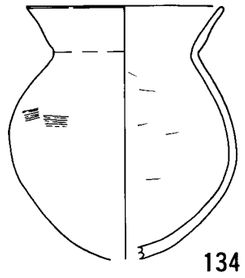

129

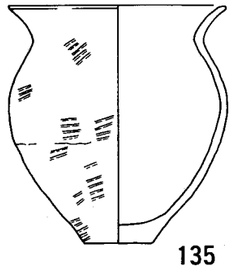

130

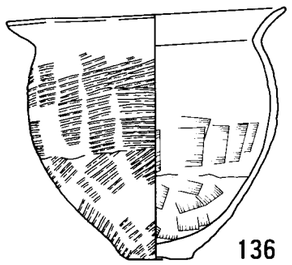

131

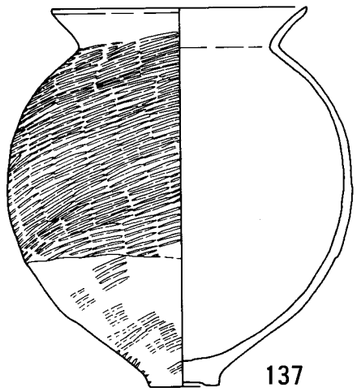

132

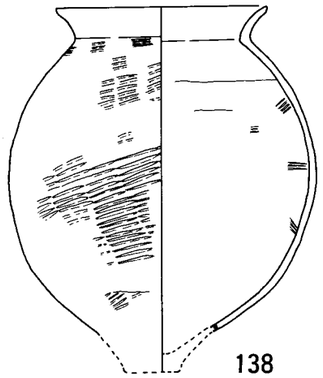

133

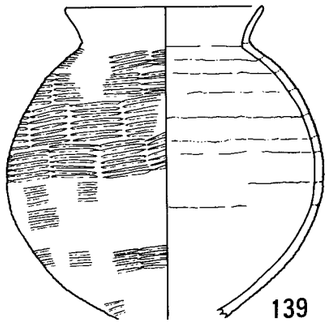

134

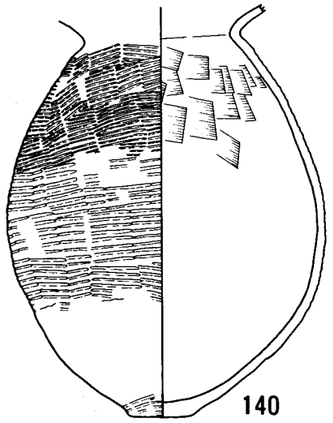

135

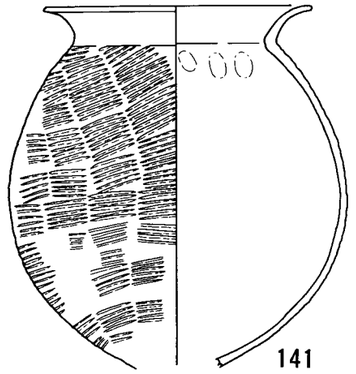

136

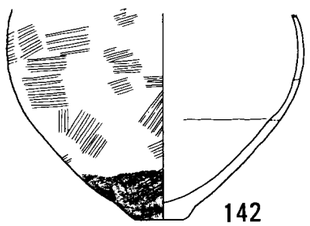

137

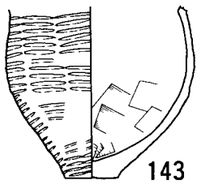

138

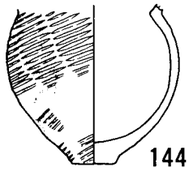

139

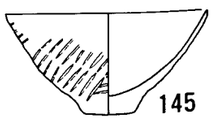

140


141


142


143

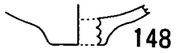

144


145

90-2区　出土

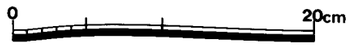
146

147


148

149

150



第9図　甕

122は口縁が僅かに内湾し、胎土は在地産で緻密であり、器壁は比較的厚い。外面には口縁部にまで達する縦方向のハケメと煮沸時の二次焼成痕が観察できる。

IV類・V類は庄内・布留とはしたが、曖昧でどちらともつかず、それぞれが全く異なった特徴を有している状況である。

VI類　搬入系甕（実測図1点）

ほぼ完形の90のみの出土ではあったが、色調は独特の黄褐色を呈し、胎土はおそらく徳島産のものであるとされ、外形は長楕円形で丸底であることが大きな特徴である。口縁は非常に短く外反しており、器高は24.8cmと大型である。

壺

壺の形状は非常にバラエティに富む。今回試験的に外形的特徴から5種類に分けてみたが年代を区別することはできない。出土地点も外形によって一定していない。また明らかに新しい部類に入るとされるII類の小型壺も調査区の中では特定の場所に限定して出土していない。

Ⅰa類（実測図28点）

208に代表されるように二重口縁の壺に類似した口縁を有し、体部はやや横に長めの球胴状を呈し、小さな円形の粘土板を接合して撫で付け底にしている。器高が30cm前後を測る大型のものを中心とするが、173・190・192のような20cm前後のものと容量的に2種類に分けて考えられる。また166のように口縁の内外に波状文を施したものや153のように口縁の接合部に一条の突帯をもつものがあり、さらに185・200など口縁には様々なバリエイションがある。

Ⅰb類（実測図2点）

152や163のように体部外面にタタキ目があるなど甕のようにも見えるもの。

Ⅰc類（実測図2点）

160・161のように体部の形状がⅠ類としての特徴を有するものの口縁が長く直線状に開くものである。

II類

小型壺と呼べるもので、外形は甕に似ている感がある。

IIa類（実測図3点）

154のように体部が丸い球胴で直線的に開く長めの口縁が付く平底のものである。

IIb類（実測図5点）

155や191のように通常小型器台の上に設置されると考えられている。口縁は短くまっすぐ立ち上がる。

IIc類（実測図2点）

177・209・210のように小型の器台とセットとなるいわゆる小型三種の土器といわれるものであり、いずれも90-2区から出土している。

III類（実測図4点）

156や197のようにやや稜のある球胴状の体部に長く直線的に開く口縁が付く小型のもので、197には底部に穿孔がある。形状は比較的新しい部類に入ると思われるもので、土師器に連なるものであろう。

IV類（実測図３点）

158のように体部に比べて大きな平底を付け、非常に短い口縁を有するものである。体部外面にタタキ目があるものもあるが、概して成形はおおざっぱで器壁が指オサエによってでこぼこしている。

V類（実測図３点）

177や178のようにやや縦長ながら球胴の体部に極めて短い口縁があり、底部は指オサエによってつまみ出したものである。口縁は178のように一条の輪状の場合もある。

VI類（実測図１点）

167は口径が30cm程度と推定される極めて大きなものである。器壁は薄く、内面に波状櫛描文と口縁端部に刻み目文がある。口縁のみの残存ではあるが、体部はおそらく縦に長い巨大なものであろう。

高杯

高杯は破片を含めて出土点数は319点と多い。主に外形的特徴から５種類に分類してみたが、さらに細分することは可能であろう。

成形上の特徴として共通して見られる点は、脚柱を有する高杯の杯と脚柱の接合方法である。脚柱はもともと中実であったものを棒状の工具で突き出して中空にしたものか、あるいは棒状の道具に粘土を巻き付けて成形したのち棒を抜き去ったものかは不明であるが、のちに杯部・脚台と脚柱とを接合する際にいわゆる円盤充填法的に脚柱の上と下から粘土を充填している。特に目立つのは杯の接合時に脚柱の穴の下から粘土を棒状の工具で押し込んでいる痕跡を明瞭に残すものが多いことである。

Ⅰa類（実測図41点）

237や283を代表例とし出土数が多いタイプである。長い脚柱を有し、器高は13～20cmと大型で、杯底は内湾し、口縁は比較的大きくなめらかに外反する。調整は不明瞭だが杯・脚台・脚柱ともにはナデによるものと思われ、脚柱外面に磨かれた痕跡を見つけることは難しい。また出土地点はSR-1を中心とし、伝統的第Ⅴ様式の甕群と年代を一致させるものと思われる。

Ⅰb類（実測図14点）

222や257などⅠa類と同様に口縁が外反する杯であるが、法量はやや小さく、脚柱が短くなり、稜も不明瞭である。ほぼ完形に復元できたものは極めて少なく今後の研究課題が多い。

Ⅰc類（実測図１点）

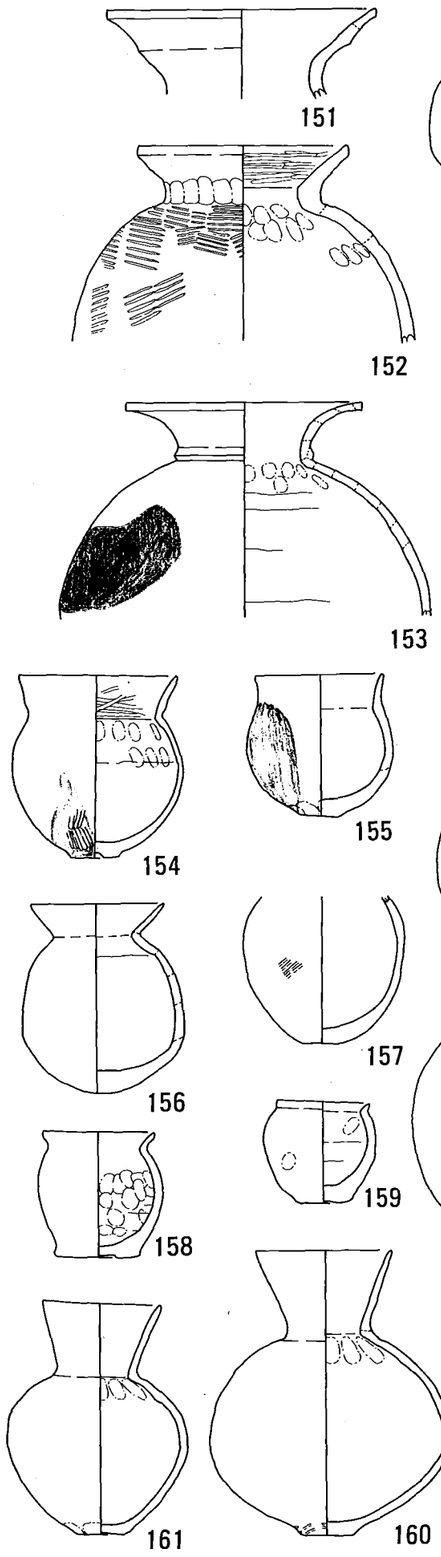
器形法量ともⅠa類とほぼ同じであるが、228のように脚台が内湾して開く特徴がある。

Ⅰd類（実測図３点）

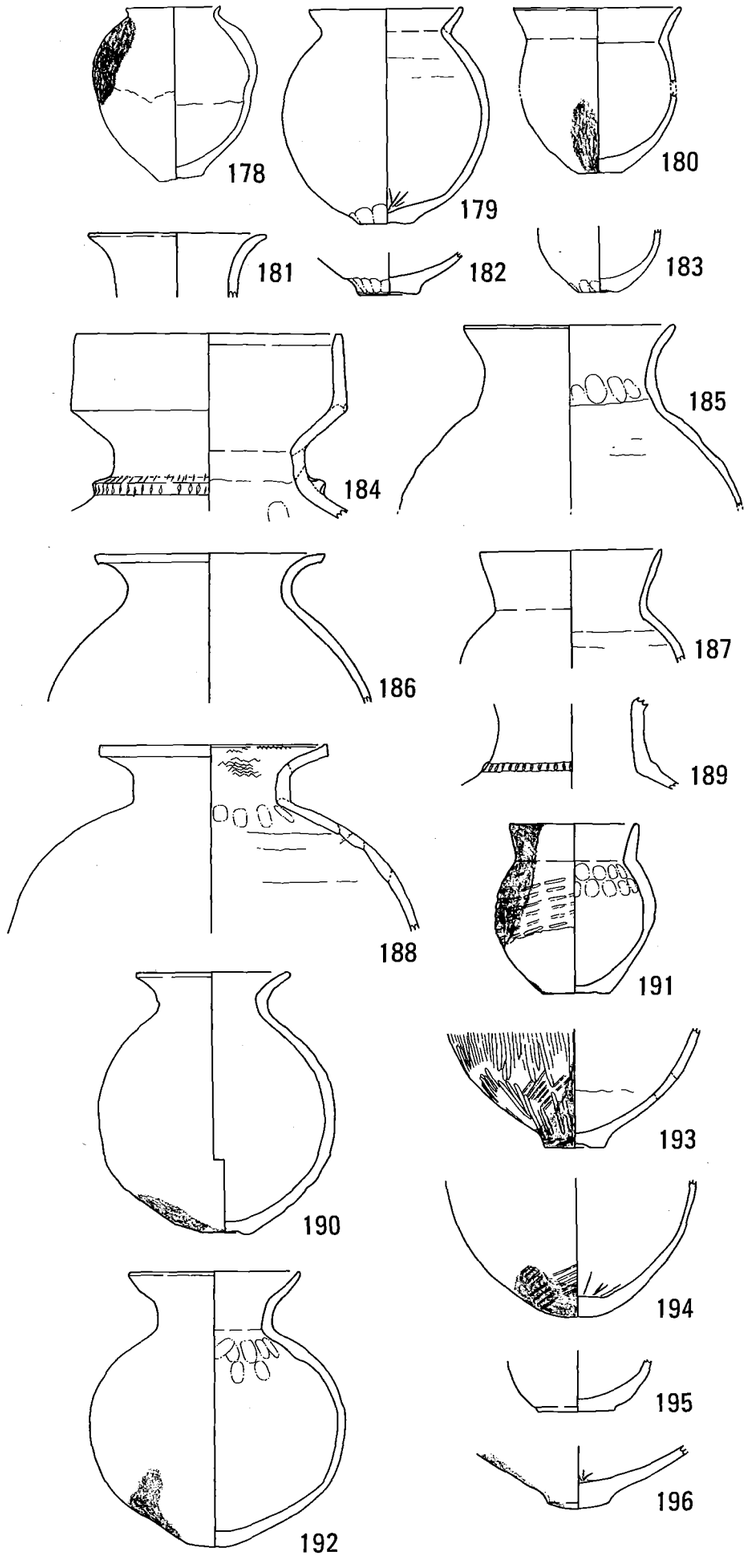
211・301のように口縁の外反が大きく外折気味で口縁端部が一条の突帯状になっているものがある。Ⅰd類には211のように杯内外に波状文や口縁外端面に円形浮文がある加飾のものが１点出土している。これは東大阪市馬場川遺跡のものなどと類似しているようである。

Ⅱ類　椀形高杯

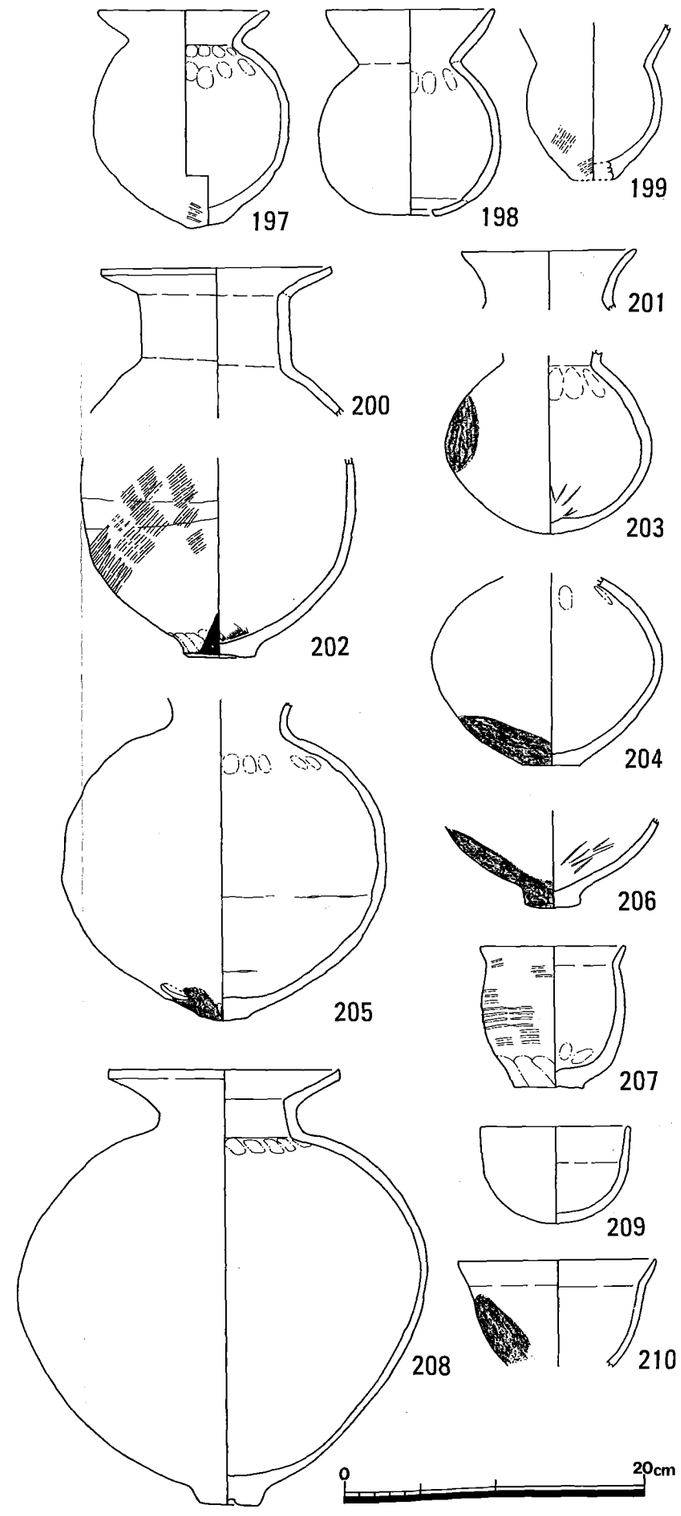
椀形高杯と呼称されるタイプのものである。成形方法はⅠとほぼ共通しているものと考えられる。伝統的第Ⅴ様式の甕や高杯Ⅰ類と共伴していると考えられる。



89-1区　出土

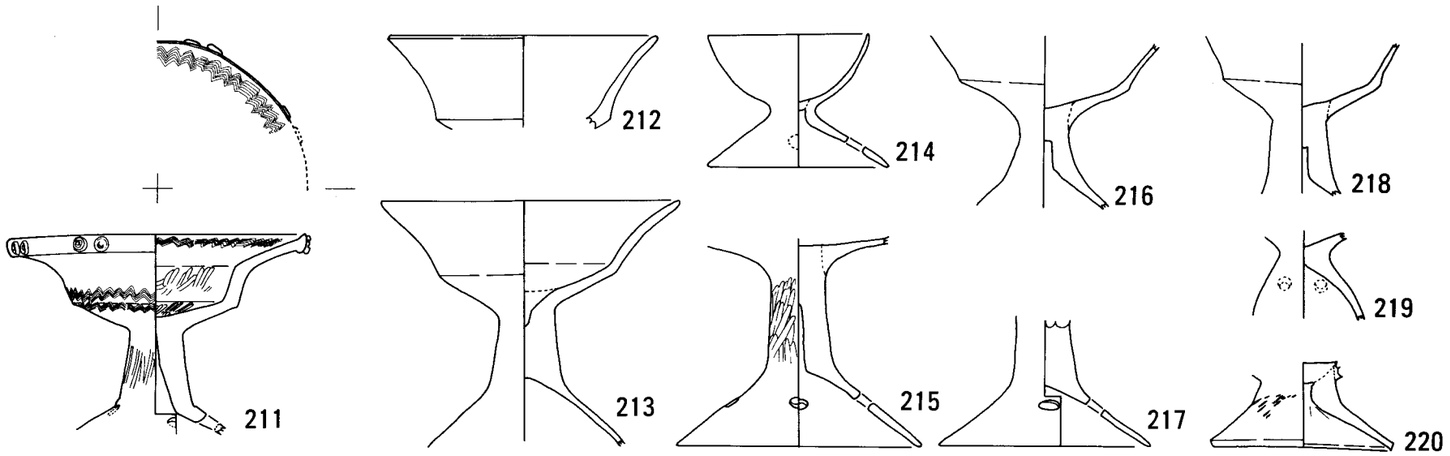


90-1区　出土

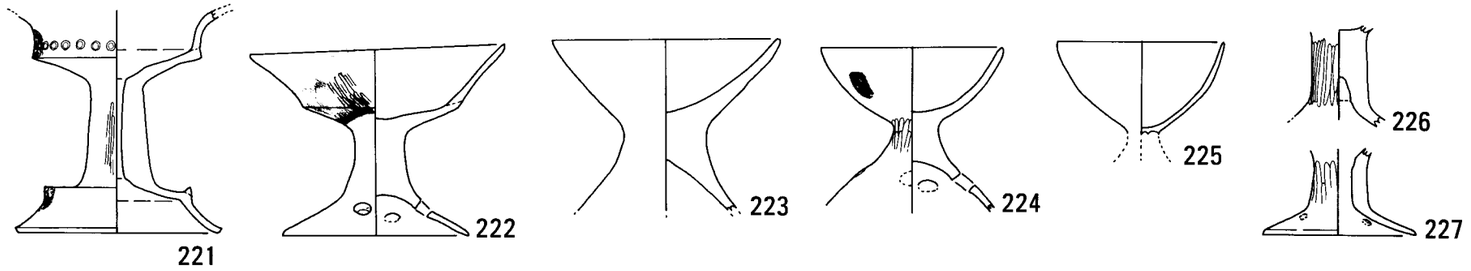


90-2区　出土

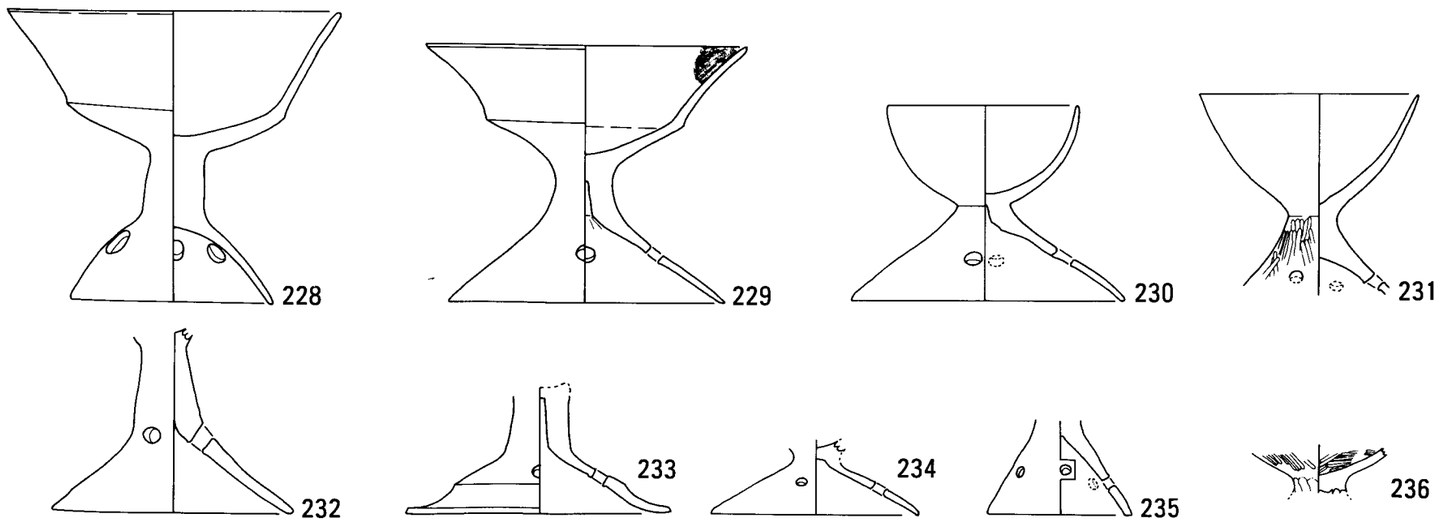
第10図　壺



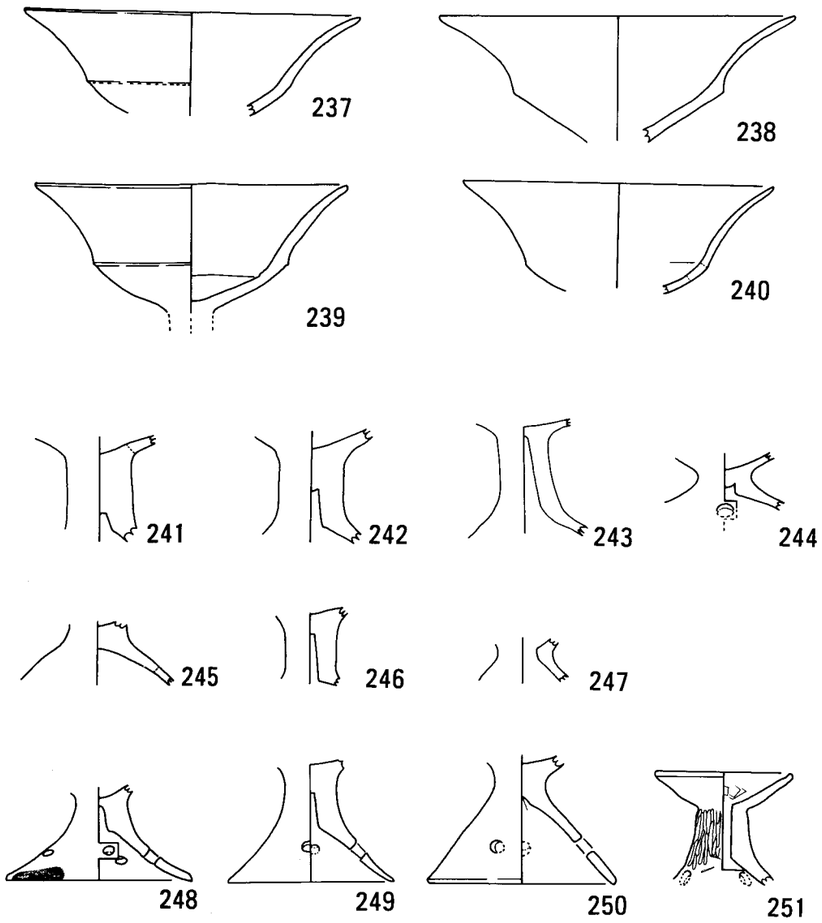
89-1区　W区SR-1　土器溜A　出土

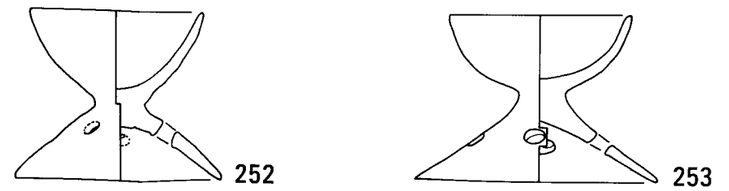


89-1区　W区SR-1　土器溜B　出土

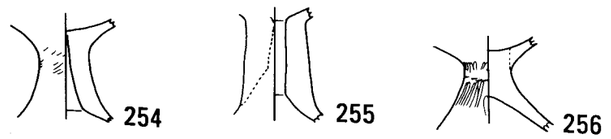


89-1区　W区SR-1　土器溜C　出土





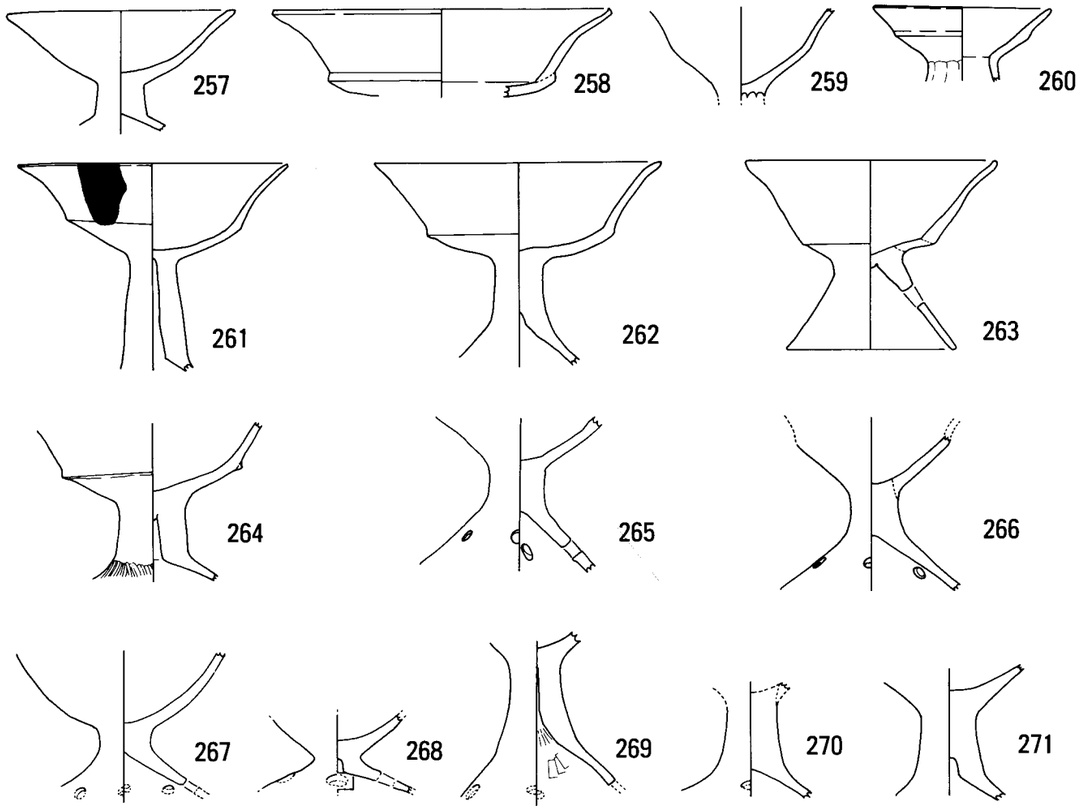
89-1区　E区　出土



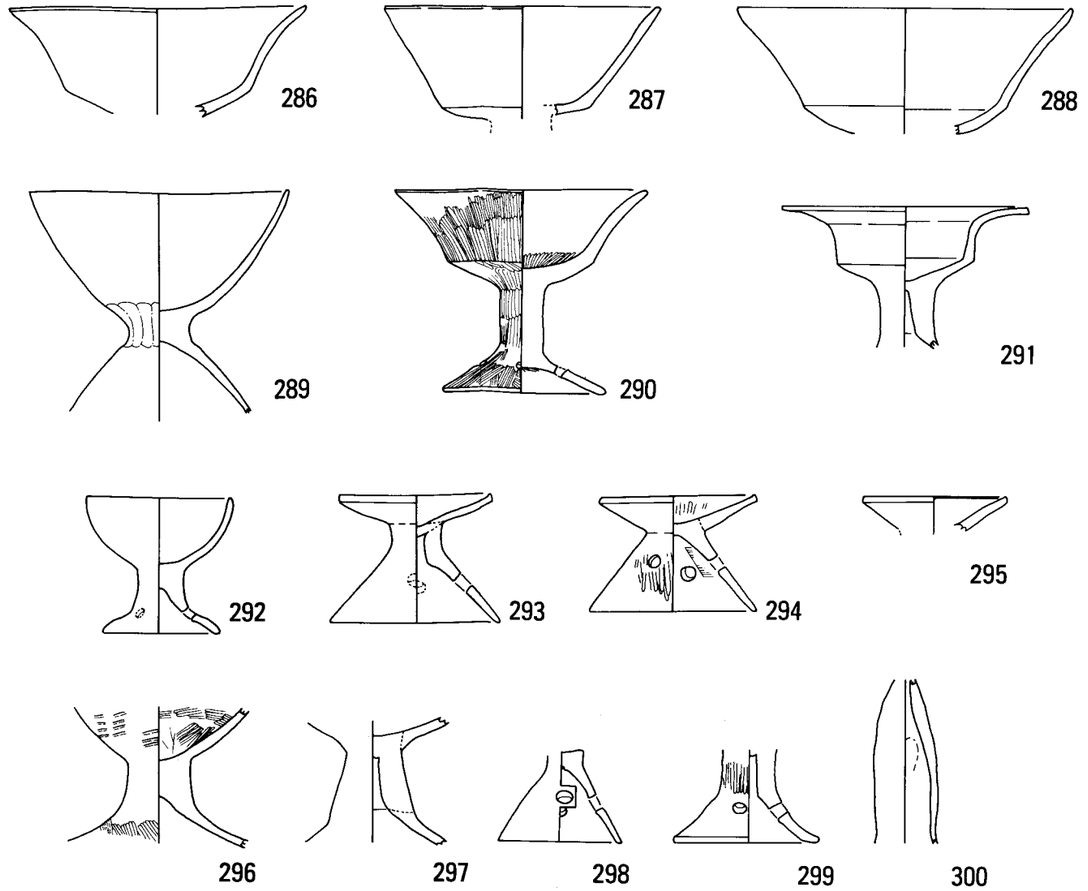
89-1区　W区　出土

0　20cm

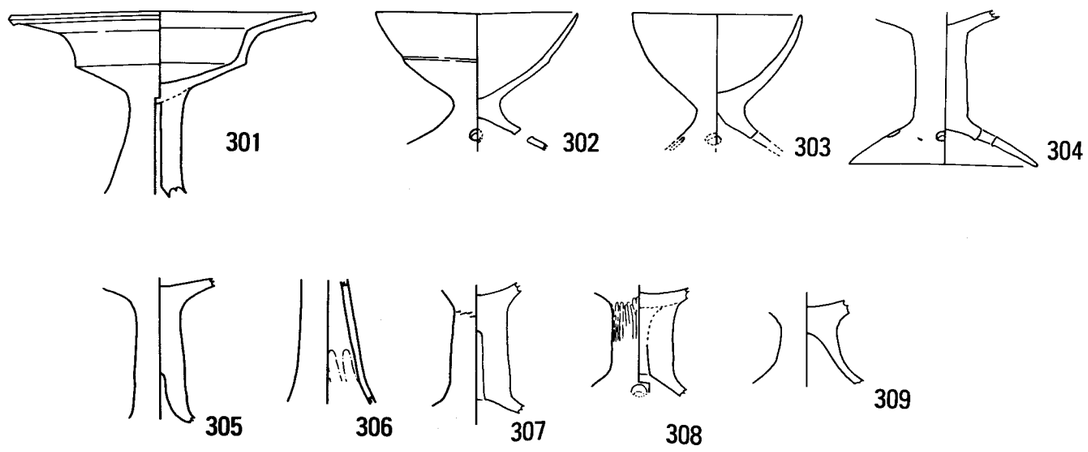
第11図　高杯・器台



90-1区　出土



90-1区　SR-1　出土



90-2区　出土

0　20cm

第12図　高杯・器台

IIa類（実測図6点）

224や231のように長い脚柱をもつものであり、次のIIbよりは僅かに古相を帯びている感がある。

IIb類（実測図13点）

230や253のように短い脚柱をもち、概して脚台径が杯径を大きく上回る外形的特徴がある。

IIc類（実測図2点）

292のような小型の椀形高杯で杯径が脚台径よりも大きく、IIb類よりも新相を示すように思える。

III類（実測図2点）

263や287は極めて外形上特異なもので、平底の杯底に直線的に開く口縁が付き、脚柱がなく下方に直線的に開く中空の脚台が杯に直接接合しており、脚台に穿孔もない。復元し実測したものは2点と少ないが大久保E遺跡の高杯の特徴を表すものとしてとらえることができる。杯が平底である点、口縁が外反しないこと、脚柱はないが脚台が薄く中空であることなどから庄内系高杯の特徴に類似しているとも考えられる。黄色味を帯びた粗めの胎土は特徴的であるが、観察によると大久保E遺跡周辺の在地とされる。出土地点はSR-1で高杯I、II類と混在する。

IV類（実測図3点）

椀ほどまで丸く内湾していない杯は脚台よりも大きく、脚柱がなく脚台が杯に直接付いている。その接合外面には縦方向の強いナデが見られ、脚台に穿孔はないなどの特異な外形を呈する。出土数は223と289の2点でともにSR-1からである。

V類（実測図2点）

300と306の2点で脚柱のみの出土であるが、脚柱の成形方法は他とは異質で、完全に中空状で器壁が極めて薄く粘土巻き上げ法によるものであると考えられる。これはおそらく布留傾向にある時期のものと思われ、306の出土地点は90-2区である。

器台

器台は全体に対して出土数が少なく実測図では10点となった。また破片の中には高杯の口縁部および充填されていた粘土円盤が脱落したものと紛らわしいものが数点あげられる。今回実測図および遺物観察表では高杯に含めて報告した。

I類（実測図1点）

221の一点だけで装飾性が高く、II・III類とは全く性格が異なるものである。

II類（実測図4点）

294や295のように概して美しく調整され粗さがなく、杯底部に大きく穿孔し脚台部上端をはめ込む精巧な成形方法を用いている。脚台部側面には穿孔が4つある。

III類（実測図2点）

293は短い脚柱部があるため脚上部がくびれて杯につながっているようにみえる。杯底部には粘土板が充填されており器台II類とは相違をみせる。

IV類（実測図2点）

251や260は杯中位に口縁接合の稜があり、杯底部から脚柱内面にむかって中空になっているのが特徴

である。

V類（実測図2点）

杯部と脚台部が完存する個体がないため、器台か高杯かの判別が難しいが、219や281のように脚台が内湾しながら小さく開き、脚台上部側面に穿孔のある独特の形状をみせる。

鉢

鉢は90-2区を除けばだいたい3種類に分けられると考えられる。I類とII類は基本的にまったく別系統のものであり、その差は年代によるものではなく、用途の違いによるものと考えられる。

Ia類

328のように椀状（半球状）の体部にやや厚みのある粘土塊を脚台として接合し、指頭によって強く撫でつけたものである。脚台底面にはくぼみがあり、成形の際親指によって圧迫痕が生じたものと思われる。体部外面には甕と同様の右上がりのタタキが見られる。

Ib類

333のようにIa類よりも体部が縦に長いもので、脚台はIaよりも低い。

IIa類

341のようにI類とは全く異なった形状をもち、横に長い体部は内湾しながら大きく開き、口縁端部が外折する。また底部は高さのない円形の粘土板をとり付け指によって縦方向にナデている。外面にはタタキが一切見られず、内面には板状工具によるものと思われる横方向のナデがある。

IIb類

331の1点だけである。外形はIIa類と似ているが、それよりもかなり大きめで底部にタタキの痕跡が観察されるなど極端に背の低い甕のようにも見える。

III類

332・345・347のように外面に明瞭なタタキがあり一見して甕の体部の下半分のように見え甕の未製品や欠損品の可能性もあるが、上端部には欠損したような形跡はなく一応完結しているように見えるため鉢としておく。

製塩土器

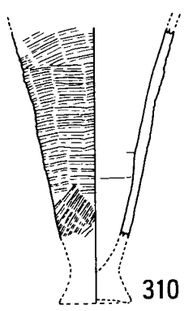
製塩土器はほとんどが縦長で上方向に開く筒状の体部をもっており、一般に脚台II式や目良式土器B類IIB式と呼ばれるものに類似している。観察ではその脚台の部分に2種類の差異をみることができるが、さほど大きな特徴ではない。

Ia類

319のように脚台底がほぼ平らで脚台高が比較的高いものである。

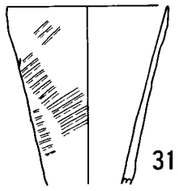
Ib類

314のように低い脚台はIa類に比べて端部が裾広がり、接合部はよりくびれている。その底面にはくぼみがあり、Ia類とIb類の脚台における差は製作方法に違いがあるためと思われる。なお大久保E遺跡では熊取町の近隣の市町村で出土している製塩土器ほど形状にバリエイションがないことが逆に大き


310

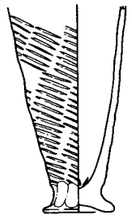
311

89-1区　W区　出土


312

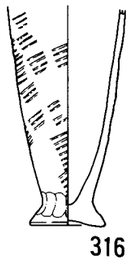
313

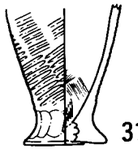
89-1区　E区　出土


314

315

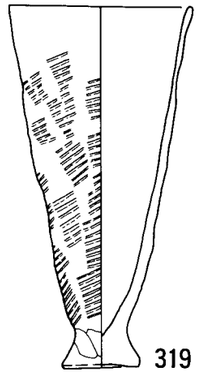
90-1区　SR-1　出土


316


317

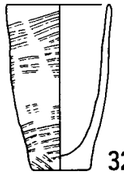
318

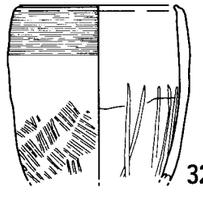
90-1区　出土


319

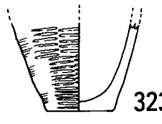
320

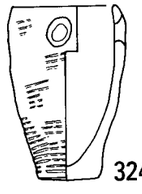
90-2区　出土

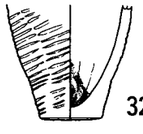

321


322

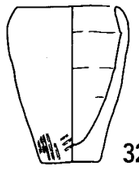
89-1区　W区　出土

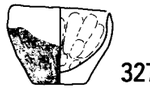

323


324


325

90-1区　出土


326

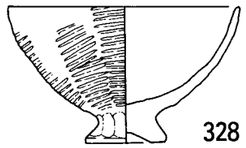

327

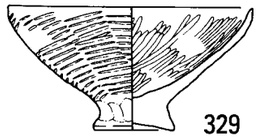
90-2区　出土

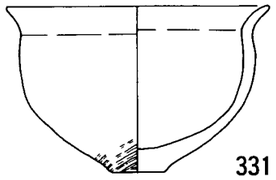
350

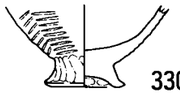
351

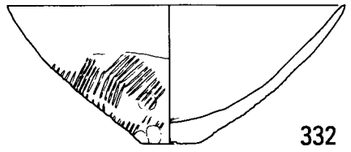
その他の土器


328

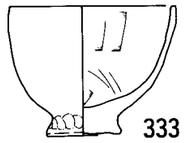

329

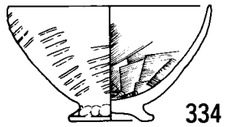

331

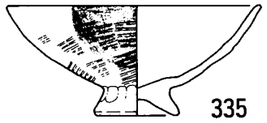

330


332

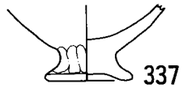
89-1区　出土


333


334

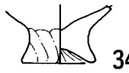

335

336

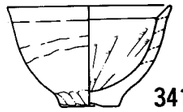

337

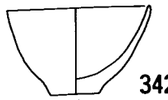
338

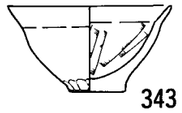
339

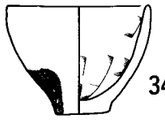

340

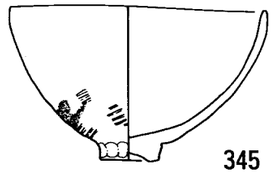
90-1区　出土

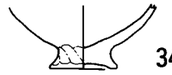

341

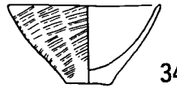

342


343

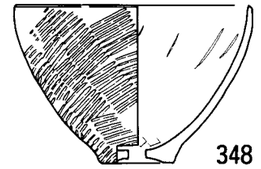

344

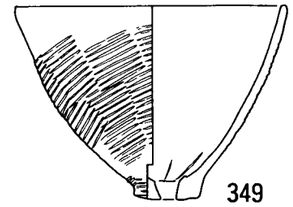

345


346

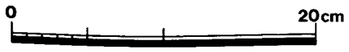

347

90-2区　出土


348


349

甑



第13図　製塩土器　蛸壺・鉢・甑

な特色といえるだろう。

たこ壺

たこ壺はイイダコ壺の321、324や真蛸壺の322ともに非常に類似したものが貝塚市脇浜遺跡で出土しているようである。ただし詳細に比較検討してはいないのでこれらのたこ壺によって年代を比定するまでには至っていない。

Ⅰ類

Ⅰ類はイイダコ壺で、器高は10cm強程度を測る。外面にタタキ目を残し、体部上端付近に吊紐のための穴がひとつある。底部はすべて平底で、体部は上方に開いたのち端部で急に内湾する。

II類

II類は322の1点だけであるが、口径は10cm以上あり真蛸壺と思われるものである。体下部は欠損しており不明であるが、タタキ目が残りさらに上端部は真横方向のナデ調整が行われている。

胎土について

大久保E遺跡の周辺で採取された砂礫混じりの粘土は、顕微鏡による観察で花崗岩と流紋岩の2種類の岩石からなり、鉱物として石英、長石、角閃石を含んでいるという。このうち大多数の土器の岩石の主体は花崗岩であり、この特徴が大久保E遺跡周辺の粘土を示すといわれる。表1の中では他にIVとして泉南海沿の胎土と推定される土器が数点挙げられており、これは流紋岩質岩起源であるが大久保E遺跡の周辺地と認識してもよいものと考えられる。

従って今回の顕微鏡による観察によっては、実測図として抽出した351点の土器の内349点は在地生産土器と考えられ、残りの約2点の土器の胎土もしくは土器そのものが他の遠隔地から熊取町大久保に搬入されたものと推定される。以下観察の方法や結果を挙げる。

大久保E遺跡出土土器の表面に見られる砂礫　　**奥田　尚**

1．　はじめに

観察方法は土器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察するのみである。土器の表面には大小様々の砂礫が含まれるが、肉眼で観察するのみであるため粒が細かい砂礫や粘土の組成は識別できない。観察時、砂礫の種類、色、粒形、粒径、量等について配慮した。粒形は角、亜角、円に、粒径は目測により裸眼では㎜単位で鏡下では0.1㎜単位で測定した。また量については、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階に区分した。砂礫の採取地を推定するために砂礫種構成から源岩を推定し自然界の砂礫と比較した。源岩の推定方法として例えば石英が複六角錐をなす自形であれば流紋岩質岩起源と推定し、石英・長石・黒雲母や石英・長石等と噛み合っていれば花崗岩質岩起源と推定し、粒が円くなっていれば海岸等の砂と推定した。岩石片が観察できればよいが鉱物片だけでも自形か他形の判断をすることにより、火山岩起源か深成岩起源の砂礫かとおおまかな源岩の推定はでき得る。源岩を推定し河川の砂礫とを比較することにより砂礫の採取地を推定した。

2　土器の表面に見られる砂礫

同定できた砂礫種は岩石片とし、花崗岩、流紋岩、砂岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、角閃石、輝石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩

色は灰白色、灰色で、粒形が角、亜角、粒径が最大５㎜である。石英・長石が噛み合っている。

流紋岩

色は灰白色、灰色、暗灰色、黒色、赤茶色、褐色と様々で、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大７㎜である。石基はガラス質である。溶結しているものもある。本来は溶結していれば溶結凝灰岩となるのであるがガラス質となれば識別が困難なものもあり、流紋岩の中に含めた。

砂岩

色は灰白色、褐色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大６㎜である。細粒砂からなる。

チャート

色は灰色、暗灰色、褐色、茶褐色、茶色と様々である。粒形が亜角、亜円で、粒径が最大６㎜である。

片岩

色は灰色、暗灰色、黒色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大４㎜である。泥質片岩、石英質片岩である。

火山ガラス

無色透明、褐色透明、黒色透明で、粒径が最大0.3㎜である。貝殻状、フジツボ状をなす。

石英

無色透明で粒形が角、粒径が最大３㎜である。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石

灰白色で粒形が角、粒径が最大２㎜である。

角閃石

黒色で粒形が角、粒径が最大0.2㎜である。粒状、柱状をなし結晶面が認められるものや自形をなすものがある。

輝石

褐色透明で粒形が角、粒径が最大0.3㎜である。柱状で自形をなす。

3　類型区分と傾向

砂礫種構成をもとに源岩を考慮して区分する。観察した土器の表面に見られる砂礫構成は花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅠ類型、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅣ類型、片岩起源と推定される砂礫を主とするⅧ類型である。細分すればⅠdn類型、Ⅳa類型、Ⅳe類型、Ⅳg類型、Ⅳgn類型、Ⅳh類型、Ⅳn類型、Ⅷdg類型となる。各類型の特徴について述べる。

Ⅰdn類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石の砂礫を含む砂礫からなる。

IVa類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVe類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、自形の角閃石や輝石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVg類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩やチャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVgn類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩やチャートの砂礫、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVh類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、片岩の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVn類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅷdg類型

片岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩やチャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4　砂礫の採取推定地

大阪府の南部に位置する和泉山脈には礫岩・砂岩・泥岩からなる和泉層群の地層が分布する。和泉層群の北側には部分的に泉南酸性岩とよばれている流紋岩、流紋岩質溶結凝灰岩が東西に点々と分布し、その北側に領家式花崗岩類が東西に分布する。領家式花崗岩類を基盤として大阪層群が不整合に重なる。熊取町付近は南部に南から北にかけて和泉層群、泉南酸性岩、領家式花崗岩類と分布し、中部から北部にかけては大阪層群が分布する。また北西部では段丘が部分的に見られる。大久保E遺跡の近くをながれる住吉川の上流には領家式花崗岩が分布し、当遺跡付近になると大阪層群が分布する。住吉川の砂礫には花崗岩質岩起源の砂礫が多く含まれる。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫が多く、僅かに流紋岩質岩起源の砂礫を含むⅠdn類型に属する砂礫は大久保E遺跡付近の砂礫と推定される。流紋岩質岩起源と推定される砂礫が多いIVg類型、IVgn類型に属する砂礫は砂礫粒が比較的円いことから佐野川から樫井川にかけての海岸近くの砂礫と推定される。IVe類型やⅧdg類型に属する砂礫は泉南地方以外の砂礫である。砂礫相的にIVe類型に属する砂礫は加賀南部の砂礫と推定される。また片岩を多く含むⅧdg類型の砂礫は紀ノ川右岸の砂礫と推定される。IVa類型、IVh類型、IVn類型に属する砂礫は泉南地方の砂礫と推定されるが場所を限定できない。

土器の表面に見られる砂礫

試料番号	器種	岩石																鉱物										海綿の骨片	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩，泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
90	甕						L-僅亜角			L-稀亜角		L-微亜角		L-中亜角					M-中 E 僅		M-微								V III dg 阿波
106	甕					M-微亜角	L-僅亜角							L 稀亜円				M-微	M-中 E 僅		M 微				S 稀				I V h ?
126	甕					L-僅亜角	L-僅亜角											M-稀	M-微		S 微				S 稀				I V n ?
122	甕		L 稀角				L-微亜角										M 稀フ	S 微	M-多 E 僅		M-僅				S 稀				I dn 在地
142	甕					L-僅亜角	L 僅亜角					L 僅亜角	L 稀亜角					M-稀	M-微 E 稀		M-稀								I V g 泉南海沿
129	甕					M-微亜角	M 僅角											M-僅	M-多 E 中	M-僅	M-中				S 稀 E 中		S 稀 E 非		I V e 加賀南部
128	甕		L-稀角			L-微角	M-微亜角											M-僅	M-中		M 僅				S 微				I dn 在地
131	甕	L 稀角	M 稀角				M 稀亜角											M-稀	L-僅	M-稀	M 僅				S 稀				I dn 在地
134	甕					L-稀角	M-僅角												M-多 E 僅		S 僅				S 稀				I dn 在地
157	小形丸底		L-稀角			L-微亜角	S 稀角											L-稀	L-多 E 僅		M-微				S 稀				I dn 在地
186	壺	L-稀亜角	L-稀角																M-中 E 微		M-僅				S 稀				I dn 在地
263	高杯					L-僅亜円	L-中亜角			L-稀亜円		L-僅亜角						L-稀	M-中 E 中		M-僅				S 稀				I V n 泉南海沿
277	高杯		L-微角				L-稀角												L-中 E 稀		M-僅				S 稀				I dn 在地
287	高杯					L-僅亜角	L-僅亜角			L-微亜円	L-僅亜角							M-僅	L-中		M-僅				S 微				I V n 泉南海沿
293	器台		L-稀亜角			L-僅亜角	L 稀亜角											M-微	S 僅 E 僅										I V a ?
297	高杯	L 稀角	L-微角			L-微亜角	M 稀角												L-多		M-僅				S 稀				I dn 在地
314	製塩土器						M-微角												M-多 E 微		M-中				S 稀				I dn 在地
315	製塩土器		L 稀角			M-稀亜円	L-僅亜角										S 稀貝		S 僅 E 稀	M-稀	S 微				S 稀				I dn 在地
319	製塩土器					L-中角	L-微亜円				L 微亜角	L 稀亜角						L-微 E 僅	S 僅 E 僅	L-稀	S 稀				S 稀				I V gn 泉南海沿
321	蛸壺		L 微角			L-微亜角	M 稀亜角												M-中 E 稀		M-僅				S 微				I dn 在地
324	蛸壺					L 稀亜角	S 稀亜角												M-僅		M-僅				S 稀 E F 稀				I dn 在地
334	鉢						S 僅亜角										M 稀貝フ	M-稀	M-多 E 僅		S 僅				S 微				I dn 在地
345	鉢					L 微亜角	L-僅亜角			L 稀亜角		L 微亜角							M-僅		S 稀								I V g 泉南海沿
209	小形丸底	L-稀角				L 稀亜角	L-微角										S 稀貝	L-多	L-多 E 僅	L-中	M-僅				S 稀				I dn 在地
210	小形丸底		M 稀角				M-微亜角												M-中 E 僅		M-僅				S 稀				I dn 在地

裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径２㎜以上　M＝粒径２㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径が１㎜以上　M＝１㎜未満0.3㎜以上　S＝粒径が0.3㎜未満　－＝以下の粒径がある　E＝自形、EF＝結晶面がある　貝＝貝殻状　フ＝フジツボ状　図は報告書等の番号に同じ　類型区分は奥田の区分（1992,「庄内式土器研究II」を参照）

第3章　まとめ

第1節　大久保E遺跡の土器の特徴

大久保E遺跡出土の土器に見られる事実を列挙しておく。

・甕壺の下体部がかなり球形化している。

・V様式甕の底部は突出した平底のものの他、丸底に近い中途半端な平底のものがある。

・須恵器は一切出土していない。

・89-1区と90-1区における自然流路SR-1からは庄内式新相を示す土器は出土していない。

・90-2区内の自然流路SR-1から庄内式新相の土器が出土している。

・いわゆる高杯Aに比して椀形高杯の出土数の割合が多い。

・製塩土器はいわゆる脚台II式のみ出土しており、脚台III式などはない。

・庄内式有段高杯はない。

・90-2区内の自然流路SR-1出土の極少数の庄内・布留系の甕には生駒西麓産のものはなく、加賀南部もしくは在地の胎土よりなる。

・搬入土器は目下甕においてのみ確認され、胎土は阿波と加賀南部のものと報告されている。

・小型器台は自然流路SR-1に年代の異なる数種類がみられる。

第2節　堺市下田遺跡との比較

ここで大久保E遺跡出土土器の相対年代について触れておきたい。

大久保E遺跡のある熊取町と堺市下田遺跡とでは直線距離にして約19km隔たっており、それぞれの遺物を単純に比較してよいものか熟慮を要するとしても、堺市下田遺跡における（財）大阪府埋蔵文化財協会の1993・94年度の調査で出土した土器は非常に精緻な観察によって検出し、西村歩氏が精度の高い土器の様式分類をした上で編年作業をしているため、これを基準として相対的な比較は可能であると思える。

第14図のように単純に実測図で比較すれば、大久保E遺跡の土器群は下田遺跡において平成8年度現在で設定されている4期・5期・6期の範囲にほとんどの土器が相当し、一部90-2区内の自然流路SR-1から出土した土器は下田8期頃のものがあるように思われる。

下田4期は庄内式古相に併行する段階とされ、①製塩土器の出現、②高杯Aが最大級になり脚柱が中実化すること、③偏球化した広口壺(下田16)、④甕は器形の短小化と球形化の傾向がありながらも突出する平底への執着があること、⑤小型器台の出現などその他を特徴として挙げられるが、大久保E遺跡では②については285など高杯Ia類が類似し、③については173や192など壺Ia類が、④においては2や115など甕Ia類が、⑤については器台IV類の251や260が類似するものと思える。

下田5期では⑥高杯Aの稜線の下降と口縁の直線化と脚柱の中実化の進行とした上で、(下田18)のように脚台部が膨らんで内湾する独特の高杯を指摘している。また⑦庄内系有段高杯の出現、⑧甕の球形化、⑨庄内式期III相当の庄内式甕などその他が挙げられるが、⑥について大久保E遺跡SR-1出土の高杯Ib類の225は脚台が極端に内湾している。⑧については25や69など甕II類が球形化をみせている。

下田６期では⑩高杯は５期までの大型で口縁が外反するＶ様式系統のものは終息して口縁の直線的な独特の形状を呈するようになる。⑪甕はＶ様式が大きく薄れ、球形化が達成され一部底が完全に丸底化し、庄内系とも布留系ともとれるような甕があるが布留式甕はまだない。⑫庄内甕は庄内式期Ⅳに相当し、搬入された庄内甕を模倣した在地の甕も出現する。⑬小型丸底土器や小型器台（下田26）、有段器台（下田27）がある。⑩について高杯では杯が平底を呈する庄内式の高杯が大久保Ｅ遺跡での263のような高杯Ⅲ類に類似しているとも考えられる。⑪については甕Ⅳ類の129がこの範疇に入るものと考えた。⑬では小型丸底土器としては209が、器台については器台Ⅱ類の294などが、また221が有段器台に相当するなど甕や高杯以外の器種に僅かに類似品を指摘することができる。

平成８年度段階で設定されている下田４期は北鳥池下層式に相当し庄内併行期と捉えて庄内式期Ⅰ・Ⅱであり、５期は上田町１式で庄内式期Ⅲ、６・７期は上田町２式で庄内式期Ⅳに相当するとされている。

すると大久保Ｅ遺跡の土器は、高杯では一般に高杯ＡとされるⅠａ類と、椀形高杯Ⅱ類がほぼ対等に存在すること、甕ではⅠａ類・Ⅰｂ類とも体下部の球形化がみられ、さらに球形化が進んだ甕Ⅱ類も多いこと、壺については体部の偏球化した例が非常に多いことなどから、大久保Ｅ遺跡SR-1出土土器の中心は下田５期・庄内式期Ⅲを中心としたその前後に併行しているとみることができる。但し同じSR-1にから有段器台や小型器台など下田６期に相当すると思われるものも検出されていることから、土器群の廃棄はその時期になってから行われたとも考えられる。

また90-2区のSR-1においてのみ前述した様な庄内・布留系の土器に類似した甕が検出されたということから、自然流路SR-1は庄内式期Ⅲ～Ⅳ頃には既に大きく埋没してその周囲に流路を変化させて存在していたのだろう。その後に庄内式期Ⅳ以降の土器を含んだものと思われる。

第３節　その他の遺跡との比較

柏原市船橋遺跡で同市教委が1993年に行った調査ではそのⅠ区からそれぞれ時期の前後する４基の井戸が検出され、個々の井戸で出土した土器について非常に精緻な編年が行われている。最も古い井戸５は庄内式期Ⅰとされ、次の井戸３が庄内式期Ⅲとされているが、第15図のとおり最も古い井戸５の下層の土器とを比較した場合Ｖ様式の甕に類似した土器を散見する。但しＶ様式の甕にしても船橋遺跡井戸５の方は下体部が究極的に膨らんでいたり、大久保Ｅ遺跡SR-1に比べればかなり庄内式新相の土器が多いことなどから、概して大久保Ｅ遺跡SR-1の方が古く庄内式期Ⅰといわれる船橋遺跡井戸５に先行するとみることができるだろう。となると下田遺跡との比較の結果と若干齟齬をきたすことになる。

また和泉市西大路遺跡533-OX出土遺物、泉佐野市湊遺跡82-1・90-4の谷状落ち込み出土の土器とはほぼ併行関係にあることが窺われる。但し和泉市西大路遺跡533－OXからは庄内式の新相を示すものは出土していない。和泉市府中遺跡77-1区１号住居は甕の形状から僅かに大久保Ｅ遺跡に先行するかに思える。また脇浜遺跡91-OR肩部における製塩土器と蛸壺には大いに類似性がみられるが、脇浜遺跡の高杯と甕は明かに大久保Ｅ遺跡よりも新相を示す。また西大路遺跡・湊遺跡のいわゆる脚台Ⅱ式の製塩土器はラッパ状に大きく開く体部を呈するのに対し、大久保Ｅ遺跡のものは体部の開きが狭く、また脚台Ⅰ・Ⅲ式はないなどの相違をみせる。

堺市下田遺跡1993年

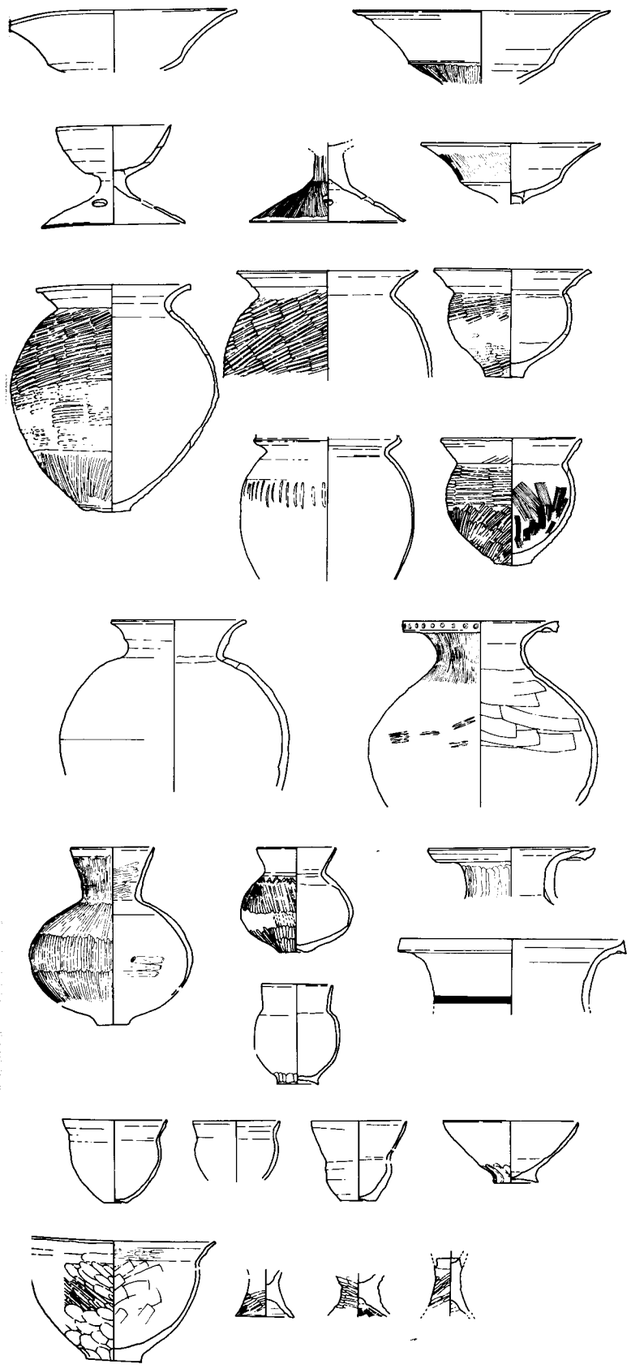
古 ⟷ 新

大久保E遺跡1989・90年

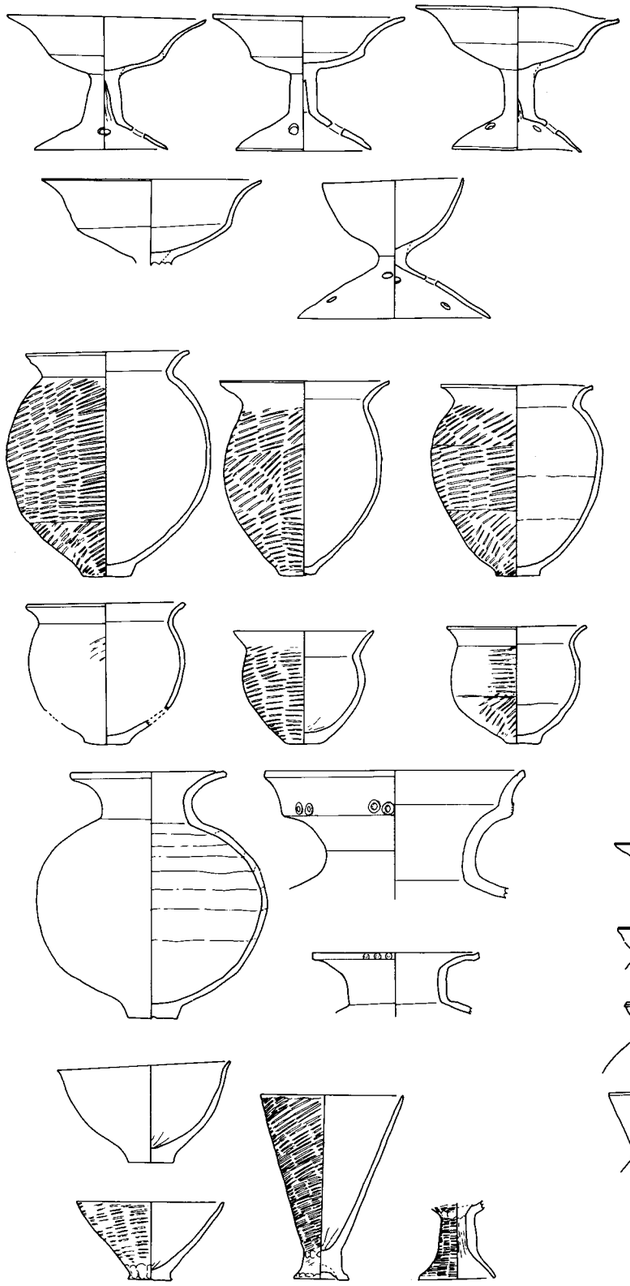
0 30cm

第14図　堺市下田遺跡との比較

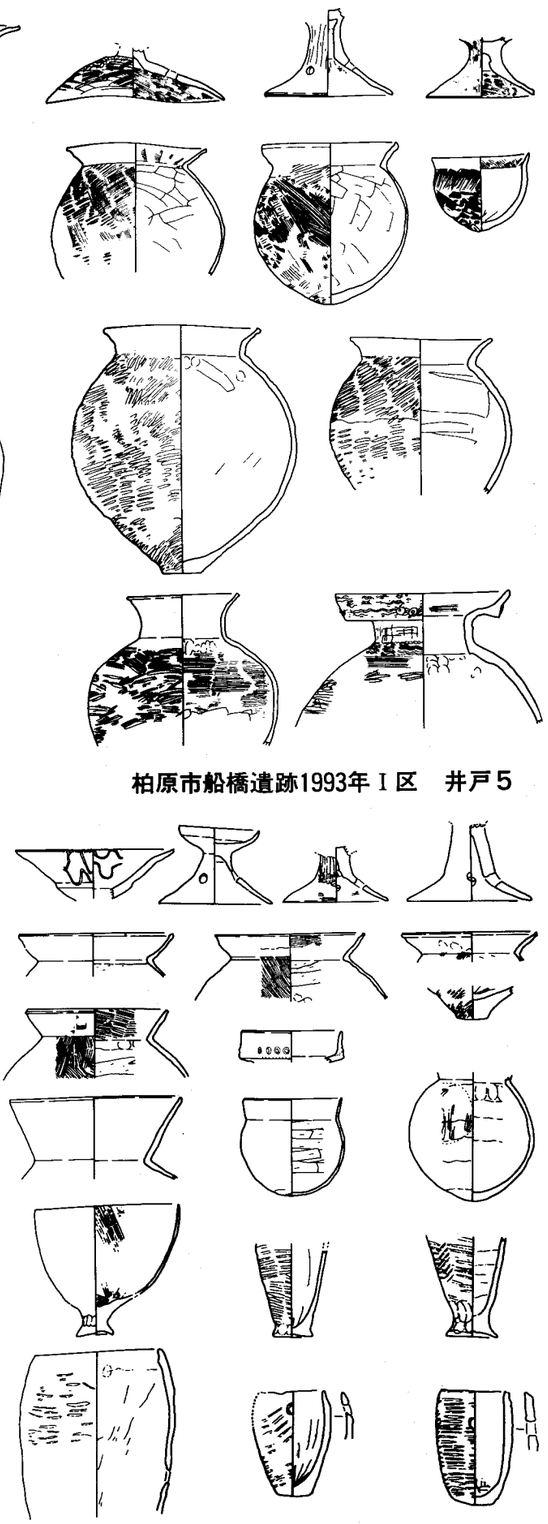
41～42



和泉市府中遺跡1977年Ⅰ区1号住居跡

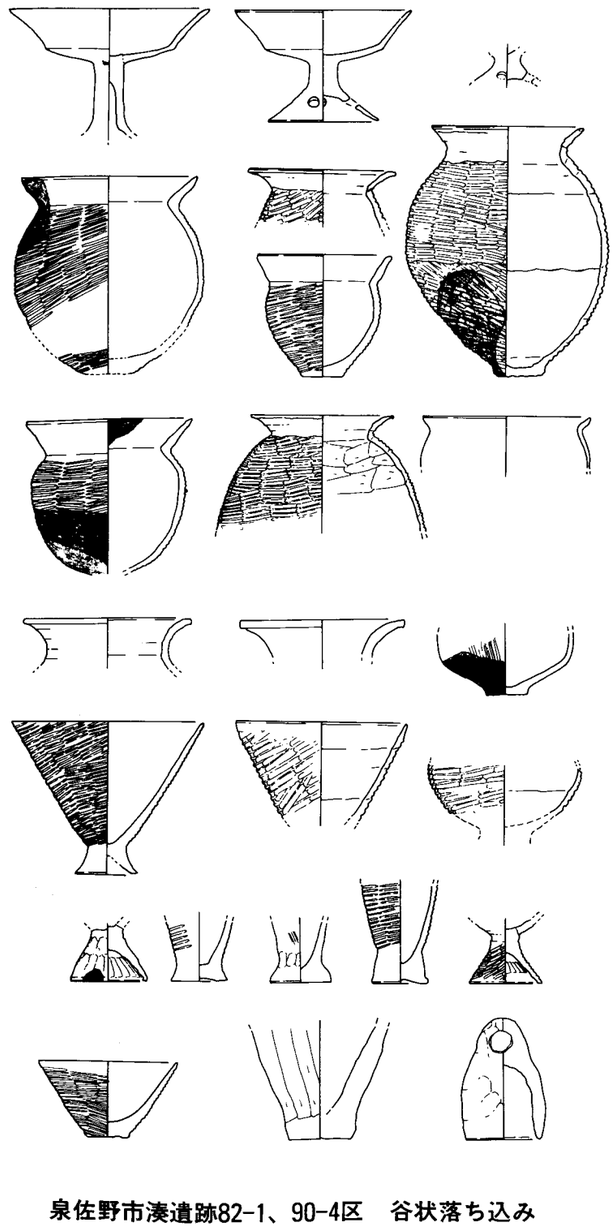


和泉市西大路遺跡1986年Ⅰ区　533-OX



貝塚市脇浜遺跡1985年Ⅲ区91-OR肩部

柏原市船橋遺跡1993年Ⅰ区　井戸5



泉佐野市湊遺跡82-1、90-4区　谷状落ち込み

0　30cm

第15図　周辺の遺跡

また図示できなかったが、高杯は和歌山県有田川流域の田殿・尾中遺跡、野田・藤並地区遺跡出土の高杯群と比べると、それらよりも新しい様相を示しており、有田川流域弥生末～古墳時代前期土器編年のII期でも新しい段階に位置づけることができる。鉢も有田川流域土器編年のII期（田殿・尾中遺跡第8号住居跡）に類似した形態のものがある。製塩土器は近藤義郎氏の目良式土器B類に相当するもので、同志社大学による紀淡海峡地帯製塩土器分類のB類（大谷川II式）、小島東遺跡出土製塩土器分類の脚台II式と同じである。目良式土器B分類は和歌山県白浜町瀬戸遺跡出土資料でI～III式に細分され、さらに各々A・B式に分けられており、大久保E遺跡出土製塩土器はそのIIB式に近い。その時期については和歌山県瀬戸遺跡の土壙の共伴例から目良式土器B類IIA式が庄内式第I期とされており、目良式土器B類IIB式が和歌山県御坊市尾ノ崎遺跡竪穴2の資料から庄内式第II期とされていると指摘されている。

蛸壺は豊中・古池遺跡または岸和田市土生遺跡におけるIIa類に類似していると思われる。貝塚市脇浜遺跡で昭和60年に大阪府埋蔵文化財協会によって行われた調査で91－OR肩部から出土したものの中にはやはりそのIIa類があるが、大久保E遺跡では出土しなかった製塩土器I・III類も共伴しており、さらに共伴する甕には布留甕など多種類あるようなので、大久保E遺跡における製塩土器IIa類との類似性を指摘するにとどめる。321と324は貝塚市脇浜遺跡において昭和62年度に大阪府埋蔵文化財協会が行った調査で出土したたこ壺Ib類に類似しているようである。脇浜遺跡ではたこ壺と布留甕が供伴しているようであるが、脇浜遺跡での分類は年代を区別するものではなく、目下のところたこ壺によって年代を類推することは困難のようである。また322は真蛸壺と思われる。真蛸壺は基本的に体部上半に穿孔があるとされるが322では定かではない。

第4節　その他

最後に今回の調査の状況に関することに触れておく。調査区の地山面（検出面）は全域で中世の耕作土によって全く平滑に削平されていることから、中世に大幅な開墾作業が行われたことがわかる。安定した広範な農地を得るためには全体的に平滑な土地を確保する必要があり、旧来起伏のあった土地に対してその高い部分を削って低い部分に土を充当したと思われる。この時点で比較的高い位置に存在していたと推定される古代以前の住居跡などはその地盤ごと削り取られ、逆に自然流路や古い水路、小河川は埋められてしまったものと考えられる。削平された地山面の上に直接存在する一番下位の包含層には13世紀以後の土器破片が含まれないことなどから、この大幅な開墾が行われたのは13世紀代の鎌倉期頃ではなかったかと思われる。これまでの発掘調査で出土した土器から熊取町内で地域によって開発が開始された時期が異なっていることがわかってきている。大久保E遺跡の周辺では土器から弥生から古墳時代になんらかの開発が行われていたはずであり、東の野田地区では奈良時代の土器片が検出されているために古代から開発が始まったのかもしれない。また東南方向にある久保地区では平安時代後期頃からの瓦器が多数検出される地点があり、隣市の泉佐野市の日根野の荘園開発などと同様の開発が行われていたものかとも考えられる。ただしどの地点でも現時点で古代以前の包含層や水田の跡などは確認されておらず、どの地域でも最も下位にある包含層は鎌倉時代野田にあった東円寺の発展と関連があると思われる開発によるものであり、その耕土および整地土は13世紀頃以前の瓦器片と土師器片を含んでい

る。この包含層は野田を中心に今回のように大久保にも広範に存在するらしいことがわかってきている。野田から大久保を結ぶ現在最も開発の盛んな低地帯が中世に入った時期頃から前述のような大規模な工法によって盛んに水田開発が開始されていったことを今回の包含層と地形からうかがうことができ、この時期を熊取町の歴史の一段落とすることができるかもしれない。

参考文献

熊取町史紀要第3号　考古学から熊取地域を考える　熊取町教育委員会　1996．3

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要17　馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ　1977．3　東大阪市教育委員会

池上遺跡発掘調査概要　和泉市池上町泉大津市曽根町所在　1979．3　大阪府教育委員会

府中遺跡発掘調査概要II　和泉市府中町所在都市計画街路泉大津阪本線

土生遺跡　第2次発掘調査概要　1975．1

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告第17集　都市計画道路貝塚中央線建設に伴う脇浜遺跡II発掘調査報告書　1988

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第23集　都市計画道路磯之上山直線建設に伴う西大路遺跡発掘調査報告書　1988

船橋遺跡　1994．3　柏原市文化財概報1993VI

庄内式土器研究IX－庄内式併行期の土器生産とその動き－「摂河泉における庄内式について」1995．6．10　庄内式土器研究会　和泉地域北部における庄内式併行期の土器様相（予察）－堺市下田遺跡の調査成果より－（財）大阪府文化財調査研究センター－　西村歩

遺物観察表について

口縁は直線的に開くものと外反するもの、僅かに内湾するもののおおまかに3種類に分けた。

体部は球胴と長胴、直線的な胴部の3種類程度に分けた。

甕の法量については超大型・大型・中型・中小型・小型に分けた。

備考欄における在地生産土器とは、34頁にあげる奥田氏の顕微鏡による観察の結果、その土器の胎土が大久保E遺跡周辺地のものであろうと推定された土器である。

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
1	甕 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高22.0程度 最大径20.3 口径14.0 大型	50% 下半分欠損	10YR8/2 灰色 10YR8/4 浅黄橙	・口縁外反 ・球形の体部 ・口径が小さい ・二次焼成は不明 ・体部内面に粘土ひもの巻き上げ痕	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
2	甕 IIb	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高15.4 最大径16.4 口径15.6 中型	50%	5Y8/1 灰色 5YR3/2 暗赤褐	・直線的に開く短い口縁 ・球形の体部 ・上下分割成形痕 ・煮沸二次焼成の痕跡 ・底部貼付指オサエ後タタキ ・内面ケズリ後ナデ ・底面に指頭痕 ・2cm5本右上がりのタタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
3	甕 Ib	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高14.3 最大径11.0 口径12.0 小型	50%	2.5Y8/3 淡黄	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付指オサエ後タタキ ・1.5cm5本右上がりのタタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
4	甕 III	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高20.9 最大径17.0 口径13.1 中型	復元して完形	2.5Y8/3 淡黄	・口縁端部外接 ・頸状の上体部（壺状） ・厚手の器壁 ・上下分割成形 ・2cm6本右上がりのタタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
5	甕 —	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 底径4.4 口径不明 中型	底部のみ残存	10YR8/2 灰色 7.5Y7/1 灰色	・体部タタキ後底部貼付指オサエ ・内面ヘラナデ痕	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
6	甕 —	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 底径5.4 口径不明 大型	底部のみ残存 内外面摩耗	7.5YR7/8 黄橙	・底部貼付指オサエ後タタキ ・底部径大き目	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
7	甕 —	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 底径3.7 口径不明 中型	底部のみ残存 内面摩耗	5YR7/6 橙 2.5Y7/3 浅黄	・底部貼付指オサエ後タタキ ・煮沸二次焼成の痕跡	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
8	甕 Ib	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高16.0程度 最大径不明 口径12.7 小型	50% 下半分欠損	2.5Y8/2 灰色	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・体部内面に板ナデ ・口縁外面に横ナデ ・2cm4本水平のタタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
9	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 最大径不明 口径14.2	10% 口縁部のみ	10YR8/4 浅黄橙	・口縁やや外反	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
10	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高28.0 最大径23.2 口径16.5 超大型	残存40% 復元して完形	2.5Y8/3 淡黄	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部で貼付ていない ・上体部2cm6本右上がりのタタキメ ・下体部2cm6本水平タタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
11	甕 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高25.0 最大径23.0 口径18.9 超大型	ほぼ完形	7.5YR8/2 灰色	・口縁やや外反 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・口縁接合の指オサエ ・貼付底面にヘラ刻痕 ・煮沸二次焼成痕 ・2cm6本右上がりのタタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
12	甕 IIb	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高17.0程度 最大径16.5 口径不明 中型	口縁・底部欠損 胴部のみ残存	7.5YR7/1 明褐灰 10YR8/3 浅黄橙	・口縁外反 ・球形の体部 ・薄い器壁 ・内面板ナデ ・煮沸二次焼成痕 ・2cm6本水平のタタキメ	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
13	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 最大径不明 口径17.8 大型	20% 口縁部のみ	7.5YR7/6 橙	・口縁外反端部に稜 ・口縁接合時の指オサエ ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
14	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 最大径不明 口径16.0 中型	20% 口縁部のみ	2.5YR6/8 橙 7.5YR8/4 浅黄橙	・口縁外反 ・口縁接合指オサエ痕	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
15	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 最大径不明 口径18.1 大型	20% 口縁部のみ	10YR8/3 浅黄橙 2.5Y8/3 淡黄	・口縁外反 ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第V様式
16	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 最大径不明 口径17.6	30% 口縁部と胴肩部	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR4/1 褐灰	・口縁外反 ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第V様式

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
17	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 最大径20.0 口径15.8 中型	40% 口縁・体上半部	7.5YR7/4 にぶい橙	・口縁外反 ・2.5cm6本右上がりのタタキメ ・内面に口縁接合指オサエ痕 ・薄手の器壁	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
18	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 最大径19.0 口径16.0 中型	40% 口縁・体上半部	5YR8/4 淡橙 10YR7/2 にぶい黄橙	・口縁外反 ・2.5cm6本右上がりのタタキメ ・厚手の器壁	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
19	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	推定高20.0程度 最大径18.2 口径13.8 中型	40% 体下半部欠損 反転復元	10YR8/3 灰色 7.5YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・上下分割成形 ・内面に粘土ひも巻上げ痕 ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
20	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	推定高20.0程度 最大径17.0 口径14.3 中型	70% 上半部のみ	10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・厚手の器壁 ・口縁接合指オサエ後タタキ ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
21	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高19.3 最大径16.6 口径12.8 中型	95% 口縁1/2欠損	10YR6/2 灰黄褐 2.5Y8/3 淡黄	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付オサエ後タタキ ・口縁接合オサエ後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
22	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高17.7 最大径16.0 口径14.2 中型	100% ほぼ完形	10YR1.7/1 黒 10YR4/4 褐	・直線的に開く短い口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付 ・2cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
23	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高24.2 最大径19.6 口径15.6 大型	60%程度 復元して完形	7.5YR7/1 明褐灰 10YR8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・分割接合部にナデ ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
24	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高15.8 最大径14.9 口径14.6 中小型	残存80% 復元して完形	10YR4/6 褐 10YR7/2 にぶい黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・厚手の器壁 ・煮沸二次焼成痕 ・2cm6本水平タタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
25	甕 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高22.0程度 最大径22.3 口径15.7 大型	70%残存 下部欠損	7.5Y7/3 にぶい橙 5Y8/2 灰白	・口縁外反 ・球胴 ・薄手の器壁 ・1.5~1.8cm幅の粘土ひも巻上げ ・上下分割成形 ・口縁接合オサエ後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
26	甕 Ia	89-1-W区 SR－1 土器溜C	器高不明 最大径26.0程度 口径18.4 超大型	25% 口縁・体上半部のみ	2.5Y8/4 淡黄 2.5Y8/3 淡黄	・口縁外反 ・薄手の器壁 ・口縁接合オサエ後タタキ ・煮沸二次焼成痕なし ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
27	甕 —	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高不明 最大径不明 口径12.6	10%以下 口縁部5/1のみ	2.5Y1/4 黄灰 2.5Y2/8 (灰白)	・直線的に開く長い口縁部 ・口縁端部指オサエ成形 ・薄手の器壁 ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
28	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高不明 最大径16.4 口径13.6 中小型	30% 体下半部を欠損	7.5YR8/6 浅黄橙	・直線的で直立気味の口縁 ・薄手の器壁 ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
29	甕 Ib	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高17.5程度 最大径14.0 口径15.0 中小型	40% 体下半部を欠損	10YR7/2 にぶい黄橙	・直線的に開く長い口縁部 ・縦長の体部 ・上下分割成形痕 ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
30	甕 —	89-1-W区 SR－1 土器溜C	推定高不明 最大径18.0程度 口径不明 中型	40% 下部のみ	10YR7/2 にぶい黄橙	・下体部に張りがない ・圧手の器壁 ・底部貼付オサエ後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
31	甕 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高18.3 最大径18.6 口径15.7 中型	100% ほぼ完形	10YR7/2 にぶい黄橙 2.5Y7/1 灰白	・外反する短い口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・下体部外面はケズリ ・3cm8本水平のタタキ ・タタキは体部上半のみ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
32	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高17.9 最大径15.4 口径12.1	85% 復元して完形	10YR3/1 黒褐 10YR5/1 褐灰	・直線的に開く長い口縁部 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・1.5cm4本右上がりのタタキ ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
33	甕 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高9.6 最大径11.4 口径11.9 小型	60% 復元して完形	5YR5/2 灰褐 5Y7/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・上体部が短い ・上下分割成形 ・タタキ後底部貼付オサエ ・煮沸二次焼成痕 ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
34	甕 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高22.0程度 最大径20.9 口径不明 大型	70% 口縁を欠損	10YR4/1 褐灰 7.5YR5/6 明褐	・球胴 ・底部貼付後タタキ ・厚手の器壁 ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
35	甕 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高25.0程度 最大径19.9 口径14.5 大型	80% 復元して完形	10YR8/4 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・内面にヘンラデン痕 ・2.5cm6本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
36	甕 Ic	89-1-E区	器高17.1 最大径16.0 口径14.6 中型	100% ほぼ完形	2.5Y6/2 灰黄 2.5Y8/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・口縁全体指オサエ成形 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕 ・口縁接合オサエ後タタキ ・2cm6本水平のタタキ ・底部は貼付ではない	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
37	甕 III	89-1-W区	推定高17.5程度 最大径15.6 口径不明 中型	60% 口縁・底部欠損	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・2cm6本右上がりタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
38	甕 Ia	89-1-W区	器高不明 最大径不明 口径13.2 中型	10% 下体部ほか欠損	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・口縁端部指オサエ成形 ・口縁接合指オサエ後タタキ ・内面に粘土ひも巻上げ痕 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
39	甕 IIb	89-1-W区	推定高15.5程度 最大径15.8 口径不明 中型	60% 下体部欠損	7.5YR2/1 黒 7.5YR8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・球胴 ・薄手の器壁 ・2cm5本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
40	甕 IIa	89-1-W区	推定高20.0程度 最大径18.0 口径14.0 中型	25% 下体部欠損	7.5YR8/2 灰白	・外反する短い口縁 ・球胴 ・厚手の器壁 ・2cm5本右上がりのタタキ ・口縁接合指オサエ後タタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
41	甕 Ia	89-1-W区	器高不明 最大径17.7 口径13.1	25% 底部ほか欠損	2.5Y6/2 灰黄 5Y8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・上下分割成形 ・薄手の器壁 ・1.5cm5本の右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
42	甕 IIa	89-1-W区	推定高18.0程度 最大径17.0 口径12.8 中型	50% 底部欠損	10YR6/1 褐灰 7.5YR7/1 明褐灰	・口縁端部外接 ・口端部指オサエ成形 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕 ・口縁接合指オサエ後タタキ ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
43	甕 Id	89-1-W区	推定高22.0程度 最大径19.3 口径17.2 大型	70% 底部欠損	10YR1.7/1 黒 10YR8/4 浅黄	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・上下分割成形 ・2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
44	甕 Ia	89-1-W区	推定高19.8 最大径17.6 口径12.2 中型	50% 復元して完形	7.5YR8/2 灰白 5YR8/3 淡橙	・口縁外反 ・縦長の体部 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・上下分割成形 ・底部は貼付後タタキ ・2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
45	甕 Ia	89-1-W区	推定高22.0程度 最大径18.0 口径14.7 大型	20% 底部ほか欠損	10YR8/2 灰白 10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・口縁部までタタキ ・2.5cm6本水平のタタキ ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
46	甕 III	89-1-W区	器高18.2 最大径16.7 口径14 中型	100% ほぼ完形	10YR7/3 にぶい黄橙 7.5YR8/2 灰白	・口縁外反 ・上体部は頚状に立上がる ・球胴 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕なし ・2.5cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
47	甕 Ia	89-1-W区	器高不明 最大径16.0程度 口径不明 中型	30% 上体部ほか欠損	7.5YR6/1 褐灰 10YR7/2 にぶい黄橙	・上下分割成形 ・縦長の体部 ・厚手の器壁 ・底部貼付後タタキ ・2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
48	甕 Ia	89-1-W区	器高不明 最大径不明 口径不明	25% 上体部欠損	10YR8/2 灰白 2.5Y8/2 灰白	・縦長の体部 ・内面ヘラナデ ・底部貼付後タタキ ・底面に藁痕 ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
49	甕 —	89-1-W区 SR-1	器高不明 底形5.3 口径不明	10% 底部のみ	7.5YR5/4 にぶい褐	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
50	甕 —	89-1-W区 SR-1	器高不明 底形5.4 口径不明 大型か？	10% 底部のみ	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y8/2 灰白	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・底面にワラ痕 ・内底面に有機物痕 ・煮沸二次焼成痕 ・1.5cm6本右上がり痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
51	甕 —	89-1-W区 SR-1	器高不明 底径4.8 口径不明 中型	10% 底部のみ	2.5Y8/2 灰白	・球胴 ・内面ヘラナデ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
52	甕 IIc	89-1-E区	器高不明 最大径不明 口径16.6 大	10% 口縁部のみ	5YR8/3 淡橙 7.5YR8/2 灰白	・直線的に開く長い口縁 ・薄手の器壁 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
53	甕 Ia	89-1-E区	器高不明 最大径17.5程度 口径11.8 中小型	10%以下 口縁のみ	2.5Y7/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・薄手の器壁 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
54	甕 Ia	89-1-E区	器高不明 最大径不明 口径17.7	20% 口縁のみ	7.5YR6/6 橙	・口縁外反 ・右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
55	甕 IIb	89-1-E区	器高14.0程度 最大径14.8 口径16.0 中小型	60% 底部欠損	5YR2/1 黒褐 5YR8/3 淡橙	・直線的に開く口縁 ・偏平な器形 ・球胴 ・上下分割成形 ・体部タタキ後ナデ消し ・口縁接合後タタキ後ナデ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
56	甕 —	89-1-E区	器高17.5程度 最大径15.8 口径不明 中小型	55% 口縁・底部欠損	2.5Y8/3 淡黄	・縦長の体部 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・煮沸二次焼成痕 ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
57	甕 —	89-1-E区	推定高14.5程度 最大径14.0 口径13.0 中小型	20% 口縁から上体部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
58	甕 —	89-1-E区	器高不明 底径4.5 口径不明	10% 底部のみ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y7/1 灰白		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
59	甕 Ib	89-1-E区	推定高14.2 最大径12.4 口径13.8	50% 復元して完形	7.5YR8/1 灰白 2.5Y8/3 淡黄	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・薄手の器壁 ・底面にくぼみ ・2cm6本右上がり・水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
60	甕 Ia	89-1-E区	推定高13.0 最大径12.2 口径12.7 小型	100% ほぼ完形	2.5Y8/2 灰白 N7/ 灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底面に径2cmの穴あり ・内面に口縁接合時のオサエ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
61	甕 Ia	89-1-E区	推定高 最大径13.8 口径13.4	70%	10YR8/4	・口縁外反 ・縦長の体部	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
62	甕 Ia	89-1-E区	推定高19.0程度 最大径16.0 口径13.2	25% 底部欠損	10YR3/1 黒褐 10YR1.7/1 黒	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・口縁接合オサエ後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
63	甕 Ia	89-1-E区	推定高19.0程度 最大径16.6 口径不明 中型	40% 口縁部欠損	2.5Y8/3 淡黄	・縦長の体部 ・上下分割成形 ・薄手の器壁 ・煮沸二次焼成痕 ・2cm5本水平タタキ ・底部貼付痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
64	甕 IIb	89-1-E区	器高不明 最大径25.0程度 口径16.4	50% 下体部欠損	7.5YR8/4 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・体部に比して小さな口径 ・厚手の器壁 ・2.5cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
65	甕 IIa	89-1-E区	器高不明 最大径24.5程度 口径17.2 超大型	30% 下体部欠損	10YR7/6 明黄褐	・口縁外反 ・薄手の器壁 ・口縁接合オサエ後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
66	甕 IIb	89-1-E区	推定高21.0~23.0程度 最大径21.0 口径16.2 大型	25% 底部欠損	10YR1.7/1 黒 2.5Y7/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・口縁接合オサエ後タタキ ・煮沸二次焼成痕 ・2.5cm6本右上がりのタタキ ・薄手の器壁	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
67	甕 Ia	89-1-E区	推定高24.0 最大径21.0 口径13.7 大型	60% 復元より完形	10YR7/2 にぶい黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・薄手の器壁 ・上下分割成形 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
68	甕 Ia	89-1-E区	器高26.0 最大径22.5 口径17.1 超大型	100% ほぼ完形	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・薄手の器壁 ・上下分割成形 ・叩き後底部貼付指オサエ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
69	甕 IIb	89-1-E区	推定高21.8 最大径21.0 口径15.4	100% 復元により完形	2.5Y5/1 黄灰 10YR8/2 灰色	・直線的に開く口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕 ・2cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式と推定
70	甕 —	89-1-E区	推定高20.0~22.0程度 最大径20.0程度 口径17.2 大型	10% 口縁部のみ	10YR7/2 にぶい黄橙	・口縁は直線的に開く端部外反 ・口縁基部外面に沈線一条 ・内面板ナデ ・右上がりのタタキ	・口縁外面は板状（ヘラ等）工具による横ナデと考える
71	甕 —	90-1区	器高不明 最大径不明 口径15.6	20% 口縁部のみ	10YR8/4 浅黄橙		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
72	甕 —	90-1区	推定高18.0~20.0程度 最大径17.0程度 口径16.8 中型	10% 口縁部のみ	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y7/2 灰黄	・口縁外反 ・2cm6本右上がりタタキ ・薄手の器壁	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
73	甕 —	90-1区	推定高15.0程度 最大径13.5程度 口径12.4 中小型	10% 口縁部のみ	10YR5/1 褐灰 10YR6/2 灰黄褐	・口縁は直線的に立ち上がり端部外反 ・薄手の器壁 ・煮沸二次焼成痕 ・1.5cm5本水平のタタキ ・長胴（標準的）	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
74	甕 Ib	90-1区	器高不明 最大径不明 口径12.4	25%	7.5YR6/4 にぶい橙		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
75	甕 —	90-1区	推定高14.0程度 最大径13.5程度 口径12.3 中小型	20% 口縁部のみ	2.5Y7/2 灰黄	・口縁外反 ・縦長の体部 ・1.5cm5本右上がりのタタキ ・口縁基部外面におよぶタタキ	・口縁外面の横ナデ幅は狭く女性か子供のものと考えられる
76	甕 IIb	90-1区	推定高不明 最大径23.0程度 口径14.6 超大型	20% 口縁部から上体部のみ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/2 灰白	・口縁は短く直線的に立ち上がる ・口縁は指オサエ後横ナデ成形 ・厚手の器壁 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
77	甕 IIb	90-1区	推定高16.9 最大径17.2 口径12.4	90% 復元により完形	7.5YR2/1 黒 10YR7/2 にぶい黄橙	・直線的に開く短い口縁 ・球胴 ・底部貼付指オサエ ・上下分割成形か不明 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
78	甕 Ia	90-1区	推定高15.4 最大径13.0 口径12.4 中小型	70% ほぼ完形	10YR5/1 褐灰 10YR8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕 ・1.5cm6本右上がりのタタキ ・底部貼付痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
79	甕 IIb	90-1区	器高13.0 最大径13.2 口径12.9 小型	95% ほぼ完形	N2/ 黒 2.5Y8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕 ・体下部タタキは装飾的	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
80	甕 IIb	90-1区	器高13.0 最大径13.6 口径12.8	95% ほぼ完形	5YR2/1 黒褐 7.5YR7/1 明褐灰	・直線的に開く口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・底部貼付オサエ後タタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
81	甕 Ia	90-1区	器高11.5 最大径10.8 口径11.3 小型	ほぼ完形	外面上半2.5Y8/2 灰白 外面下半2.5Y8/1 灰白 2.5Y7/1灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・底部貼り付け ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
82	甕 Ia	90-1区	推定高20.5程度 最大径17.3 口径14.8 中型	80% 底部欠損	2.5Y8/1 灰白	・僅かに外反する口縁 ・口縁指オサエ成形 ・口縁成形オサエ後タタキ ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・薄手の器壁 ・1.5cm6本水平のタタキ ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
83	甕 Ia	90-1区	推定高21.0程度 最大径18.0 口径16.8 大型	70% 底部欠損	7.5YR8/2 灰白	・僅かに外反する口縁 ・口縁指オサエ成形 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・薄手の器壁 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
84	甕 IIc	90-1区	推定高16.0程度 最大径16.2 口径16.2 中型	50% 底部欠損	10YR5/1 褐灰 10YR6/1 褐灰	・僅かに外反する長い口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・薄手の器壁 ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
85	甕 IIb	90-1区	器高不明 最大径18.3 口径不明	60% 上体部のみ	10YR8/2 灰白 10YR8/3 浅黄橙	・球胴か ・上下分割成形 ・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
86	甕 IIb	90-1区	器高20.5 最大径18.5 口径14.4 中型	ほぼ完形	10YR7/1 黒 10YR8/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・口縁指オサエ成形 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・口縁成形後タタキ ・内面9~15cmの粘土ひも巻上げ痕 ・底部貼付オサエ後タタキ ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
87	甕 Ia	90-1区	推定高20.0程度 最大径18.1 口径14.6 中型	60% 復元により完形	2.5YR8/2 灰白 10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・底部貼付オサエ後タタキ ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
88	甕 III	90-1区 SR-1	器高19.2 最大径16.6 口径14.2	完形	2.5Y8/4 淡黄 2.5Y8/2 灰白	・口縁外反 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕なし ・底部貼付オサエ後タタキ ・体下部内面へラミガキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
89	甕 Ia	90-1区	推定高20.0程度 最大径16.8 口径不明 中型	60% 口縁部欠損	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y8/3 淡黄	・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付オサエ後タタキ ・薄手の器壁 ・1.5cm4本程度水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
90	甕 VI	90-1区	推定高25.0程度 最大径20.8 口径不明 大型	95% 口縁端部欠損	2.5Y8/3 淡黄	・縦長の体部(奇形) ・分割成形技法 ・底部は丸底 ・外面タタキは見えない	・搬入された土器と推定される (徳島・阿波か？)
91	甕 IIb	90-1区	器高不明 最大径19.4 口径16.6	50%	5YR2/1 黒褐 2.5Y6/1 黄灰	・直線的に開く口縁 ・上下分割成形 ・2cm6本右上がりタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
92	甕 II	90-1区	推定高20.5前後 最大径18.5 口径不明 中型	50% 口縁部から上体部にかけて欠損	5YR7/1 明褐灰 7.5YR6/1 褐灰	・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ ・煮沸二次焼成痕 ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
93	甕 —	90-1区	器高不明 底径4.5 口径不明	20% 底部のみ	2.5Y6/3 にぶい黄	・縦長の体部 ・底部貼付痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
94	甕 —	90-1区	推定高20.0前後 底径4.1 口径不明 中型	10% 底部のみ	2.5Y7/2 灰黄 5Y 浅黄	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ ・底面に指頭痕 ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
95	甕 —	90-1区	推定高16.5~18.5前後 底径3.6 口径不明 中型	10% 底部のみ	10YR7/4 にぶい黄橙	・縦長の体部 ・煮沸二次焼成痕なし ・タタキ詳細不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
96	甕 —	90-1区	推定高24.0~26.0前後 底径4.2 口径不明	10% 底部のみ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/2 灰白	・縦長の体部 ・体部タタキ後底部貼付 ・煮沸二次焼成痕 ・タタキ詳細不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
97	甕 —	90-1	器高不明 底径4.2 口径不明 中型	10% 底部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/2 灰白	・底部貼付後タタキ ・タタキ詳細不明 ・底部から下体部のカーブは丸い	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
98	甕 —	90-1	器高不明 底径4.7 口径不明 中型	10% 底部のみ	2.8Y8/2 灰白	・底部径に対して最大径が大きい ・底部やや突出気味 ・底部貼付後タタキ ・タタキ詳細不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
99	甕 —	90-1	器高不明 底径5.8 口径不明 大型	10% 底部のみ	2.5YR7/4 淡赤橙 10YR6/1 褐灰	・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
100	甕 —	90-1	推定高18.5~20.5程度 底径4.0 口径不明 中型	20% 底部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・縦長の体部 ・下体部は尖り気味 ・底部貼付後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
101	甕 —	90-1	推定高20.0程度 底径4.2 口径不明 中型	10% 底部のみ	2.5Y8/2 灰白	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
102	甕 —	90-1	推定高17.0程度 底径4.5 口径不明 中型	10% 底部のみ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/1 灰白	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
103	甕 IIa	90-1 SR-1	器高不明 最大径20.0 口径不明	70%	5YR4/1 褐灰 5YR8/1 灰白	・球胴 ・1.5cm5本水平 ・右上がりのタタキ ・上下分割成形	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
104	甕 Ia	90-1 SR-1	推定高20.0~22.0程度 最大径20.3 口径16.3 大型	70% 下体部から底部にかけて欠損	7.5YR7/3 にぶい橙	・直線的に開く口縁 ・上下分割成形 ・厚手の器壁 ・内面に粘土ひも巻上げ痕 ・2cm5本水平タタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
105	甕 —	90-1 SR-1	推定高18.0~20.0程度 推定最大径16.5~17.0程度 口径不明 中型	10% 口縁部のみ	5YR7/3 にぶい橙 2.5Y7/3 浅黄	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・口縁成形後タタキ ・2.5cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
106	甕 —	90-1 SR-1	推定高20.0~22.0程度 推定最大径19.0程度 口径12.4 大型	10% 口縁部のみ	2.5Y7/3 浅黄	・最大径に対し口径が小さい ・僅かに内湾気味の口縁 ・口縁端に刻み目 ・内面粘土ひも左上がり巻上げ ・タタキ詳細不明	・口縁形状から和歌山県地方の甕と類似か？
107	甕 Ia	90-1 SR-1	推定高18.0程度 最大径17.3 口径不明 中型	40% 上体部のみ	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/3 浅黄橙	・縦長の体部 ・2cm5本水平のタタキ ・内面粘土ひも巻上げ痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
108	甕 Ia	90-1 SR-1	器高不明 最大径15 口径不明	40% 上体部のみ	2.5Y7/1 灰白 10YR5/1 褐灰	・球胴 ・2.5cm7本右上がりのタタキ ・上下分割成形	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
109	甕 —	90-1 SR-1	推定高14.0~14.2程度 最大径12.5 推定口径9.0~10.0程度 小型	70% 口縁端部欠損	2.5Y8/2 灰白 10YR4/1 褐灰	・縦長の体部 ・上下分割成形 ・厚手の器壁 ・煮沸二次焼成痕 ・1.5cm5本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
110	甕 —	90-1 SR-1	器高不明 最大径11.6 口径10.6	60% 底部欠損	10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・2cm5本右上がりのタタキ ・タタキ後口縁接合オサエ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
111	甕 Ia	90-1 SR-1	推定高15.5程度 最大径13.5 口径11.5 中小型	40% 復元して完形	10YR7/6 明黄褐	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・タタキ不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
112	甕 Ia	90-1 SR-1	推定高14.7程度 最大径13.2 口径12.2	60% 復元して完形	10YR7/1 灰白 10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ ・タタキ詳細不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴		備考
113	甕 Ia	90-1 SR-1	器高14.2 最大径13.1 口径12.6 小型	75% 復元して完形	7.5YR7/6 橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
114	甕 Ic	90-1 SR-1	器高12.5 最大径12.5 口径14.0	70%	10YR5/1 褐灰 10YR8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・内面粘土ひも巻上げ痕	・底部貼付後タタキ ・底面に大きな窪み ・煮沸二次焼成痕 ・1.5cm5本水平タタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
115	甕 IIa	90-1 SR-1	器高19.05 最大径17.6 口径14.2	50% 復元して完形	10YR4/2 灰黄褐 2.5Y8/2 灰白	・僅かに外反する口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ	・2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
116	甕 IIb	90-1 SR-1	器高17.7 最大径15.8 口径13.9 中型	90% 復元して完形	5YR5/1 褐灰 10YR8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・球胴 ・上下分割成形 ・底部突出気味	・底部貼付後タタキ ・内面不定方向のナデ ・煮沸二次焼成痕 ・2cm7本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
117	甕 IIb	90-1 SR-1	器高15.4 最大径14.2 口径11.7 中小型	85% 復元して完形	10YR1.7/1 黒 10YR7/6 明黄褐	・直線的に開く短い口縁 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ	・2cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
118	甕 Ia	90-1 SR-1	推定高16.0~16.5程度 最大径14.5 口径不明 中型	50% 口縁部欠損	2.5Y7/2 灰黄	・縦長の体部 ・上下分割成形 ・厚手の器壁	・1.5cm5本右上がりのタタキ ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
119	甕 Ia	90-1 SR-1	器高25.7 最大径21.6 口径15.4 超大型	95% ほぼ完形	10YR1.7/1 黒 10YR7/2 にぶい黄橙	・直線的に開く口縁 ・縦長の体部 ・分割成形（体部は3分割）	・口縁は指オサエで成形 ・2cm6本水平のタタキ ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
120	甕 Ia	90-1 SR-1	器高23.6 最大径19.4 口径16.0 大型	75% ほぼ完形	5YR5/1 褐灰 5YR7/1 明褐灰	・僅かに外反する口縁 ・縦長の体部 ・分割成形 ・底部貼付後タタキ	・2.5cm6本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
121	甕 II	90-1 SR-1	推定高20.0~20.5程度 最大径18.9 口径不明 大型	90% 口縁部欠損	10YR7/3 にぶい黄橙	・球胴 ・底部突出 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕なし	・底部貼付後タタキ ・2.5cm8本水平・右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
122	甕 V	90-2	器高不明 最大径不明 口径15.2	25% 口縁部のみ	2.5Y8/2 灰白	・内湾気味の口縁 ・器壁はやや厚手 ・内外面にハケメ		・在地生産土器 ・布留系土器
123	甕 —	90-2 SR-1	推定高20.0~22.0程度 推定最大径18.0程度 口径16.4 中型	20% 口縁部のみ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/2 灰白	・口縁外反 ・口縁は指オサエで成形 ・縦長の体部	・内面粘土ひも左上がり巻上げ痕 ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
124	甕 —	90-2 SR-1	器高不明 最大径不明 口径16.4 中型	10% 口縁部のみ	5YR7/1 明褐灰 5YR8/3 淡橙	・外反する分厚い口縁 ・体部は不明		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
125	甕 —	90-2 西土器溜	器高不明 最大径不明 口径16.2	10% 口縁部のみ	7.5YR7/4 にぶい橙 10YR7/4 にぶい黄橙	・直線的に開く口縁 ・口縁基部外面オサエ		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
126	甕 —	90-2 S拡張区	器高不明 最大径不明 口径16.6	20% 口縁部のみ	10YR7/2 にぶい黄橙 5Y4/1 灰	・外反する口縁 ・2cm6本右上がりのタタキ		・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
127	甕 IIa	90-2	推定高18.5~20.5程度 最大径18.6 口径15.0 中型	60% 底部欠損	7.5YR7/2 明褐灰 7.5YR7/4 にぶい橙	・外反する口縁 ・球胴 ・内面粘土ひも巻上げ痕	・薄手の器壁 ・煮沸二次焼成痕あり ・2.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
128	甕 IV	90-2 SR-1	推定高19.0程度 最大径16.3 口径13.6 中型	80% 底部欠損	N2/ 黒 2.5Y5/1 黄灰	・直線的に開く口縁 ・口縁は指オサエで成形 ・縦長の体部	・内面粘土ひも右上がり巻上げ痕 ・体内面ケズリ痕	・在地生産土器 ・庄内布留系か？

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
129	甕 IV	90-2 E拡張区 SR-1	推定高19.0~19.5程度 最大径17.0 口径12.6 容量2.0ℓ	80% 底部欠損	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙	・僅かに内湾する口縁 ・薄手の器壁 ・球胴（やや縦長） ・内外面調整不明	・庄内系土器か？ ・胎土は加賀南部産の可能性
130	甕 IIb	90-2 E拡張区 SR-1	推定高20.5~21.0程度 最大径18.0 口径12.8 中型	80% 底部欠損	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y8/3 淡黄	・口縁波直線的に開き端部外反 ・球胴 ・上下分割成形 ・2cm6本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
131	甕 IV	90-2 E拡張区 SR-1	器高不明 最大径12.2 口径11.4	40%	10YR7/2 にぶい黄橙	・内湾する口縁 ・縦長の体部 ・体部外面調整は不明	・在地生産土器
132	甕 IIb	90-2 E拡張区	器高18.7 最大径19.0 口径14.8 中型	60%	10YR2/2 にぶい黄橙 5Y2/2 オリーブ黒	・直線的に開く口縁 ・2cm6本水平タタキ ・球胴 ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
133	甕 Ia	90-2 E拡張区 SR-4	器高16.7 最大径14.9 口径12.0	90% ほぼ完形	10YR5/2 灰黄褐 10YR4/3 にぶい黄褐	・直線的に開く口縁 ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部圧縮成形	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
134	甕 V	90-2 西土器溜	推定高16.8程度 最大径15.0 口径12.9	80% 復元して完形	7.5YR1.7/1 黒 7.5YR7/4 にぶい橙	・直線的に開く長い口縁 ・外面にハケの痕跡 ・薄手の器壁 ・内面ケズリ痕 ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・庄内・布留系か？
135	甕 Ia	90-2 E拡張区 SR-4	器高15.7 最大径14.3 口径14.4	70% 復元して完形	5YR3/4 にぶい赤褐 10YR4/1 褐灰	・僅かに外反する口縁 ・1.5cm5本右上がりのタタキ ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
136	甕 Ic	90-2 S拡張区 SR-1	器高16.5 最大径16.8 口径18.5	90% 復元により完形	2.5YR6/1 黄灰 5Y2/2 オリーブ黒	・直線的に開く口縁 ・内面ヘシ状工具によるケズリ ・縦長の体部 ・上下分割成形 ・女性・子供煮よる口縁成形オサエ ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
137	甕 IIb	90-2 S拡張区 SR-1	器高25 最大径22.4 口径16.6	50%	7.5YR8/3 浅黄橙 5YR8/3 淡橙	・直線的に開く口縁 ・2.5cm6本右上がりのタタキ ・上下分割成形 ・球胴	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
138	甕 Ia	90-2 S拡張区 SR-1	推定高23.5程度 最大径20.0 口径14.0 大型	70% 底部欠損 復元により完形	10YR8/1 灰白 2.5YR8/1 灰白	・僅かに外反する口縁 ・縦長の体部 ・2.5cm6本右上がりのタタキ ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
139	甕 IId	90-2 S拡張区 SR-1	推定高22.0程度 最大径20.9 口径13.2 大型	95% 復元により完形	5Y4/1 灰 5Y4/1 灰	・直線的に開く口縁 ・上下分割成形 ・球胴 ・0.9~1.6mm粘土ひも巻上げ痕 ・最大径に対して狭い口縁 ・2.5cm7本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
140	甕 Id	90-2 E拡張区 SR-1	推定高28.5程度 最大径20.8 口径不明 超大型	95% 口縁端部欠損 ほぼ完形	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y7/1 灰白	・直線的に開く口縁 ・内面ヘラ状工具によるナデ ・長胴（奇形的な縦長） ・2cm7本・3cm7本水平のタタキ ・分割成形（体部3段分割） ・煮沸二次焼成痕	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
141	甕 Ia	90-2 E拡張区 SR-1	推定高25.5程度 最大径22.3 口径17.8 超大型	95% 底部欠損 復元して完形	10YR1.7/1 黒 2.5Y8/2 灰白	・口縁外反 ・2cm6本水平のタタキ ・縦長の体部 ・口縁基部内面指オサエ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
142	甕 Ia	90-2 E拡張区 SR-4	器高不明 最大径19.4 口径不明 大型	50% 口縁部と上体部欠損	2.5Y3/1 黒褐 2.5Y6/3 にぶい黄	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・上下分割成形 ・2.5cm7本水平 ・右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
143	甕 Ia	90-2 西土器溜	器高不明 最大径12.3 口径不明	50% 口縁部欠損	10YR4/2 灰黄褐 10YR7/3 黄橙	・縦長の体部 ・2.5cm6本水平のタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
144	甕 Ia	90-2 E拡張区 SR-4	器高不明 最大径11.3 口径不明	70% 口縁部欠損	2.5YR7/2 灰黄 2.5YR8/2 灰白	・縦長の体部 ・底部貼付後タタキ ・上下分割成形 ・煮沸二次焼成痕なし ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・1.5cm5本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
145	甕	90-2 E拡張区 SR-4	推定高18.5程度 底径4.1 口径不明 中型	20% 底部のみ	5YR6/6 橙 5YR7/2 明褐	・長胴(標準的) ・上下分割成形 ・体部タタキ後底部貼付 ・2.5cm5本右上がりのタタキ	・鉢の可能性あり
	—						
146	甕	90-2	推定高17.5~22.5程度 底径3.5 口径不明 大型	10% 底部のみ	2.5Y7/1 灰白	・長胴か球胴か不明 ・上下分割成形 ・底部貼付後タタキ ・底部突出 ・2cm6本右上がりタタキ ・内面板状工具によるナデ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
	—						
147	甕	90-2	推定高17.5以下 底径3.8 口径不明 中型	10% 底部のみ	7.5YR8/1 灰白 10YR7/1 灰白	・底部貼付痕なし ・タタキ詳細不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
	—						
148	甕	90-2 西土器溜	器高不明 底径3.8 口径不明 大型	10% 底部のみ	5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	・右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
	—						
149	甕	90-2	器高不明 底径4.3 口径不明	10% 底部のみ	10YR8/2 灰白 10YR7/1 灰白	・底部貼付痕なし ・煮沸二次焼成痕 ・タタキ詳細不明	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
	—						
150	甕	90-2 西土器溜	器高不明 底径3.4 口径不明	10% 底部のみ	10YR6/4 にぶい黄橙 5YR5/3 にぶい赤褐	・右上がりのタタキ ・底面に窪み	・在地生産土器 ・伝統的第Ⅴ様式
	—						
151	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 最大径不明 口径17.9 底径不明	20% 口縁部のみ	10YR7/2 にぶい黄橙 7.5Y6/4 にぶい橙	・口縁は上下二段成形 ・口縁基部は完結しており体部とは分割成形である ・内面粘土ひも巻上げ痕	・在地生産土器
	Ⅰa						
152	壺	89-1 土器溜A	推定高24.0~27.0程度 最大径22.7 口径13.9 底径不明	20% 口縁部のみ	2.5Y8/1 灰白	・口縁基部には頸部状の幅がある ・口縁接合時の内外指オサエ ・3cm7本水平のタタキあり ・口縁内面に横方向のミガキ ・厚手の器壁	・在地生産土器
	Ⅰb						
153	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高26.0~28.0程度 最大径25.0 口径15.6 底径不明	40% 口縁部及び上体部のみ	10YR7/8 黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	・外反する口縁 ・口縁基部外面に貼付突帯一条 ・体部内面に粘土ひも巻上げ痕	・貼付突帯は接着力の強化とともに装飾性を帯びる ・在地生産土器
	Ⅰa						
154	壺	89-1-W区	器高12.1 最大径11.7 口径10.8 底径3.0	完形	2.5Y7/3 浅黄	・直線的に開く長い口縁 ・体部はほぼ球形 ・底部は貼付 ・上下分割成形 ・体部外面にミガキ ・口縁内面にミガキ ・底面に径1cmの窪み	・在地生産土器
	Ⅱa						
155	壺	89-1-W区	器高9.5 最大径9.7 口径8.4 底径2.4	75% 復元して完形	7.5YR7/4 にぶい橙 2.5Y8/1 灰白	・直線的に立上がる口縁 ・体部は球形(上下に扁平) ・底部貼付指オサエ ・上下分割成形 ・内外にナデ	・在地生産土器
	Ⅱb						
156	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高12.6 最大径11.6 口径9.1	50% 復元して完形	7.5YR7/4 にぶい橙 2.5Y8/2 灰白	・直線的に開く口縁 ・体部は球形(やや下膨れ) ・丸底 ・上下分割成形	・在地生産土器
	Ⅲ						
157	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 最大径10.7 口径不明 底径2.8	70% 口縁部欠損	10YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙	・体部は球形(やや左右に扁平) ・上下分割成形 ・タタキ後ナデ ・内面に朱の痕跡 ・丸底	・在地生産土器
	Ⅱb						
158	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高8.3 最大径8.4 口径7.8 底径5.6	95% 口縁以外完形	10YR7/3 にぶい黄橙	・直線的に開く低い口縁 ・体部は中央で膨らむが底部に向かって尖らず広い底部が接続する ・体部内面には無数の指オサエによる成形痕がある	・在地生産土器
	Ⅳ						
159	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高6.8 最大径7.3 口径6.2 底径3.6	ほぼ完形	2.5Y8/1 灰白	・短く屈曲する口縁 ・体部内面に1.2cm粘土ひも巻上げ痕 ・外形は長胴の甕形 ・底面に数条の線刻	・在地生産土器
	Ⅴ						
160	壺	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高19.05 最大径16.1 口径9.1 底径3.11	80% 復元して完形	7.5YR8/3 浅黄橙 N4/ 灰	・直線的に開く長い口縁 ・体部は上下に扁平な楕円形 ・上下分割成形 ・調整不明 ・底部は平底	・在地生産土器
	Ⅰc						

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
161	壺 Ic	89-1	器高15.4 最大径12.1 口径8.2 底径3.1	90% 復元して完形	2.5Y8/2 灰白 10YR8/1 灰白	・直線的に開く長い口縁 ・体部は球形・下部尖り気味 ・底部貼付オサエ	・在地生産土器
162	壺 Ia	89-1	器高14.0 最大径15.4 口径12.4 底径3.6	40% 復元して完形	2.5Y6/6 橙 10YR7/2 にぶい黄橙	・直線的に開く口縁 ・体部上下に扁平な楕円形 ・底部貼付オサエ ・内面粘土ひも巻上げ痕 ・煮沸二次焼成痕なし	・在地生産土器 ・甕の可能性
163	壺 Ib	89-1	器高17.5 最大径16.0 口径11.0 底径5.1	60% 復元して完形	5YR8/3 淡橙 10YR8/2 灰白	・口縁端部内湾つまみ上げ ・体部は上下に扁平な楕円形 ・底部輪条粘土板貼付ツブシ ・タタキ痕あり	・在地生産土器
164	壺 IIb	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高不明 最大径10.0 口径不明 底径2.3	80% 口縁部欠損	2.5Y8/2 灰白 2.5YR7/4 淡赤橙	・体部は上下に扁平な球形 ・底部貼付平底 ・上下分割成形 ・底面に指頭痕 ・非常に厚手の器壁	・在地生産土器
165	壺 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高不明 最大径不明 口径15.6 底径不明	10% 口縁部のみ	2.5Y8/1 灰白	・外反の大きい口縁 ・口縁は上下2段に分割成形 ・口縁端部僅かに下垂	・在地生産土器
166	壺 Ia	89-1-W区	器高不明 最大径不明 口径22.2 底径不明	10% 口縁部のみ	10YR8/4 浅黄橙	・口縁は3段に分割成形 ・分割成形接合部にナデ後波状文 ・口縁は複合口縁形態 ・口縁端部は緩やかに内湾 ・口縁端部外面4ヶ所に端部接合時の粘土充填箇所あり	・在地生産土器
167	壺 VI	89-1-W区	器高不明 最大径不明 口径30.0 底径不明	10%以下 口縁部片のみ	10YR8/2 灰白 10YR1.7/1 黒	・口縁は直線的に開く形状 ・口縁内面に1cm5本単位のハケによる波状文 ・口縁端部外面に約5cm間隔3個1対の径4mmの竹管文 ・非常に薄い器壁	・在地生産か不明
168	壺 —	89-1-W区	推定高13.0~14.0前後 最大径14.8 口径11.9 底径不明	20% 底部欠損	10YR8/4 浅黄橙 10YR6/1 褐灰	・直線的に開く口縁 ・体部は上下に扁平な球形 ・2次焼成痕はない ・内面に粘土ひも巻上げ痕 ・体部内面は黒変色	・在地生産土器 ・内面黒変色は有機物か？
169	壺 —	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 最大径不明 口径不明 底径5.3	15% 底部のみ	10YR8/4 浅黄橙	・球形体部の底 ・底部貼付指オサエ ・底部上方に焼成後の穿孔1ヶ所 ・下体部外面に不定方向のハケメ	・在地生産土器
170	壺 —	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 最大径不明 口径不明 底径2.9	10% 底部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙		・在地生産土器
171	壺 —	89-1-E区	器高不明 最大径不明 口径不明 底径3.8	10%以下 底部のみ	7.5YR7/4 にぶい橙	・体部は上下扁平の球形 ・底部貼付時の小さな指頭痕 ・下体部内面にヘラケズリ	・在地生産土器
172	壺 Ia	89-1-E区	器高不明 最大径不明 口径15cm 底径不明	10% 口縁部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・外反する長い口縁 ・口縁端部外面にヘラ状工具による縦線刻帯 ・口縁外面に縦方向のヘラミガキ	・在地生産土器 ・庄内Ⅰ期頃
173	壺 Ia	89-1-E区	器高18.1 最大径18.0 口径13.6 底径3.4	90% 復元して完形	7.5YR7/8 黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	・複合口縁形状 ・体部は上下扁平の球形 ・体部上下分割成形 ・底部貼付オサエ ・体部外面粘土ひも巻上げ痕 ・口縁2段分割成形 ・底部内面黒変色	・在地生産土器 ・庄内Ⅰ期頃
174	壺 Ia	89-1-E区	器高17.3 最大径16.8 口径不明 底径2.7	95% ほぼ完形	7.5YR8/2 灰白 10YR4/1 褐灰	・体部は上下扁平の球形 ・底部貼付痕 ・体部上下分割成形 ・下体部外面にタタキ痕 ・体部外面に粘土ひも巻上げ痕 ・体部内面は黒変色	・在地生産土器 ・庄内Ⅰ期頃
175	壺 IIa	89-1-E区	器高13.1 最大径11.2 口径11.6 底径4.3	90% 復元して完形	10YR8/1 灰白	・直線的に開く長い口縁 ・長胴気味の体部 ・体部は上下分割成形 ・底部輪状粘土貼付 ・小さな指による口縁接合オサエ ・体部外面にタタキ痕後ナデ ・厚手の器壁 ・下体部内面に縦方向ヘラミガキ	・在地生産土器
176	壺 Ia	89-1-E区	器高不明 最大径不明 口径不明 底径不明	10% 上体部のみ	2.5Y7/4 浅黄 2.5Y8/3 淡黄	・口縁基部（頸部）にヘラ状工具による刺突文帯一条	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
177	壺 IIc	89-1-W区 SR-1	推定高5.4～5.8 最大径13.0 口径13.0 推定底部径4.1～4.5	20% 底部体部欠損	7.5YR8/4 浅黄橙	・器壁は内湾して立上がり一度外方へ屈曲した後口縁へ向かって内湾する ・口縁基部外面に指オサエ ・粘土が粗	・在地生産土器
178	壺 V	90-1 SR-1	器高11.6 最大径10.9 口径6.2 底径2.3	70% 復元して完形	10YR8/1 灰白	・不均整の器形 ・口縁は体部端つまみ上げ ・体部上下分割成形 ・底部貼付指オサエ ・厚みの不均一な器壁	・在地生産土器
179	壺 V	90-1 SR-1	器高14.3 最大径13.7 口径9.8 底径3.6	80% 復元して完形	7.5YR5/8 明褐 10YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く短い口縁 ・体部は球形 ・底部貼付指オサエ ・体部内面粘土ひも巻上げ痕 ・二次焼成はない	・在地生産土器
180	壺 IIa	90-1 SR-1	器高10.9 最大径10.5 口径10.9 底径2.8	95% 胴部中央部を欠く復元して完形	10YR8/4 浅黄橙	・直線的に開く口縁 ・長胴の体部 ・体部内面はケズリ ・底部圧縮成形 ・二次焼成はない	・在地生産土器
181	壺 Ia	90-1 SR-1	器高不明 最大径不明 口径11.7 底径不明	10% 口縁部のみ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/1 灰白	・外反する長い口縁 ・口縁内面に縦方向のヘラミガキ	・在地生産土器
182	壺 —	90-1 SR-1	器高不明 最大径不明 口径不明 底径4.0	10% 底部のみ	2.5Y4/2 暗灰黄 2.5Y7/3 浅黄	・底部貼付指オサエ ・体部上下に扁平な球形	・在地生産土器
183	壺 IIb	90-1	器高不明 最大径不明 口径不明 底径2.8	30% 底部の約1/2のみ	10YR8/4 浅黄橙	・体部は球形 ・体部上下分割成形 ・底部貼付指オサエは非常に小さな指腹による ・体部外面にハケメ痕	・在地生産土器
184	壺 Ia	90-1	器高不明 最大径不明 口径17.0 底径不明	20% 口縁部のみ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	・複合口縁状 ・口縁は頚状部を含め3段分割成形 ・胎土は緻密 ・口縁接合部外面に上下2段にヘラ状工具による刺突文突帯が一条めぐる	・在地生産土器
185	壺 Ia	90-1 SR-1	器高不明 最大径不明 口径14.0 広口壺系	20% 口縁部のみ	2.5YR8/2 灰白 5Y6/1 灰	・外反する長い口縁 ・体部内面に粘土ひも巻上げ痕 ・口縁基部内面に接合時オサエ	・在地生産土器
186	壺 Ia	90-1	器高不明 最大径不明 口径15.4 底径不明	20% 口縁部のみ	10YR8/1 灰白	・大きく外反する口縁 ・厚手の器壁	・在地生産土器
187	壺 III	90-1	器高不明 最大径不明 口径11.6 底径不明	25% 口縁部のみ	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/3 淡黄	・直線的に開く長い口縁	・在地生産土器
188	壺 Ia	90-1	器高不明 推定最大径28.5程度 口径不明 底径	10% 体部上半1/4のみ	7.5YR6/6 橙 5Y8/2 灰白	・口縁基部内面に接合時の指オサエ ・体部内面に粘土ひも巻上げ痕	・在地生産土器
189	壺 Ia	90-1 SR-1	器高不明 最大径不明 口径不明 底径不明	10% 頚部のみ	7.5YR5/6 明褐	・複合口縁状 ・口縁接合部外面にヘラ状工具による縦方向の刺突文突帯が一条めぐる	・在地生産土器
190	壺 Ia	90-1 土器溜A	器高17.5 最大径15.6 口径10.2 底径3.3	ほぼ完形	5YR7/4 にぶい橙 5Y8/2 灰白	・外反する口縁 ・体部は球形 ・口縁は上下2段分割形成 ・体部は上下分割成形 ・底部は輪状粘土貼付	・在地生産土器
191	壺 IIb	90-1 SR-1	器高11.3 最大径10.7 口径8.4 底径4.3	完形	2.5Y7/1 灰白	・直線的に立上がる短い口縁 ・体部は長胴気味 ・体部上下分割成形 ・上体部外面に粗いタタキ ・底部輪状粘土貼付 ・口縁基部内面指オサエ	・在地生産土器
192	壺 Ia	90-1	器高18.5 最大径16.8 口径11.2 底径2,8	80% 復元して完形	7.5Y8/2 灰白 2.5Y7/1 灰白	・複合口縁気味に外反する口縁 ・口縁基部内面に接合指オサエ ・体部は球形 ・底部貼付 ・体部外面タタキ後ナデ	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
193	壺 Ia	90-1	器高不明 最大径不明 口径不明 底径4.0	40% 底部のみ	2.5Y8/2 灰白	・体部外面に縦方向のハケメ ・底面に窪み	・在地生産土器
194	壺 Ia	90-1 SR-1	器高不明 最大径不明 口径不明 底径2.6	40% 底部のみ	2.5Y8/4 淡黄 2.5Y8/2 灰白	・下体部に右上がりのタタキ ・丸底	・在地生産土器
195	壺 IV	90-1	器高不明 推定最大径10.0前後 口径不明 底径5.3	20% 底部のみ	2.5Y8/2 灰白	・底部粘土板貼付 ・底面に平行線条痕	・在地生産土器 ・171と類似か
196	壺 Ia	90-1 SR-1	器高不明 最大径不明 口径不明 底径4.2	20% 底部のみ	2.5Y8/2 灰白 N5/ 灰白	・体部は上下扁平球型 ・底部貼付指オサエ ・内底面ヘラケズリ痕 ・内底面黒色変化	・在地生産土器
197	壺 Ia	90-2 E拡張区	器高14.4 最大径12.9 口径11.3 底径2.4	ほぼ完形	10YR8/3 浅黄 2.5Y1/7 灰白	・外反気味の口縁 ・体部は長胴気味の球形 ・下体部外面タタキ後ナデ ・底部貼付 ・体部は上下分割成形だが胎土は上下体部で異なる	・在地生産土器
198	壺 III	90-2 SR-1	器高13.6 最大径12.1 口径11.1 底径3.8	80% 復元して完形	2.5Y7/1 灰白 2.5Y2/1 黒	・直線的に開く長い口縁 ・体部上下扁平球形 ・底面に径3.8cmの穿孔	・在地生産土器
199	壺 III	90-2	器高不明 最大径9.0 口径不明 底径3.0	20% 復元して完形	2.5Y8/3 淡黄 10YR6/3 にぶい黄橙	・直線的に開く口縁 ・体部は下部へ尖り気味の長胴 ・体部外面タタキ後ナデ ・体部内面は赤色変化	・在地生産土器 ・内面の赤変色は朱か？
200	壺 Ia	90-2 E拡張区	器高不明 最大径不明 口径15.3 底径不明	30% 口縁部のみ	10YR8/3 浅黄橙	・口縁は2段分割成形だが接合面に液状（泥状）粘土を充填した痕 ・口縁基部内面に指オサエがあるが指頭は小さい	・在地生産土器
201	壺 Ia	90-2 西土器溜	器高不明 最大径不明 口径11.3 底径不明	10% 口縁部のみ	2.5Y8/4 淡黄 2.5Y6/2 灰黄	・僅かに外反するながい口縁 ・厚手の器壁	・在地生産土器
202	壺 Ia	90-2 SR-1	器高不明 最大径18.0 口径不明 底径4.8	40% 胴体部のみ	2.5Y8/2 灰白 N3/ 暗褐	・体部は球形 ・底部貼付指オサエ ・焼成良好のため瓦質状態 ・体部外面1.5cm5本右上がりのタタキ ・体部外面に右上がり粘土ひも巻上げ痕	・在地生産土器
203	壺 Ia	90-2	器高不明 最大径13.8 口径不明	70% 口縁部欠損	2.5Y8/5 淡黄	・体部は上下扁平球形 ・体部上下分割成形 ・口縁基部内面指オサエ ・上体部の基壁は厚目 ・内面ヘラナデ ・丸底状	・在地生産土器
204	壺 Ia	90-2 西土器溜	器高不明 最大径14.8 口径不明 底径3.9	35% 口縁部欠損	2.5Y8/3 淡黄 N3/ 暗灰	・体部は上下扁平球形 ・体部上下分割成形 ・底部貼付 ・体部内面横ナデ	・在地生産土器
205	壺 Ia	90-2 SR-1	器高不明 最大径21.8 口径不明 底径3.2	95% 口縁端部欠損	5YR6/6 橙 2.5Y5/1 黄灰	・体部は上下扁平球形 ・体部上下分割成形 ・内面は黒変色 ・底部円形粘土板貼付 ・底部やや上方に径1.8cmの穿孔1ヶ所	・在地生産土器
206	壺 Ia	90-2 西土器溜	器高不明 推定最大径16.5～17.0程度 口径不明 底径3.8	20% 底部のみ	10YR8/3 浅黄橙 5Y4/1 灰	・体部は上下扁平球形 ・突出した底部は貼付オサエ ・内面はヘラナデ	・在地生産土器
207	壺 IV	90-2 SR-1	器高9.2 胴部最大径9.6 口径10.6 小型壺	90% 口縁部及び体部の一部欠損	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/3 淡黄	・直線的に開く短い口縁 ・1本部は方形気味の円柱状 ・底部貼付オサエ ・体部外面に水平タタキ	・在地生産土器
208	壺 Ia	90-2 E拡張区 SR-4	器高29.0 最大径27.5 口径15.3 底径42	ほぼ完形	7.5YR8/3 浅黄橙	・口縁は2段分割成形 ・口縁端部は上方に稜 ・体部は上下扁平球形 ・体部上下分割成形 ・底部円形粘土板貼付	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
209	壺 IIc	90-2 E拡張区 SR-1	器高6.5 最大径9.6 口径10.0 底径	ほぼ完形	7.5YR8/2 灰白	・大きく内湾する体部 ・特に口縁を作り出していない ・体部段階成形 ・丸底	・在地生産土器
210	壺 IIc	90-2 E拡張区 SR-4	器高不明 最大径13.2 口径13.2 底径不明	40% 底部欠損	10YR8/2 灰白	・体部は内湾して立上がるが端部を外反させている ・薄手の器壁	・胎土が異質な感がある
211	高坏 Id	89-1	推定高14.0~15.0 口径19.6 脚柱径3.5 脚台径不明	80% 復元により完形	2.5Y8/2 灰白	・坏は4段階成形 ・坏脚柱に粘土充塡 ・口縁外面に5cm間隔2個一対の円形浮文(竹管刺突) ・坏接合部内外に5mm4本ハケによる波状文 ・坏内面、脚外面ヘラミガキ ・脚台4孔	・在地生産土器
212	高坏 Ia	89-1 SR-1 土器溜A	器高不明 推定口径17.7 脚柱径不明 脚台径不明	20%	10YR8/2 灰白	・坏は二段階成形	・在地生産土器 ・大久保E遺跡では出土数の最いタイプ
213	高坏 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜A	推定高16.5~17.0 推定口径19.8 脚柱径3.7 脚台径不明	25% 復元により完形	7.5YR8/1 灰白	・坏は二段階成形 ・坏、脚柱に粘土充塡 ・内湾後外反して開く曲線状坏 ・孔数不明 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は内湾気味に開く	・在地生産土器
214	塊形高坏 IIb	89-1-W区	器高8.8 口径10.5 脚柱径3.0 脚台径12.0	40% 脚部と口縁の一部欠損	7.5YR8/4 浅黄橙	・塊状の坏 ・1.0~1.5cm程度の短い脚柱 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・坏底・脚柱粘土充塡 ・脚台4孔	・在地生産土器
215	高坏 Ia	89-1-W区	推定高18.0~20.0 口径不明 脚柱径3.5 脚台径16.0	45% 坏部と脚部の一部欠損	10YR6/1 褐灰 10YR8/2 灰白	・脚柱は竹管刺突成形 ・坏底脚柱粘土充塡 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚柱外面ミガキ ・脚台4孔	・在地生産土器
216	高坏 Ia	89-1-W区	推定高14.0~15.0 推定口径17.0~17.5 脚柱径3.3 脚台径不明	30% 坏部と脚柱部のみ	2.5Y8/2 灰白 5YR8/4 淡橙	・坏は二段階成形 ・脚柱は竹管刺突成形 ・坏底・脚柱に粘土充塡 ・孔数不明	・在地生産土器
217	高坏 Ia	89-1 土器溜A	器高不明 口径不明 脚柱径3.5 脚台径14.0	20% 脚部のみ	5YR2/3 淡橙	・脚柱は竹管刺突成形 ・坏底・脚柱に粘土充塡 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台4孔	・在地生産土器
218	高坏 Ia	89-1-W区	推定高14.0~16.0 口径不明 脚柱径3.6 脚台径不明	40% 坏部約1/3と脚柱部	10YR7/6 明黄褐 10YR6/6 明黄褐	・坏は二段階成形 ・坏脚柱に粘土充塡 ・脚柱は竹管刺突成形 ・脚台接合部は曲線状 ・内湾後外反して開く曲線状坏 ・脚台は内湾気味に開く ・孔数不明	・在地生産土器
219	器台 V	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 口径不明 脚柱径3.4 脚台径不明	30% 坏部と底部1/2欠損	7.5YR8/1 灰白	・脚台は内湾気味に開く ・脚台3孔	・在地生産土器
220	塊形高坏 Ib	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 口径不明 脚柱径5.0 脚台径12.5	35% 坏部と底部1/2欠損	2.5Y8/1 灰白	・脚柱は竹管刺突成形 ・2.5cm程度の短い脚柱 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く	・在地生産土器
221	器台 I	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 口径不明 脚柱径3.4 脚台径13.2	65% 復元により完形	7.5Y8/3 浅黄橙	・脚柱中空で坏から脚台へ貫通 ・脚柱外面にヘラミガキ ・脚台は二段階成形 ・脚台裾部外反 ・坏外面に5mm間隔で径6mmの竹管文(押型)が横一列にめぐる ・脚台屈曲部に突帯	・在地生産土器
222	高坏 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高12.5 口径16.2 脚柱径3.7 脚台径12.0	75% 復元により完形	2.5YR7/4 淡赤橙 5YR8/4 淡橙色	・坏は二段階成形 ・坏は曲線的に内折 ・脚柱刺突成形後粘土充塡 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・坏外面縦方向のミガキ ・脚台4孔 ・胎土が若干異質か？	・搬入された可能性
223	高坏 IV	89-1-W区 土器溜B	推定高12.0~13.0 推定口径15.0程度 脚柱径6.0 脚台径不明	50% 坏部と脚部が欠損	10YR7/6 明黄褐 2.5Y8/4 淡黄	・坏は内湾気味に開く ・3cm程度の脚柱 ・坏・脚・台の接合部は曲線状 ・脚台孔なし	・在地生産土器
224	塊形高坏 IIa	89-1 土器溜B	推定高11.0~11.5 口径11.8 脚柱径3.0 脚台径不明	75% 脚部を欠損	2.5Y8/2 灰白	・塊状の坏 ・3cm程度の脚柱 ・坏・脚・台接合部は曲線状 ・脚台は内湾して開く ・脚台4孔	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
225	塊形高坏 IIa	OKE89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 口径11.0 推定脚柱径2.1 脚台径不明	40% 脚柱部と脚部が欠損	5YR7/6 橙	・椀形状の坏 ・坏外底面に脚柱接合痕	・在地生産土器
226	高坏 Ia	89-1-W区	推定高12.0~13.0程度 口径不明 脚柱径3.7 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	10YR7/1 灰白	・脚柱芯刺突成形後粘土充填 ・脚柱外面に縦方向のミガキ ・脚台接合部は曲線状 ・脚台孔数不明	・在地生産土器
227	高坏 Ib	89-1-W区	推定高10.0程度 口径不明 脚柱径3.8 推定脚台径10.2	30% 坏部と脚部欠損	2.5Y8/3 淡黄	・脚柱芯刺突成形後粘土充填 ・4.0cm前後の脚柱 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は内湾して開く ・径4mmの脚台穿孔4ヶ ・脚柱外面ミガキ	・在地生産土器
228	高坏 Ic	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高19.1 推定口径22.0 脚柱径3.8 推定脚台径13.3	95% ほぼ完形	7.5YR7/1 明褐灰	・内湾後外反気味に開く ・曲線状の坏 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は内湾して開く ・坏内底面は丸底状 ・脚台4孔	・在地生産土器
229	高坏 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高17.0 推定口径21.2 脚柱径4.3 推定脚台径18.0	95% ほぼ完形	5YR8/3 淡橙	・内湾後外反気味に開く曲線状の坏 ・坏外面に二段階成形時指オサエ ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台4孔	・在地生産土器
230	塊形高坏 IIb	89-1-W区 SR-1 土器溜C	器高13.0 口径12.6 脚柱径3.5 脚台径17.4	95% ほぼ完形	7.5YR7/6 橙	・塊形状の坏 ・2cm前後の短い脚柱 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・坏底粘土充填 ・脚台4孔	・在地生産土器
231	塊形高坏 IIa	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高14.0~15.0程度 口径14.5 脚柱径3.2 脚台径不明	70% 坏部1/2と脚部の端部を欠損	5YR8/3 淡橙 5YR8/2 灰白	・塊形状の坏 ・3cm前後の脚柱 ・脚台接合部は曲線的 ・脚台は内湾気味に開く ・脚柱外面ミガキ ・脚台6孔	・在地生産土器
232	高坏 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高17.0~19.0程度 口径不明 脚柱径2.8 脚台径16.0	50% 坏部を欠損	7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/2 灰白	・脚柱芯刺突成形後粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台接合部付近に3孔	・在地生産土器
233	高坏 Ie	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高14.0~15.0程度 口径不明 脚柱径3.6 脚台径17.4	25% 坏部と脚部1/2欠損	10YR8/2 灰白	・脚柱芯刺突成形後粘土充填 ・脚台は二段階に成形 ・脚台裾部は外反 ・脚台基部に大小二組の4孔	・在地生産土器
234	塊形高坏 IIb	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高7.5~8.5程度 口径不明 脚柱径3.0 脚台径13.6	40% 坏部と脚部一部欠損	10YR6/4 にぶい黄橙	・塊径状の坏 ・1.5cm程度の短脚柱 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台3孔	・在地生産土器
235	器台 II	89-1-W区 SR-1 土器溜C	推定高8.0~8.5程度 口径不明 脚柱径2.9 脚台径9.5	60% 脚部のみ	2.5Y8/3 淡黄 10YR6/1 褐灰	・脚柱は中空ではない ・脚台は直線的に開く ・脚台6孔	・在地生産土器
236	塊形高坏 IIb	89-1-W区 SR-1	推定高8.5~10.0程度 口径11.5~12.0程度 脚柱径3.4 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	2.5Y8/2 灰白	・塊形状の坏 ・1cm程度の短脚柱 ・脚台底面から粘土充填 ・脚柱外面指オサエ ・坏内外面ヘラミガキ	・在地生産土器
237	高坏 Ia	89-1-E 区	推定高15.0~19.0程度 復元口径22.2 脚柱径不明 脚台径不明	20% 坏部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙 2.5YR7/1 灰白	・内湾後外反気味に開く曲線状の坏 ・坏部二段階成形 ・坏内外に成形時指オサエ	・在地生産土器
238	高坏 Ia	89-1-E 区	推定高16.5~20.0程度 復元口径23.4 脚柱径不明 脚台径不明	20% 坏部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙	・直線的に開く坏底部から稜をもって接合し外反して開く坏口縁	・在地生産土器
239	高坏 Ia	89-1-E 区	推定高16.5~19.0程度 口径20.8 脚柱径3.0 脚台径不明	30% 坏部のみ	5YR8/4 淡橙	・内湾後外反して開く曲線状の坏 ・坏内外に成形時の指オサエ	・在地生産土器 ・大久保E遺跡で最も多い高脚高坏の典型
240	高坏 Ia	89-1-E 区	推定高16.0~18.5 推定口径20.6 脚柱径不明 脚台径不明	10% 坏部のみ	10YR8/1 灰白	・内湾後外反して開く曲線的な坏 ・坏は二段階成形 ・坏内外に接合時指オサエ	・在地生産土器 ・大久保E遺跡高脚高坏の典型

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
241	高坏 Ⅰa	89-1-E 区	推定高18.0~20.0 口径不明 脚柱径4.2 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	10YR7/6 明黄褐 10YR8/4 浅黄橙	・5.5cm程度脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填	・在地生産土器
242	高坏 Ⅰa	89-1-E 区	推定高18.0~20.0 口径不明 脚柱径5.0 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	7.5YR4/4 褐	・5.5cm程度脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填	・在地生産土器
243	高坏 Ⅰa	89-1-E 区	不意16.0~18.0 口径不明 脚柱径3.5 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・6.0cm程度の脚柱 ・脚柱芯部貫通 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線上	・在地生産土器
244	埦形高坏 IIb	89-1-E 区	推定高7.0~8.5 推定口径10.0~10.5 脚柱径3.6 推定脚台径12.0~13.0	20% 脚柱部	7.5YR8/3 浅黄橙 10YR8/2 灰白	・埦形状の坏 ・1.5~1.8cm程度の短い脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填	・在地生産土器
245	埦形高坏 IIb	89-1-E 区	推定高8.0~9.0 推定口径9.5~10.5 脚柱径3.8 推定脚台径10.5~11.5	20% 脚部のみ	10YR8/2 灰白	・2cm程度の脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台は内湾気味に開く ・脚台孔数不明	・在地生産土器
246	高坏 Ⅰa	89-1-E 区	器高不明 口径不明 脚柱径3.5 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙		・在地生産土器
247	埦形高坏 IIb	89-1-E 区	推定器高7.5~10.0 推定口径9.5~11.0 脚柱径3.6 脚台径8.5~10.0	20% 脚部のみ	2.5Y8/3 淡黄	・1cm程度の短い脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底粘土充填	・在地生産土器
248	高坏 Ⅰb	89-1-E 区	推定器高10.5~12.0 推定口径9.5~14.0 脚柱径3.4 脚台径12.2	40% 坏部は欠損	2.5Y8/1 灰白	・2.5cm程度の脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は外反して開く ・脚台5孔	・在地生産土器
249	高坏 Ⅰa	89-1-E 区	推定器高13.5~14.5 推定口径14.0~16.0 脚柱径3.5 脚台径11.2	25% 脚部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙	・4.5cm程度の脚柱 ・脚柱芯部貫通 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開き端部外反 ・脚台4孔	・在地生産土器
250	高坏 IIa	89-1-E 区	推定器高14.0~14.5 推定口径12.0~15.0 脚柱径3.4 脚台径12.5	15% 脚部のみ	2.5Y7/1 灰白	・3cmの脚柱 ・脚柱芯部貫通 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台3孔	・在地生産土器
251	器台 Ⅳ	89-1-E 区	器高不明 口径9.2 脚柱径3.2 脚台径不明	40% 脚柱部と坏部	2.5Y7/1 灰白 N3/ 暗灰	・3.5cmの脚柱 ・脚柱芯部貫通 ・粘土充填ない？ ・脚柱外面ミガキ ・坏底内面にヘラケズリ ・脚台に大小二組4孔	・在地生産土器 ・高坏未成品・破損の可能性
252	埦形高坏 IIb	89-1-E 区	器高11.05 口径11.7 脚柱径3.3 脚台径13.85	90% 復元により完形	2.5Y8/2 灰白	・埦形状の坏 ・2.5cmの脚柱 ・厚手の器壁 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は内湾して開く ・坏内面ヘラミガキ ・脚台4孔	・在地生産土器
253	埦形高坏 IIb	89-1-E 区	器高10.9 口径11.9 脚柱径3.0 脚台径16.0	90% 復元により完形	坏部5YR6/8 橙 脚部7.5YR8/3 浅黄橙	・埦形状の坏 ・2.7cmの脚柱 ・脚柱芯部貫通 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台4孔	・在地生産土器
254	高坏 Ⅰa	89-1-W区 SR-1	推定器高13.0~15.5 推定口径13.0~15.5 脚柱径3.5 推定脚台径12.0~14.0	20% 脚柱部のみ	10YR8/1 灰白 10YR8/2 灰白	・5.5cm裾拡がりの脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底粘土充填	・在地生産土器
255	高坏 Ⅰa	89-1-W区 SR-1	推定高14.0~16.0 推定口径16.0~17.0 脚柱径4.0 推定脚台径12.0~16.0	20% 脚柱部のみ	10YR8/2 灰白 10YR8/4 浅黄橙	・6.7cm程度の脚柱 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底粘土充填	・在地生産土器
256	埦形高坏 IIb	89-1-W 区 SR-3	推定高9.5~10.0 推定口径9.5~11.0 脚柱径3.0	25%	10YR8/3 浅黄橙	・3cmの脚柱 ・埦形状の坏 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚柱外面ミガキ ・脚台接合部は曲線状	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
257	高坏 Ib	90-1	推定高9.5~10.0 推定口径15.3 脚柱径3.0 推定脚台径8.5~11.5	35% 脚部欠損	5YR7/6 橙 5YR6/1 褐灰	・内湾する坏底に曲線的に接合し外反して開く坏 ・脚柱高3cm ・脚台接合部は曲線状	・在地生産土器
258	高坏 Ia	90-1	推定高17.0以上 推定口径22.3程度 脚柱径不明 脚台径不明	10% 坏部のみ	2.5Y7/3 浅黄	・内湾する坏底に外反して開く坏縁が曲線的に接合	・在地生産土器
259	高坏 Ib	90-1	推定高11.0~13.0 推定口径12.0~13.0 脚柱径3.1 脚台径不明	10%以下 坏部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・内湾する坏底に外反して開く坏縁が曲線的に接合 ・坏内底部は大きく窪む	・在地生産土器
260	器台 IV	90-1	器高不明 口径11.9 脚柱径4.6 脚台径不明	40% 脚部欠損	10YR8/3 浅黄橙 10YR5/6 黄褐	・坏は二段階成形 ・脚柱径大きい ・脚柱中空 ・脚柱外面指ナデ	・在地生産土器
261	高坏 Ia	90-1	推定高17.5~19.0 推定口径17.6程度 脚柱径3.1 脚台径不明	65% 脚部欠損	10YR8/3 浅黄橙	・坏は二段階成形 ・内湾する坏底に外反して開く坏縁が曲線的に接合 ・脚柱高7cm ・脚柱芯部貫通成形	・在地生産土器
262	高坏 Ia	90-1	推定高14.5~15.0 推定口径18.8程度 脚柱径3.2 推定脚台径11.0~13.0	70% 口縁脚部の端部欠く	10YR7/3 にぶい黄橙	・坏は二段階成形 ・内湾する坏底に外反して開く坏縁が曲線的に接合 ・脚柱高5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・坏縁接合部外面に貼付突帯	・在地生産土器
263	高坏 III	90-1	器高12.5 口径16.2 脚柱径4.5 脚台径10.2	70% 坏部の口縁部及び脚部の端部を欠く	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	・坏底内面は丸底状で坏底外縁は外反して開く ・坏縁は直線的に開いて端部外反 ・脚台は直線的に開く ・脚台3孔	・在地生産土器 ・特殊台状高坏とも云うべき器形
264	高坏 Ia	90-1 SR-3	推定高13.5~14.0 推定口径18.0~19.0 脚柱径4.3 推定脚台径13.0~14.0	50% 坏部の口縁部及び脚部の口縁部を欠く	10YR8/2 灰白	・内湾する坏底に外反して開く ・坏縁が曲線的に接合 ・坏縁接合部外面に貼付突帯 ・脚柱高5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台基部外面ミガキ	・在地生産土器
265	高坏 Ib	90-1 SR-1	推定高14.0~15.0 推定口径12.0~15.0 脚柱径3.6 脚台径12.0	20% 坏部の口縁部及び脚部の端部を欠く	2.5YR8/4 淡黄	・大きく内湾する坏底 ・脚柱高3.5cm ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台5孔 ・脚柱外面ミガキ	・在地生産土器 ・坏形状は埦形か？
266	高坏 Ib	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.0 推定脚台径12.5~13.0	20% 脚部のみただし、端部欠損	7.5YR8/4 浅黄橙	・大きく内湾する坏底 ・脚柱高3.5cm ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚台6孔	・在地生産土器 ・坏形状は埦形か？
267	埦形高坏 IIb	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.4 脚台径不明	40% 坏部の口縁部及び脚部の端部を欠く	10YR8/3 浅黄橙 7.5YR7/6 橙	・埦形状の坏 ・脚柱高2cm ・脚台接合部は曲線状 ・脚台8孔 ・脚柱外面ミガキ	・在地生産土器
268	埦形高坏 IIb	90-1	推定高7.5~10.0 推定口径10.5~11.0 脚柱径3.0 脚台径不明	30% 脚部と坏部の一部のみ	10YR8/3 浅黄橙	・埦形状の坏 ・脚柱高2cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・直線的に開く脚台 ・径12mm4孔	・在地生産土器
269	高坏 Ia	90-1	推定高18.5~19.0 推定口径18.0~19.0 脚柱径3.6 推定脚台径12.5~16.0	50% 脚部のみただし端部は欠損	10YR8/1 灰白	・脚柱高6.3cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台内面ヘラケズリ ・脚柱外面ミガキ ・径11mm4孔	・在地生産土器
270	高坏 Ia	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.2 脚台径不明	20% 脚部のみ	10YR8/3 浅黄橙	・脚柱高5.5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線的 ・脚柱部ナデ ・径10mm孔数不明	・在地生産土器
271	高坏 Ia	90-1	推定高14.0~15.0 推定口径15.0~15.5 脚柱径3.6 推定脚台径11.0~13.5	20% 脚柱部及び坏部坏縁欠損	10YR7/6 明黄褐 10YR8/3 浅黄褐	・脚柱高6.0cm ・内湾する坏底部 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚柱外面ミガキ ・脚台接合部は曲線状	・在地生産土器
272	高坏 Ia	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.5 脚台径10.5	40% 脚部のみ	7.5YR7/3 にぶい橙 7.5YR8/2 灰白	・脚柱高5.8cm ・脚柱芯部貫通成形 ・脚台接合部は曲線状 ・径10mmの3孔 ・直線的に開く小さな脚台 ・脚柱外面ミガキ	・在地生産土器 ・脚台形状が特異

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
273	埦形高坏 Ⅰb	90-1	推定高10.5~11.0 推定口径10.5~11.5 脚柱径3.7 脚台径10.4	50% 脚柱部及び底部約2/5のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・脚柱高3.5cm ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚柱芯部貫通成形 ・直線的に開く脚台 ・脚台接合部は曲線的 ・径12mm4孔	・在地生産土器 ・埦形状の坏か？
274	埦形高坏 Ⅱa	90-1	推定高10.0~10.5 推定口径10.0~11.0 脚柱径3.0 脚台径14.4	30% 脚部約1/2のみ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	・脚柱高2.5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・直線的に開く脚台 ・径13mm4孔	・在地生産土器 ・埦形状の坏か？
275	高坏 Ⅰa	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径4.0 脚台径不明	20% 脚柱部のみ	2.5Y8/2 灰白	・脚柱高5.5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚柱外面ミガキ ・脚台接合部は曲線状 ・脚台5孔	・在地生産土器
276	高坏 Ⅰb	90-1	推定高8.0~10.5 推定口径11.5~12.0 脚柱径3.5 推定脚台径9.5~11.0	20% 脚柱部のみ	2.5Y8/2 灰白	・脚柱高3.5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・坏底脚柱外面ミガキ ・非常に厚手の脚台	・在地生産土器 ・埦形状の坏か？
277	高坏 Ⅳ	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.4 脚台径13.1	20% 脚部1/4のみ	10YR5/1 褐灰	・直線的に開く長い脚台 ・脚台内面ヘラケズリ ・径8mm4孔	・在地生産土器 ・278と同類の台状高坏か？
278	高坏 Ⅱb	90-1	推定高8.5~9.5 推定口径9.5~10.5 脚柱径4.0 脚台径不明	20% 脚部のみ ただし端部は欠損	10YR8/2 灰白	・脚柱・脚台外面ミガキ ・脚台接合部は曲線状 ・径8mm6孔 ・脚柱高3.1cm	・在地生産土器 ・脚柱は中実か ・埦形状の坏か？
279	埦形高坏 Ⅱc	90-1	推定高7.6~8.3 推定口径7.5~7.8 脚柱径3.2 脚台径8.6	30% 底部約1/2及び脚柱部のみ	10Y6/8 赤褐	・脚柱外面ミガキ ・脚台接合部は曲線状 ・脚台孔なし ・脚柱高1.6cm	・在地生産土器 ・脚柱は中実か ・埦形状の坏か？
280	埦形高坏 Ⅱc	90-1	推定高5.0~5.5 推定口径8.0 脚柱径3.8 脚台径8.4	40% 脚部1/2のみ	2.5Y8/2 灰白	・脚柱高1.3cm ・扁平に内湾する脚台 ・径9mm5孔 ・薄手の坏部	・在地生産土器 ・脚柱は中実か ・埦形状の坏か？
281	器台 Ⅱ	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径4.0 脚台径不明	30% 脚部の上半部のみ	2.5Y8/3 淡黄		・在地生産土器
282	高坏 Ⅰb	90-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.8 脚台径不明	30% 脚柱部のみ	2.5Y8/3		・在地生産土器
283	高坏 Ⅰa	90-1	器高18.5 口径23.6 脚柱径3.5 脚台径16.2	70% 復元により完形	2.5Y8/2 灰白	・内湾する坏底に外反する坏縁が曲線的に接合 ・脚柱高6cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・直線的に開く脚台 ・径11mm4孔	・在地生産土器
284	高坏 Ⅰa	90-1	器高16.7 口径18.0 脚柱径3.7 脚台径15.0	80% 復元により完形	10YR6/1 褐灰	・直線的に開く坏底に外反する坏縁が屈曲して接合 ・脚柱6.5cm ・脚台接合部は曲線状 ・直線的に開く脚台 ・径10mm8孔 ・坏縁接合指オサエ	・在地生産土器 ・脚柱芯部貫通成形か ・粘土充填か
285	高坏 Ⅰa	90-1	器高17.1 口径22.3 脚柱径3.8 脚台径15.0	ほぼ完形	10YR8/3 浅黄橙	・内湾する坏底に外反する坏縁が曲線状に接合 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・直線的に開く脚台 ・径10mm4孔	・在地生産土器
286	高坏 Ⅰa	90-1 SR-1	器高不明 口径22.2 脚柱径不明 脚台径不明	10% 坏部2/5のみ	5YR8/3 淡橙	・内湾する坏底に外反する坏縁が曲線状に接合 ・内外に坏縁接合時指オサエ	・在地生産土器
287	高坏 Ⅰa	90-1 SR-1	器高不明 口径18.0 脚柱径不明 脚台径不明	50% 坏部のみ	10YR8/2灰白	・ほぼ水平の坏底に直線的に開く坏縁が内折するように接合	・在地生産土器 ・庄内式高坏の特徴をもつ
288	高坏 Ⅰa	90-1 SR-1	器高不明 口径19.5 脚柱径不明 脚台径不明	15% 坏部約1/4のみ	10YR8/6黄橙	・内湾する坏底に外反する坏縁が曲線状に接合 ・内外に坏縁接合時の指オサエ	

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
289	高坏 IV	90-1 SR-1	推定高14.5~16.0 口径17.2 脚柱径4.0 脚台径不明	70% 坏部の口縁部3/4及び脚部の端部のみ	10YR にぶい黄橙	・埦形状の坏に逆埦形状の脚台を直接結合させたもの ・脚台孔なし ・脚台内面にヘラナデ	・在地生産土器 ・形状は分銅型高坏ともいうべきもの
290	高坏 Ia	90-1 SR-1	器高13.3 口径16.4 脚柱径2.9 脚台径10.9	ほぼ完形	2.5Y8/2 灰白 10YR8/1 灰白	・内湾する坏底に外反する坏縁が曲線状に接合 ・ほぼ円柱状の脚柱 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は低く直線的に開く ・全面にヘラミガキ ・径5mm4孔 ・かなり厚手の器壁	・大久保E遺跡の高坏の中では特異な例である
291	高坏 Id	90-1 SR-1	器高不明 口径16.0 脚柱径4.2 脚台径不明	50% 坏部と脚柱部のみ	10YR8/3 浅黄橙	・坏は三段階成形 ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底粘土充填 ・脚柱高4.3cm ・直線的に開く坏底から直線的な坏縁が立上がりさらに口縁が外反して接合	・大久保E遺跡の高坏の中では特異な例である
292	埦形高坏 IIc	90-1 SR-1	器高9.0 口径9.8 脚柱径3.0 脚台径7.6	60% 復元して完形	10YR7/1 灰白	・埦形状の坏 ・脚柱高2.5cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚柱外面ミガキ ・形7mm3孔 ・脚台接合部は曲線状	・大久保E遺跡の高坏の中では特異な例である
293	器台 III	90-1 SR-1	器高8.5(13.0) 口径9.9(16.0~17.0) 脚柱径3.5 脚台径11.4	40% 復元して完形	10YR8/3 浅黄橙	・坏底は内湾し丸底状 ・脚柱高3.3cm ・脚柱芯部貫通成形 ・脚台接合部は曲線状 ・直線的に開く脚台 ・径11mm4孔 ・脚柱は中空ではない	・高坏未成品・坏縁欠損の可能性もある ・在地生産土器
294	器台 II	90-1 SR-1	器高7.6(11.5~12.0) 口径10.0(14.0~15.5) くびれ部径3.9 脚台径10.9	完形	7.5YR7/3 にぶい橙 7.5YR4/1 褐灰	・坏底は内湾し丸底状 ・脚柱部なく坏と脚台が接合 ・脚台外面・坏底内面ミガキ ・径8mm4孔	・在地生産土器
295	器台 II	90-1 SR-1	器高不明 口径9.4 脚柱径4.3 脚台径不明	10% 坏部のみ	10YR8/4 浅黄橙 10YR6/6 にぶい黄橙	・直線的に開く坏底	・高坏未成品・坏縁欠損の可能性もある ・在地生産土器
296	高坏 Ib	90-1 SR-1	推定高12.0~13.5 口径不明 脚柱径4.0 脚台径不明	50% 脚柱部及び坏部1/4のみ	7.5YR8/2灰白 7.5YR8/1灰白 7.5YR8/4 浅黄橙	・埦形状の坏 ・脚台高4cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・坏内面・脚台外面ミガキ	・在地生産土器
297	高坏 Ia	90-1 SR-1	推定高15.0~17.0 口径 脚柱径3.5 脚台径不明	30% 脚柱部のみ	7.5YR8/4 浅黄橙	・内湾する坏底 ・脚柱芯部貫通 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台接合部外面指オサエ	・在地生産土器
298	器台 III	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 脚柱径2.3 脚台径8.2	50% 脚部のみ	5Y8/2 灰白 N4 灰		・在地生産土器
299	高坏 Ib	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.4 脚台径9.4	50% 脚部のみ	7.5YR5/2 灰褐 7.5YR7/2 明褐灰	・脚台接合部は曲線状 ・脚柱芯部貫通成形 ・脚台は外反気味に開く ・脚柱外面ミガキ ・径9mm4孔	・在地生産土器
300	高坏 V	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 脚柱径 脚台径不明	40% 脚柱のみ	10YR8/1 灰白	・脚柱は中空 ・薄い器壁 ・胎土は異質	・大久保E遺跡の高坏の中では特異な例である
301	高坏 Id	90-2 西土器溜	推定高15.0~16.0 推定口径20.3 推定脚柱径3.5~4.5 推定脚台径12.0~14.0	30% 脚柱坏部残存	10YR8/2 灰白 2.5YR8/2 灰白	・坏は三段階成形 ・内湾する坏底に外折して開く坏縁が屈曲して接合 ・脚柱高7cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚柱外面ミガキ	・在地生産土器
302	埦形高坏 IIb	90-2 西土器溜	推定高9.5~10.0 推定口径13.0 脚柱径3.3	40% 底部から坏部にかけて約1/2のみ	10YR8/4 浅黄橙	・坏は二段階成形 ・内湾する坏底に内湾して開く坏縁が接合 ・脚柱高1.8cm ・径8mm4孔	・在地生産土器
303	埦形高坏 IIb	90-2 西土器溜	推定高9.5~10.5 口径11.1 脚柱径3.1 推定脚台径8.5~11.0	40% 坏部1/2のみ	7.5Y8/3 浅黄橙 2.5Y8/2 灰白	・埦形状の坏 ・脚柱高2.2cm ・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充填 ・脚台接合部は曲線状 ・径11mm4孔	・在地生産土器
304	高坏 Ia	90-2 西土器溜	推定高13.5~15.0 推定口径15.5~16.5 脚柱径3.1 脚台径12.5	50% 脚部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・直線的に開く坏底 ・脚台接合部は曲線状 ・脚台は直線的に開く ・脚柱芯部不明 ・径10mm4孔	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
305	高坏 Ia	90-2 E拡張区 SR-1	推定高17.0~19.0 口径不明 脚柱径3.2 脚台径不明	30% 脚柱部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充塡 ・脚柱外面ミガキ ・脚柱高9.0cm ・脚台接合部内面オサエ	・在地生産土器
306	高坏 V	90-2 SR-1	器高不明 口径不明 脚柱径3.8 脚台径不明	40% 脚柱部のみ	5Y8/2 灰白 5Y8/1 灰白	・脚柱中空 ・薄い器壁	・大久保E遺跡の高坏の中では特異である
307	高坏 Ia	90-2 SR-1	推定高16.5~19.0 口径不明 脚柱径3.8 脚台径不明	30% 脚柱部のみ	7.5YR5/8 明褐	・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充塡 ・脚台接合部内面オサエ ・脚柱高7.2cm	・在地生産土器
308	高坏 Ia	90-2 SR-1	推定高13.5~15.0 口径不明 脚柱径4.2 脚台径不明	30% 脚柱部のみ	2.5YR6/6 橙	・脚柱芯部貫通成形 ・坏底・脚柱粘土充塡 ・脚柱外面ミガキ ・脚台接合部は曲線状 ・脚台接合部内面オサエ ・径11mm4孔	・在地生産土器
309	埦形高坏 Ib	90-2 西土器溜	器高不明 口径不明 脚柱径3.6 脚台径不明	20% 脚部のみ、ただし端部は欠損	7.5YR7/4 にぶい橙	・外反して開く脚台 ・脚柱高2.0cm ・脚柱芯部不明 ・脚台孔不明	・在地生産土器
310	製塩土器 Ia	89-1-W区	推定高24.0~25.0 口径不明 底部径不明	70% 口縁部及び脚欠損	2.5Y7/3 浅黄	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・厚手の器壁 ・体部三段階成形 ・脚底部平坦 ・2×2.5cm6本右上がりのタタキ ・脚側面上→下ナデオサエ	・在地生産土器
311	製塩土器 Ia	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高不明 口径不明 底部径6.2	20% 脚台部のみ	5Y8/2 灰白	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・厚手の器壁 ・体部右上がりのタタキ ・脚側面上→下ナデオサエ ・体底部内外面にオサエ	・在地生産土器
312	製塩土器 —	89-1-E区	器高不明 口径10.6 底部径不明	10% 口縁部1/10程度のみ	7.5YR8/1 灰白	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・薄手の器壁 ・体部は段階成形 ・体部外面に右上がり ・2×2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器
313	製塩土器 Ib	89-1-E区	器高不明 口径不明 底部径5.1	10% 脚台部1/3程度のみ	5YR8/3 淡橙 N5/ 灰	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・比較的低い脚 ・脚側面上→下ナデオサエ ・脚底面窪み	・在地生産土器
314	製塩土器 Ib	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 底部径4.7	80% 口縁部欠損 復元して完形	7.5YR7/6 橙 N5/ 灰	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・薄手の器壁 ・脚側面上→下ナデオサエ ・脚底面窪み ・短く裾拡がりの脚 ・2×2.5cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・脚の成形は、粘土の上に体基部を直立させた状態で接合し、上から下へナデ付けている
315	製塩土器 Ia	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 底部径5.1	10% 脚台部のみ	7.5YR8/2 灰白	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・厚手の器壁 ・脚側面上→下ナデオサエ ・脚底面平坦 ・体外面右上がりのタタキ	・在地生産土器
316	製塩土器 Ib	90-1	器高不明 口径不明 底部径5.0	50% 口縁部欠損 復元して完形	7.5YR7/4 にぶい橙 N4/ 灰	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・薄手の器壁 ・脚側面上→下ナデオサエ ・脚底面窪み ・短く裾拡がりの脚 ・体側面2.5cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器 ・脚が短く特徴的に裾が拡がるものの体部は直線状に拡がらず、やや膨らみがある
317	製塩土器 Ib	90-1	器高不明 口径不明 底部径5.2	30% 脚台部1/2のみ	5Y4/ 灰オリーブ	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・薄手の器壁 ・脚側面上→下ナデオサエ ・脚底面窪み ・短く裾拡がりの脚 ・体側面右上がりのタタキ	・在地生産土器
318	製塩土器 Ib	90-1	器高不明 口径不明 底部径4.2	10% 脚台部のみ	10YR8/3 浅黄橙	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・厚手の器壁 ・脚底面窪み ・脚側面上→下ナデオサエ ・短く裾拡がりの脚 ・体部段階成形痕	・在地生産土器 ・脚接合時のオサエは極めて小さい ・他の製塩土器よりも小型
319	製塩土器 Ia	90-2 SR-1	器高24.0 口径11.6 底部径5.0	75% 復元して完形	7.5YR7/6 橙 10YR8/2 灰白	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・脚側面上→下ナデオサエ ・脚底面はほぼ平坦 ・体部四段階成形 ・2×2.5cm7本右上がりのタタキ ・体部内面底は棒状器具によって圧迫して成形	・在地生産土器
320	製塩土器 Ib	90-2 西土器溜—	器高不明 口径不明 底部径5.0	10% 脚台部のみ	10YR8/2 灰白	・器形は縦長逆円錐＋脚 ・短い脚 ・脚側面上→下方向ナデオサエ ・脚底面窪み	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外 内	特徴	備考
321	タコ壺 II	89-1-W区 SR-1 土器溜B	器高10.9 口径6.6 底部径4.0	50% 復元して完形	5YR8/4 淡橙	・縦長コップ形状 ・2cm6本水平タタキ ・底面平坦	・在地生産土器
322	タコ壺 IV	89-1 SR-1 土器溜A	器高不明 口径10.8 底部径不明	20% 口縁部のみ復元	10YR8/2 灰白 2.5YR8/2 灰白	・開口部に向かって内湾 ・開口部外面横ナデ ・内面ヘラナデ ・2.5cm5本右上がりのタタキ ・厚手の器壁	・在地生産土器
323	タコ壺 II	90-1 SR-3	器高不明 口径不明 底部径4.3	20% 底部のみ	7.5YR7/6 橙	・縦長コップ形状 ・2cm6本水平のタタキ ・底面平坦	・在地生産土器
324	タコ壺 II	90-1	器高11.4 口径6.7 底部径4.0	ほぼ完形	5YR8/4 淡橙	・縦長コップ形状 ・2cm6本水平のタタキ ・底面平坦 ・開口部付近に径1.2cm1孔	・在地生産土器
325	タコ壺 II	90-1	器高不明 口径不明 底部径4.2	40% 底部及び体部のみ	7.5YR8/2 灰白	・縦長コップ形状 ・2cm6本水平のタタキ ・底面平坦 ・体部段階成形 ・厚手の器壁 ・内面ナデ後ヘラナデ	・在地生産土器
326	タコ壺 II	90-2 西土器溜	器高10.3 最大径8.2 口径6.6 底部径4.0	50% 復元して完形	2.5Y8/2 灰白	・縦長コップ形状 ・開口部内湾 ・体部段階成形 ・粘土ひも巻上げ痕 ・底面平坦	・在地生産土器 ・穿孔がある可能性あり
327	タコ壺 —	90-2 SR-1	器高5.3 口径6.5 底部径3.5	ほぼ完形	7.5YR5/6 明褐	・内底面に指ナデ痕 ・底部に黒斑	・在地生産土器 ・小型の埦の可能性もある
328	鉢 I a	89-1 SR-1	器高9.05 口径15.3 底部径5.2	ほぼ完形	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/2 灰白	・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付のオサエ ・2cm6本右上がりのタタキ	・在地生産土器
329	鉢 I a	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高8.2 口径16.2 底部径5.4	ほぼ完形	2.5Y8/2 灰白	・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付のオサエ ・2cm7本右上がりのタタキ ・内面ヘラミガキ	・在地生産土器
330	鉢 I a	89-1-W区 SR-1 土器溜A	器高不明 口径不明 底部径5.2	50% 底部のみ	10YR8/2 灰白	・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付のオサエ ・右上がりのタタキ	・在地生産土器
331	鉢 IIb	89-1- SR-1 土器溜C	推定高11.1 胴部最大径15.5 口径17.1 底部径3.6	40% 復元して完形	2.5Y8/2 灰白	・内湾して立上がる体部に外反する短い口縁が付く ・底部貼付後タタキ後オサエ ・厚手の器壁	・在地生産土器
332	鉢 III	89-1 SR-1 土器溜C	器高9.1 口径22.3 底部径4.1	90% 口縁部1/3 欠損 復元して完形	5YR8/3 淡橙	・体部は緩やかに内湾 ・特に口縁を作出していない ・タタキ後底部貼付ナデ ・2cm6本右上がりのタタキ ・二次焼成なし ・鉢縁外面はタタキ後ナデ消し	・在地生産土器
333	鉢 I b	90-1 SR-1	器高8.6 口径10.4 底部径4.7	ほぼ完形	2.5Y7/2 灰黄	・大きく内湾して立上がる体部 ・底脚貼付時のオサエ ・内面板状工具ナデ	・在地生産土器
334	鉢 I a	90-1	器高7.7 口径13.2 底部径5.5	80% 復元して完形	2.5Y8/2 灰白 10YR6/1 褐灰	・体部に粘土ひも一本分位の鉢縁部を付け加えている ・右上がりの粗いタタキ ・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付時のオサエ ・内面板状工具ナデ	・在地生産土器 ・体部は甕下体部と同種のものか
335	鉢 I a	90-1	器高7.3 口径16.4 底部径5.2	50% 復元して完形	2.5YR6/4 にぶい黄橙 5YR6/8 橙	・緩やかに内湾して立上がる体部 ・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付時のオサエ	・在地生産土器
336	鉢 I a	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 底部径3.4	60% 底部のみ	2.5Y7/2 灰黄	・大きく内湾して立上がる体部 ・底脚貼付時のオサエ ・内面板状工具ナデ	・在地生産土器

土器番号および図版番号	器種	出土地点	法量（cm）	残存状況	色調 外内	特徴	備考
337	鉢 Ia	90-1 SR-1 土器溜	器高不明 口径不明 底部径5.7	50% 底部のみ	7.5YR7/8 黄橙	・緩やかに内湾して立上がる体部 ・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付時のオサエ	・在地生産土器
338	鉢 Ia	90-1	器高不明 口径不明 底部径5.7	20% 底部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付時のオサエ ・体部は不明	・在地生産土器
339	鉢 Ia	90-1	器高不明 口径不明 底部径4.6	10% 底部のみ	5Y8/1 灰白	・緩やかに内湾して立上がる体部 ・底脚貼付時の底面オサエ ・底脚貼付時のオサエ	・在地生産土器
340	鉢 —	90-1	器高不明 口径不明 底部径4.5	10% 底部のみ	7.5YR6/8 橙	・高台貼付時の底面オサエ ・高台貼付時のナデ ・体部は不明	・製塩土器の可能性
341	鉢 IIa	90-1 SR-1	器高6.8 口径10.8 底部径3.9	ほぼ完形	10YR8/2 灰白	・体部は内湾して立上がるが端部をわずかに外反させる ・高台状の底部貼付 ・内面板状工具によるナデ	・在地生産土器
342	鉢 III	90-1	器高5.8 口径9.5 底部径3.3	50% 復元して完形	10YR8/3 灰白 10YR7/4 にぶい黄橙	・体部は内湾して立上がる ・特に口縁を作出していない ・底部貼付オサエ ・外面ナデ	・在地生産土器
343	鉢 IIa	90-1 SR-3	器高5.7 口径10.7 底部径3.7	70% 復元して完形	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	・体部は内湾して立上がるが端部をわずかに外反させる ・底部貼付オサエ ・内面板状工具によるナデ	・在地生産土器
344	鉢 III	90-1	器高7.2 口径9.1 底部径3.4	完形	2.5Y8/2 灰白	・体部は内湾して立上がる ・体部は縦長 ・特に口縁を作出していない ・底部貼付オサエ ・内面板状工具によるナデ ・外面ナデ	・在地生産土器
345	鉢 III	90-1 土器溜B	器高10.35 口径17.0 底部径3.8	ほぼ完形	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y8/2 灰白	・体部は内湾して立上がる ・体部は横長 ・底部貼付オサエ ・特に口縁を作出していない ・外面タタキ後ナデ	・在地生産土器
346	鉢 Ia	90-2 SR-1	器高不明 口径不明 底部径4.5	10% 底部約1/3のみ	10YR8/1 灰白	・緩やかに内湾して立上がる体部 ・底部貼付時の底面オサエ ・底部貼付時のオサエ	・在地生産土器
347	鉢 III	90-2	器高5.2 口径10.2 底部径3.4	95% 口縁部一部欠損 復元して完形	10YR8/1 灰白 10YR8/2 灰白	・体部は内湾して立上がる ・特に口縁を作出していない ・底部貼付オサエ後タタキ ・2cm6本右上がりのタタキ ・二次焼成なし	・在地生産土器
348	こしき	89-1-W区 SR-1	器高10.45 口径15.8 底部径5.0	80% 復元して完形	2.5Y8/2 灰白 7.5Y8/2 灰白	・体部二段階成形 ・底部に径12mmの穿孔 ・底部貼付オサエ後タタキ後穿孔 ・2.5cm8本右上がりのタタキ	・在地生産土器
349	こしき	90-1 SR-1	器高12.8 口径17.7 底部径4.2	40% 復元して完形	2.5Y8/2 灰白	・底部に径12mmの穿孔 ・底部貼付オサエ後タタキ後穿孔 ・2.5cm7本右上がりのタタキ	・在地生産土器
350	不明	90-1 SR-1	器高不明 口径不明 底部径4.7	10% 底部のみ	2.5Y7/2 灰黄	・内面にケズリ成形痕 ・外面に指オサエ	・在地生産土器 ・器種など不明な点が多い
351	埦	90-1	器高3.7 口径9.1	80% 口縁部約1/2欠損	2.5Y8/2 灰白	・内湾して立上がる浅い体部 ・丸底 ・内外面ヘラミガキ	・胎土は非常に緻密

図　　版

図版第1　全景

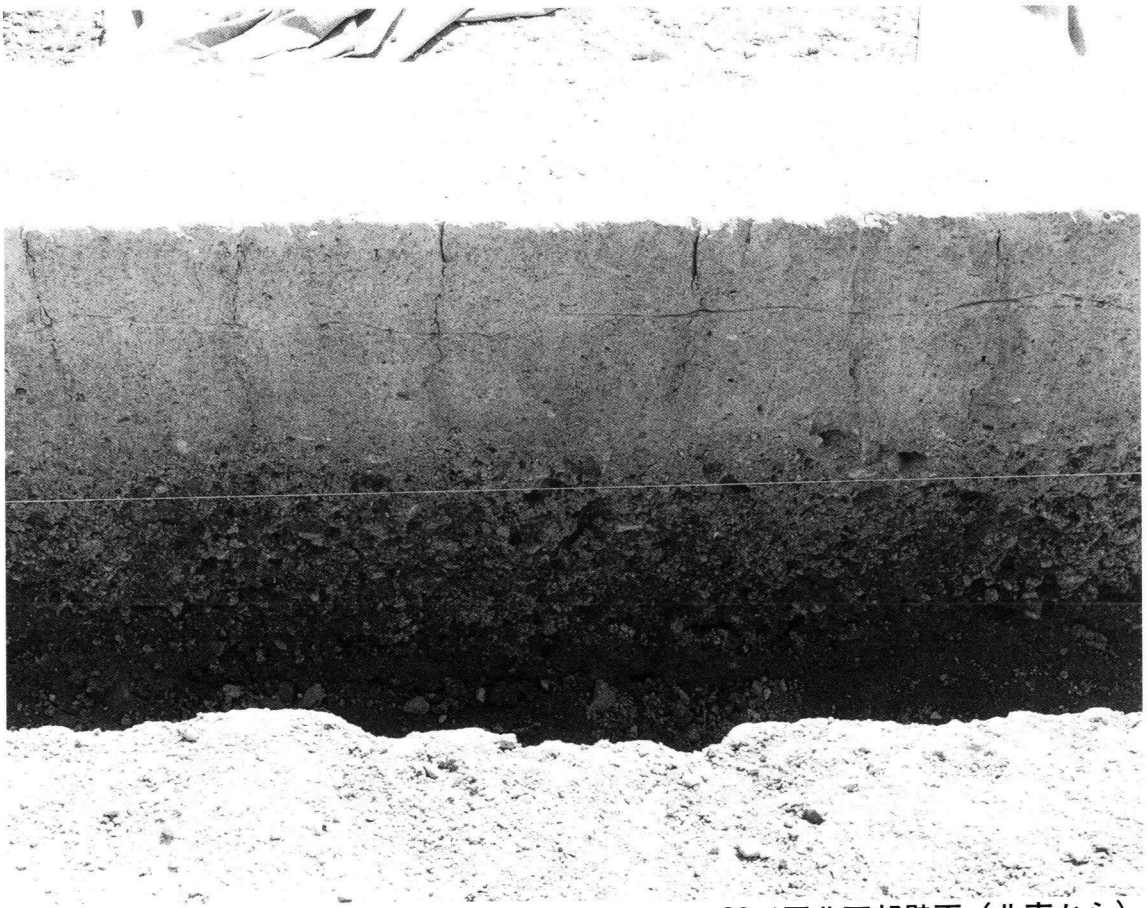
調査区全景（北西から）

89-1-W区全景（北から）

90-1区（北東部分）

90-2区

89-1-W区SR1と壁面（東から）

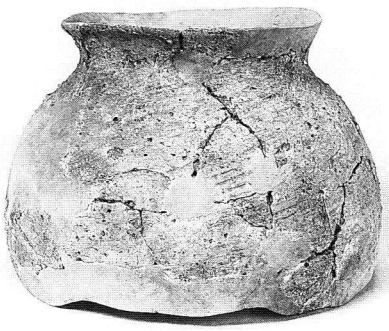


90-1区北西部壁面（北東から）

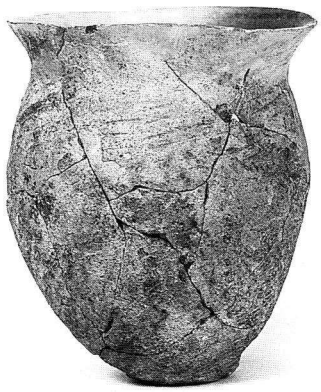
90-1区北東部SR1付近

90-2区流路状況（南東から）

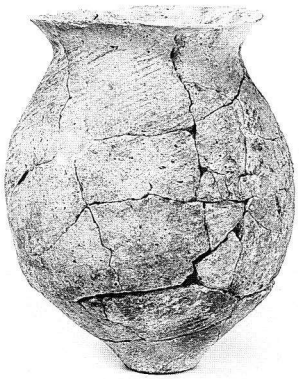
図版第5　遺物



1



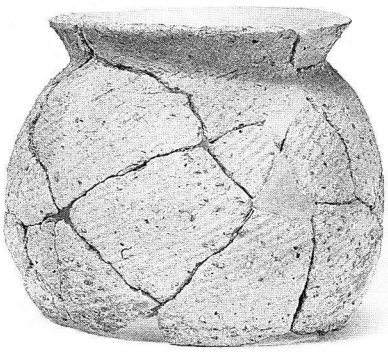
3



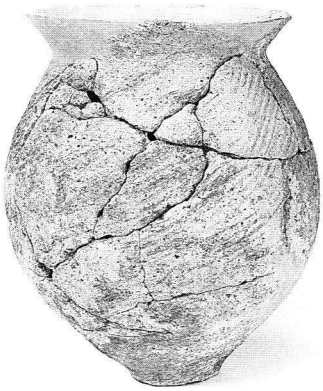
4

11

12

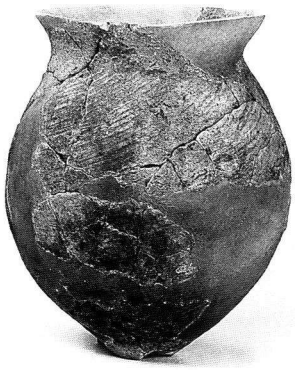


20



21

22



23

24

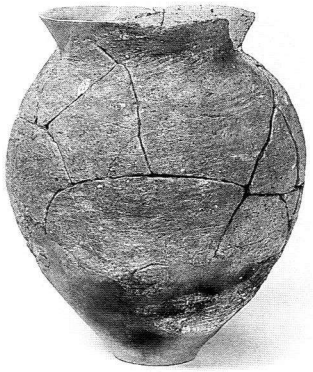
25

29

31

32

33



34

36

40

42

43

46

47

59

60

61

67

68

69

77

78

79

80

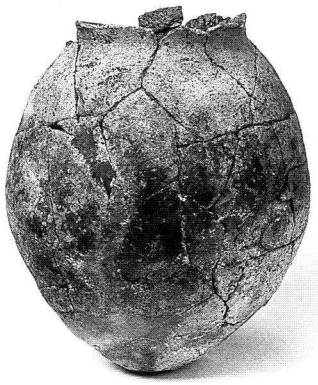
81

84

86

87

88



90

104

106

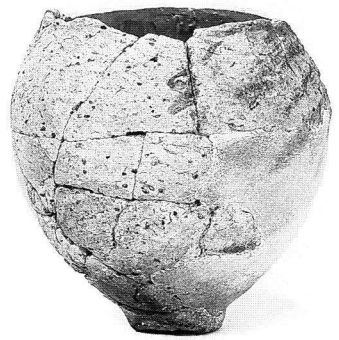
111

113

115

116

117

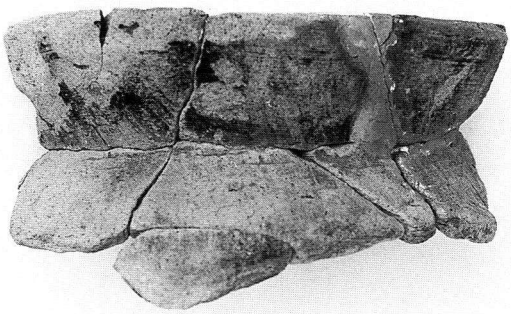


118

119

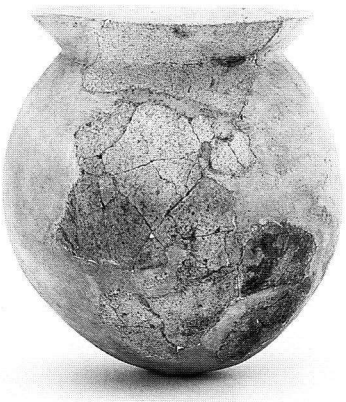
120

121

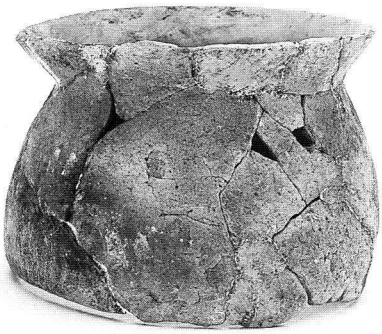


122

128



129

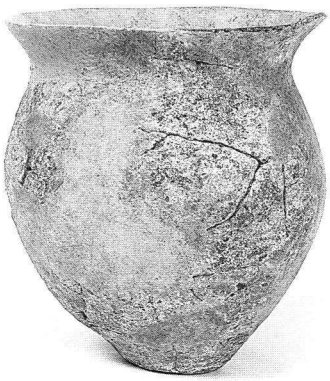


131

132

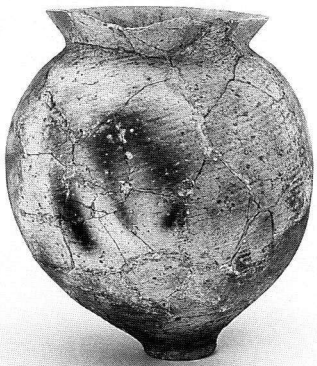
133

134



135

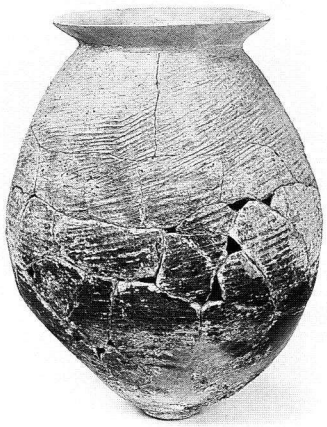
136



137

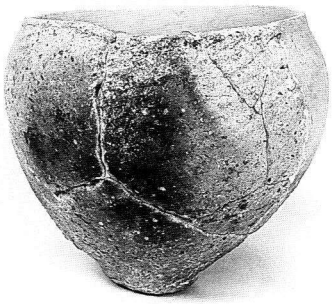
138

139

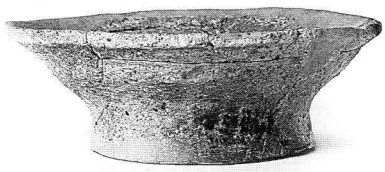


140

141



144



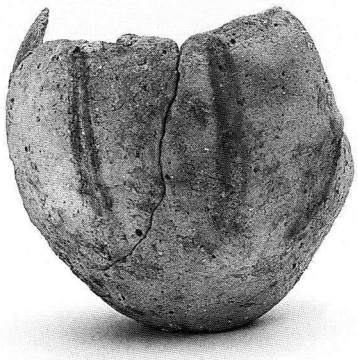
151

152

154

155

156



157

158

159

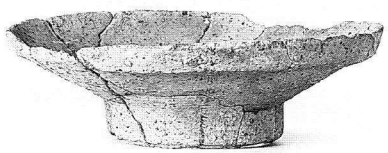
160

161

162

163

164



166

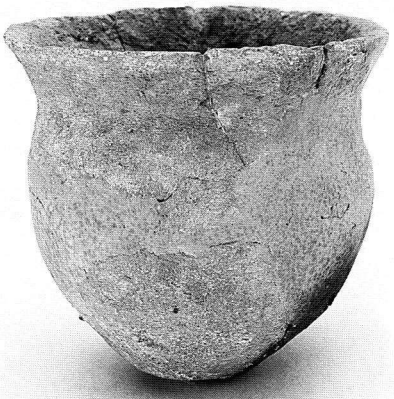
173

174

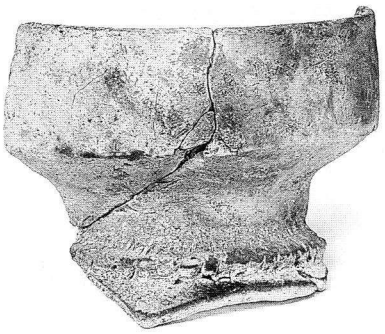
175

178

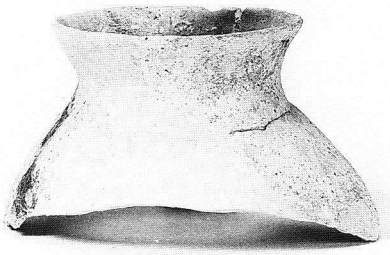
179



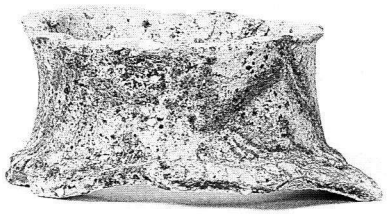
180



184



185

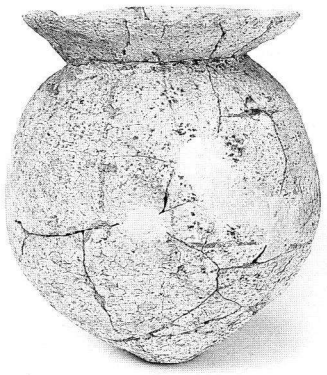


189

190

191

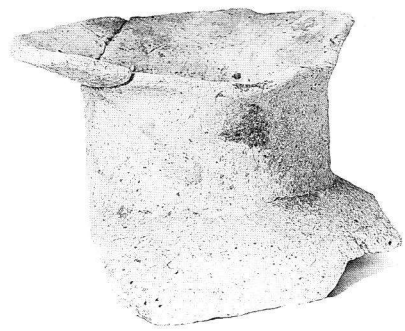
192



197

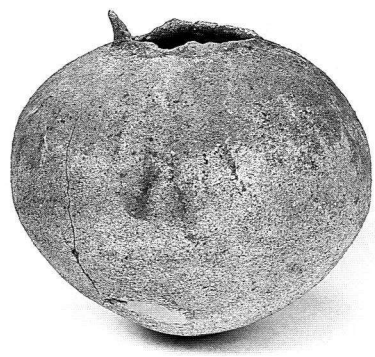
198

199



200

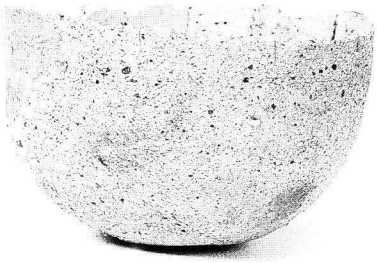
204



205

207

208



209

210

211

213

221

222

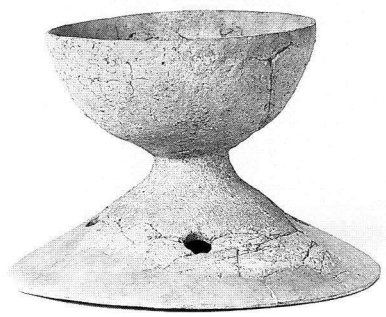
223

224

225

228

229



230

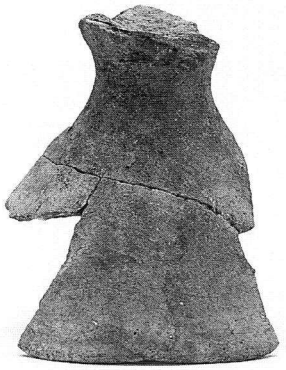
231

233

234

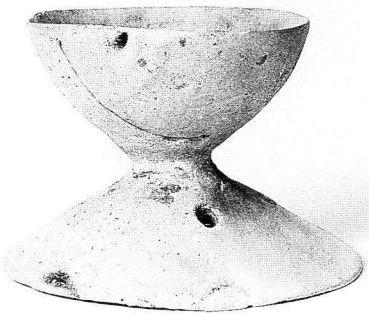
235

242



250

251



252

253

260

263

267

280

283

284

285

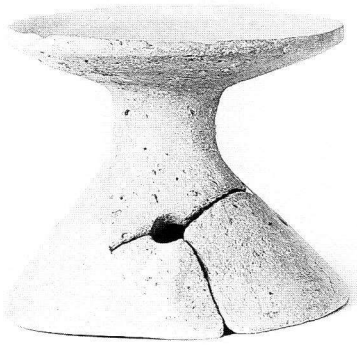
287

289

290

291

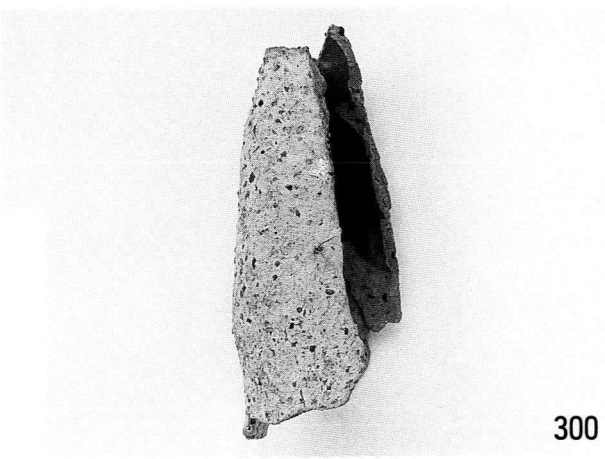
292



293

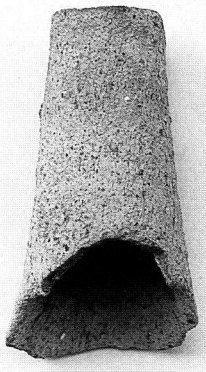
294

297

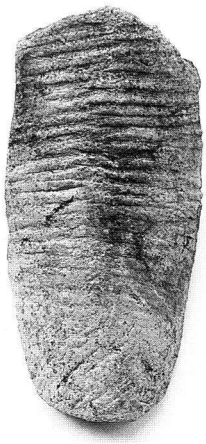


300

302

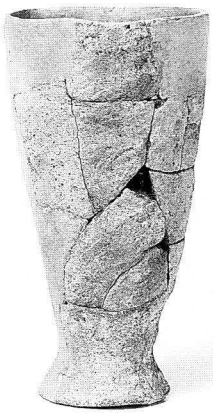


306



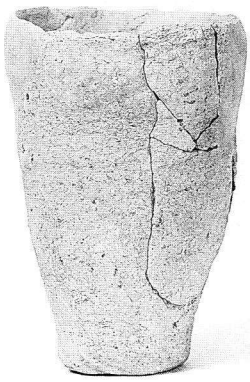
310

314

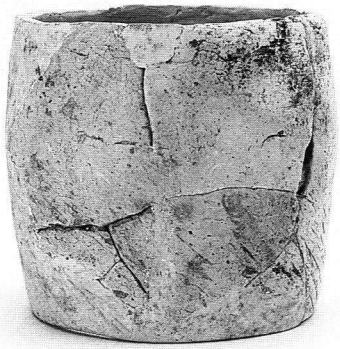


316

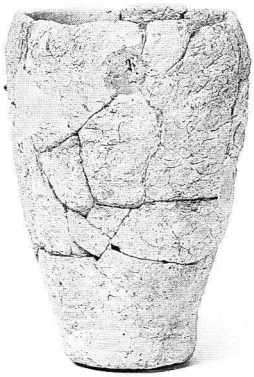
319



321



322

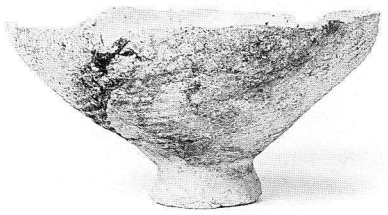


324

326

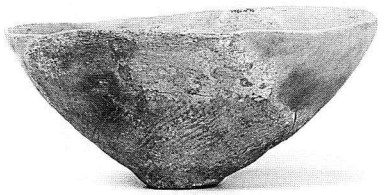
327

328



329

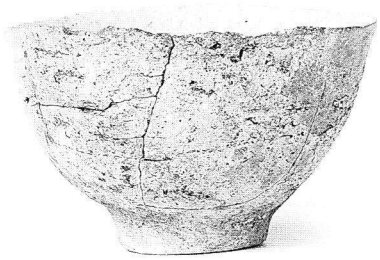
331



332

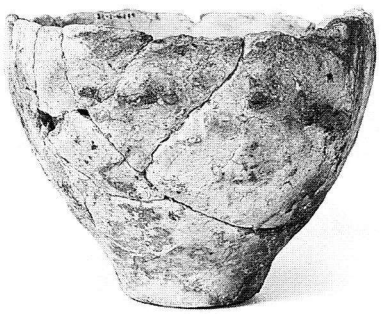
333

335



341

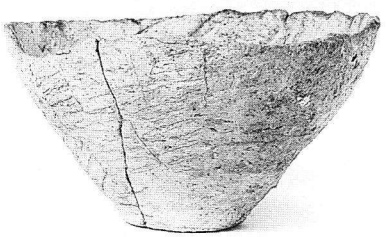
343



344

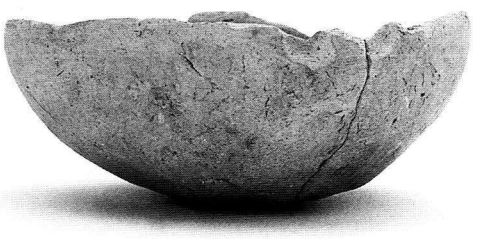
345

346



347

348



351

報告書抄録

ふりがな	おおくぼEいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	大久保E遺跡発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	I
シリーズ名	熊取町文化財調査報告
シリーズ番号	第27集
編著者名	前川　淳
編集機関	熊取町教育委員会
所在	〒590－04　大阪府泉南郡熊取町大字野田2244　TEL0724-52-1001
発行年月日	１９９７年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東緯 ，，”	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおくぼEいせき 大久保E遺跡	おおさかふせんなんぐんくまとりちょうおおくぼ 大阪府泉南郡熊取町大久保127-1他４筆	27361	89-1	34’20’45”	135’20’45”	89-1区 19890701 ～19890930	507	仮排水用雨水管設置工事
			90-1			90-1区 19900801 ～19910301	517.5	道路建設工事
			90-2			90-2区 19900801 ～19910301	400	宅地開発工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大久保E遺跡	集落遺跡	弥生時代～古墳時代	自然流路３ 溝　１	土師器破片数6468点 （実測可能数402点）	弥生時代から近世までの複合遺跡
		中世	包含層		

熊取町埋蔵文化財報告第27集

大久保E遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ

98-1区・90-1区・90-2区

発 行 日　平成９年３月31日

編集発行　熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町大字野田2444番地

印　　刷　摂河泉文庫